



令和 6 年度

文部科学省事業

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業

SGH ネットワークスクール

管理機関 学校法人大妻学院

拠点校 大妻中野中学校・高等学校

成果報告レポート

The WWL Consortium Hub School Project

Student Works Anthology 2024

Otsuma Nakano Junior & Senior High School



Member of
the Associated Schools
Network

大妻中野中学校・高等学校
2025. 3. 31

Contents

I. WWL 拠点校、校長、運営指導委員、連携校からのメッセージ	
・ WWL 成果レポートの刊行にあたって 拠点校 大妻中野中学校・高等学校校長 諸橋 隆男	2
・ 未来教育における生徒エージェンシーの実践と展望 大妻女子大学・大学院教授 服部 孝彦	3
・ WWL 運営指導委員 成蹊大学客員教授、元キューバ特命全権大使 渡邊 優	4
・ WWL 運営指導委員 玉川大学教授 拠点校ユネスコスクールアドバイザー 小林 亮	5
・ WWL 運営指導委員 大東文化大学准教授 グローバル化に対応した外国語教育研究事業 野澤 督	6
・ WWL 連携校から - 大妻多摩中学高等学校 校長 熊谷昌子	7
・ WWL 連携校から - 台湾 聖功女子高級中學 校長 許佳涓 Principal Ms. Kate	7
・ WWL 拠点校の取り組み成果 Student Works Anthology 大妻中野中学校・高等学校教頭 水澤 孝順	8
II. 令和6年度 WWL コンソーシアム構築支援事業拠校 構想計画書の概要	9
III. AL ネットワークとそれを活用した取り組み報告と生徒の成果集	
・ WWL ALネットワーク 令和6年度全体連絡協議・運営指導委員会	12
・ WWL 拠点校 令和6年度カリキュラム開発・実践の成果報告@グローバル人材育成学会	13
・ WWL 拠点校 令和6年度の取り組み成果発表会@大妻講堂	16
・ WWL ALネットワークを活用したカリキュラム開発・実践 フロンティアプロジェクトチーム	17
・ WWL ALネットワークを活用したカリキュラム開発・実践 S-TEAM	25
・ WWL ALネットワークを活用したカリキュラム開発・実践 第5回ユネスコスクール関東ブロック大会	28
・ WWL ALネットワークを活用したカリキュラム開発・実践 模擬国連	32
・ WWL ALネットワークを活用したカリキュラム開発・実践 グローバル・キャリア・セミナー	36
IV. 研究開発・実践の成果報告 - カリキュラム開発と生徒の成果集	
・ WWL拠点校 中1探究(理科、国語) 中2探究(社会) 中3探究(数学)	39
・ WWL拠点校 中3公民とユネスコスクール活動と中3LHR 服のチカラプロジェクト	47
・ WWL拠点校 高1GIS Iの取り組みとテンプル大学JAPANとの連携プログラム	53
・ WWL拠点校 高2GIS II、理系探究論文の取り組みと文科省全国高校生フォーラムへのチャレンジ	57
・ WWL拠点校 フランス語科・複言語教育の取り組みと文科省事業(グローバル化に対応した外国語教育)	65
V. 研究開発・実践の成果報告 - 海外プログラムと生徒の成果集	
・ WWL拠点校 タイ・チェンマイ探究スタディツアー、UCL Japan Youth Challenge	69
・ WWL拠点校 オーストラリア、NZ 姉妹校・連携校短期研修	74
VI. 開発研究・実践の成果報告 - 内容言語統合型 Cross-Curriculum English	
・ Cross Curriculum English のカリキュラムについて	76
・ Cross Curriculum English Program J2&J3 GLC Communication English	78
・ Cross Curriculum English Program H1&H2 GLC Communication English	81
・ WWL 拠点校 開発研究・実践 カリキュラム Beyond School Art 企業連携プログラム	94
・ WWL 拠点校 成果発表プレゼンテーションコンテスト成果物 WWL Presentation Contest	95
VII. WWL拠点校として - 今後に向けて	100

I. WWL 拠点校 成果報告レポートの刊行にあたって

WWL 拠点校 大妻中野中学校・高等学校
校長 諸橋 隆男



大妻中野中学校・高等学校は、
・「SGH ネットワーク校」であり、
・「ユネスコ・スクール加盟校」であり、
・2024 年には「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業のグローバル 人材育成強化拠点校」として文部科学省の採択を受けた。

私たちは、WWL 事業への参加を申請するにあたり、次のように構想している。

【繋ぐ・行動する- Beyond School アプローチによる協働型の地球市民教育】

本校は、これまで SGH ネットワーク校として「国際共生都市・東京から、行動し、繋ぐグローバルリーダーを創る」ことを掲げ、さらにユネスコ・スクールとして、SDGs の達成を課題として設定し、ICT を活用したチームプロジェクト型のグローバル探究教育の開発に取り組んできた。特に、複言語、STEAM、探究型留学、CLIL 型英語教育などで、学校を超えたチャレンジをカリキュラムに導入し、モチベーションとインスピレーションを高める実践を行っている。

これまで連携、協働した多様な大学、学校、機関と共に取り組んできた経験を踏まえ、一層、学校の枠を超えて (Beyond School アプローチ)、対面とオンライン双方の特質を活かし、ポスト SDGs の時代に求められる「グローバル well-being 2030」の実現に貢献するマインドとスキルの体得のためのカリキュラム・プログラムを開発する。そのために、連携校、協働機関を互いの重要なリソースとしてリスペクトし、生徒、教職員ともにチームビルディングで取り組んでいく。

ここに掲げた構想調書の一部にあるように、大妻中野は、グローバル教育校として研鑽を積み重ね、その成果を広く発信するという校内文化を継続的に育て続ける学校であると自負している。

「止めることをしない」

これは大妻中野を語るときに重要なキーワードである。若者を取り巻く環境が国内外で大きく変化し続ける現代社会において、

「1 年改革を待つことは、生徒を 10 年遅らせてしまうことになる」

という共通認識を学校全体が持っている。そういった学内の雰囲気は生徒の背中をそっと押すことに繋がっている。

チャレンジを応援する、失敗を恐れないという学校文化と生徒の主体的・意欲的な精神が相乗効果を生み、例えば留学への意欲、外部教育機関との連携に繋がるプログラムへの参加意欲が非常に強くなり、Beyond School としての飛躍を遂げていると感じている。

これらの挑戦の先にあるものが「学芸を修めて人類のために」という大妻中野中学校・高等学校の建学の精神である。

ひとりひとりが自己の幸福のみならず、社会全体の幸福のために必要な課題を探し続け、具体的目標として設定し、克服するための努力を続ける。

こういった学内の学習環境の充実が、文部科学省から採択をいただいた学校として責任を果たすエネルギーとなっている。

今後も、内外の多くの教育機関との連携を模索し、協力をいただくことにより、未来に通じるカリキュラム構築のリーダーとなるべく精進してきたいと考えている。

引き続き皆様の応援をいただきたくお願いする次第である。

未来教育における生徒エージェンシーの実践と展望－WWL 拠点校大妻中野中学校・高等学校の取り組み



大妻女子大学・同大学院教授
大妻中野中学校・高等学校グローバル教育スーパーバイザー
言語学博士 服部孝彦

グローバル化が著しく進展し、未来の見通しが極めて不透明なVUCA時代において、我々は子どもたちにどのような力を育むべきかという問いに直面している。ここで「VUCA」とは、Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字を取った略語であり、急速に変動し、将来予測が困難な現代社会の特性を端的に表現する。このような時代背景の下、従来の知識暗記中心の教育はその価値を失いつつあり、単なる情報の記憶ではなく、既存の知識やスキルを有機的に組み合わせ、直面する課題に対して新たな解決策を生み出す「課題発見能力」や「課題解決能力」が求められるようになっている。

こうした教育の方向性を明確に示す試みの一つとして、経済協力開発機構(Organisation for Economic Co-operation and Development、以下「OECD」)が2015年に立ち上げた「教育とスキルの未来2030プロジェクト」(以下「Education 2030」)が挙げられる。このプロジェクトは、2030年のVUCA時代に対応するために、子どもたちに必要な力とは何か、またその力をどのような教育手法によって育むべきかという根本的な問い合わせから出発している。Education 2030は、世界各国の教育研究機関との連携を深め、現場の教員や生徒たちの実際の声を集約しながら、現代教育が直面する課題と求められる能力の在り方を明らかにすることを目的としている。

さらに、Education 2030の成果として、2019年には「OECD学びの羅針盤2030」(OECD Learning Compass 2030)が発表された。このLearning Compassは、未来の教育の望ましいビジョンを描いた進化し続ける学習の枠組みであり、個人のウェルビーイングと集団のウェルビーイングの向上に寄与する方向性を示している。特に注目すべきは、この枠組みの中核をなす「生徒エージェンシー」(Student Agency)という概念である。生徒エージェンシーは、従来の学校で一般的に使用される個人レベルの「主体性」とは一線を画し、単に自らの意見を持ち発信するだけではなく、周囲との関係性を重視し、社会全体を理解しながら、自らの役割を認識し、積極的に変革を起こすための能力を意味する。

こうした背景を踏まえ、大妻中野中学校・高等学校では、学校全体で生徒エージェンシーの育成に取り組んでいる。学校は、単なる知識の習得に留まらず、生徒が自ら課題を見つけ出し、それに対して解決策を模索し、実際に行動に移すことができる環境づくりを推進している。この取り組みは、従来の個々の主体性の枠を超えて、社会やグローバルな視点を含む包括的な能力の育成を目指している。大妻中野中学校・高等学校における生徒エージェンシーの強化は、将来のグローバルリーダーの育成に大きな期待を寄せられており、今後の教育改革の先駆けとなる可能性を示している。

Education 2030とLearning Compassは、教育における価値観の転換を促すものであり、未来の教育モデルとして多くの国際的な議論の対象となっている。これらの試みは、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性に満ちた現代社会において、子どもたちが柔軟かつ創造的に問題解決に取り組む力を養うために不可欠である。従来の一方向的な知識伝達から、相互作用や実践を重視する新たな教育手法への移行は、今後の社会全体の発展に大きく寄与するであろう。

以上のように、Education 2030およびLearning Compassの取り組みは、子どもたちに必要な力を体系的に明らかにし、育成するための画期的な試みである。大妻中野中学校・高等学校が推進する生徒エージェンシーの育成は、こうした国際的な教育改革の一環として、将来のグローバル社会において大きな役割を果たすことが期待される。今後、これらの試みがさらに発展し、広く普及することで、未来における教育の質の向上と、子どもたちが直面する多様な課題への対応力の向上が実現されることを期待している。

WWL 運営指導委員から Expectations on Otsuma Nakano's Global Citizenship Education



成蹊大学客員教授、元キューバ特命全権大使 渡邊 優

Visiting professor of Seikei University, Former Japan Ambassador to Cuba,

Masaru Watanabe

Otsuma Nakano's research and practice of global education and inquiry-based education is extremely timely in today's world, which is said to be at a "turning point" in history. I would like to share with you what I think about this "world today" based on my experience of dealing with countries around the world for nearly 40 years as a diplomat.

The world today has two characteristics, in my view. One is that "the world is huge and diverse", and the other is that "the world is small and everything is closely connected". You might have thought, "Oh, Mr. Watanabe, you are contradicting yourself? That's right. But both observations are correct. I'll tell you why.

There are 8 billion people in the world in about 200 countries with 7,000 different languages, 4,000 different ethnic groups, and countless religions and cultures. Resources, wealth, and military power are also totally different from country to country. People's values and ideologies are also diverse.

On the other hand, science and technology and the creation of international institutions have advanced, and now you can go anywhere in the world at a moment's notice and get things from all over the world in a few days. Your iPhone is Apple brand of the United States. But many parts and components are made not only in the United States, but also in China, Japan, Taiwan, Korea, Vietnam, Thailand, the Philippines, Singapore, Mexico, Brazil, Australia, India, the United Kingdom, France, Norway, and many other countries. In addition, pandemics, environmental pollution, and international organized crime quickly spread around the world and have become urgent global issues. The world is now getting smaller and everything closely connected.

In this diverse but closely interconnected world, we must work together to address economic, health, and other issues of global scale. To achieve this, first, each of us must recognize ourselves as "global citizens", second, we must be interested in and learn about the issues facing the world and have our own ideas, third, we must communicate and discuss with various people all over the world to deal with the global issues, and fourth, we must take action.

In fact, global education and inquiry-based education at Otsuma is an effort to put this into practice. I just said, "Communicate and discuss with various people to deal with the global issues. In this respect, there are two things I would like you to keep in mind. The first is to express your thoughts clearly. If you do not express your thoughts, it is as if you have no thoughts.

The second is not to be complacent. Because we are not almighty, we are not omniscient and we may be wrong. And because people live in different circumstances and may have different beliefs and ideas. As I said at the beginning, "the world is diverse", so if we try to impose our "solutions" without knowing the differences among countries and people, it may not solve the problem they face. What people in war-torn countries or very poor developing countries can do to combat climate change may be different from what people in rich countries can do.

To put it another way, it is imperative to both "talk" and "listen. When we talk about communicating with people around the world, English is the most effective language. It is estimated that 1.5 billion to 2.1 billion of the world's 8 billion people speak English on a daily basis. One in four people in the world!

Learning English is now a necessity for us.

But now let's change the perspective. The same number means that three out of four people in the world do not speak English as their first language. Therefore, if possible, learning another foreign language will further enrich your communication. At Otsuma Nakano Junior and Senior High Schools, you also study French, which is a practical approach in this respect.

French or Spanish, spoken in many countries after English, would be one choice as a second foreign language. Or it would be great to learn the language of a country in which you are interested or the language of our neighbors. When a foreigner speaks to us in our language, we feel a sense of familiarity. Language brings people closer together. I myself have learned Spanish and Portuguese in addition to English through my work, and it has been very useful and helpful, and enriched my life.

In closing, here is a quote I would like to share with you in Spanish.

"Un idioma diferente es una visión diferente de la vida." Translated into English,

"A different language is a different vision of life."

In addition, one more quote, this time in Portuguese. It is a quote from a famous Brazilian writer, Paulo Coelho, a writer like Keigo Higashino or Haruki Murakami in Japan.

"Uma coisa é você achar que está no caminho certo, outra é achar que seu caminho é o único."

In English, "It's one thing to feel that you are on the right path, but it's another to think that yours is the only path."

Last but not least, I look forward to seeing what all the students of Otsuma Nakano have achieved as a WWL hub school.

Muchas gracias por su atención. Thank you for your attention.

WWL 運営指導委員から – ユネスコスクール 大妻中野中学校・高等学校への期待 -



玉川大学教育学部教授
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet) 運営委員長
大妻中野ユネスコスクール ASPUnivNET支援アドバイザー
WWL拠点校運営指導員
小林 亮

貴校の生徒のみなさんの WWL 成果報告としての英語およびフランス語でのご発表一つひとつに深い感銘を受けました。それはみなさんのプレゼンテーション・スキルの高さに感服したということもあります。さらにそれ以上に、みなさんが現在人類社会が直面しているさまざまな問題や課題に正面から向かい合い、当事者としてそれらの課題の改善や解決を見つけてゆこうとする真摯な姿勢がこちらに伝わってきたからです。これはまさに貴校のみなさんが地球市民(Global Citizens)として国内外の諸問題を見つめ、その解決に取り組もうとする主体的で創造的な態度を育んでおられることの証です。地球社会に対するみなさんのような姿勢を持った次世代リーダーのユースがいる限り、さまざまな深刻な問題に直面していたとしても人類の未来には希望が持てるのではないかと本当に心強く感じました。

みなさんご承知の通り、大妻中野中学校・高等学校は 2022 年 11 月にユネスコスクール(ASPnet)に正式加盟されました。ユネスコスクールは国際連合の専門機関ユネスコが、平和、人権、民主主義、ジェンダー平等、持続可能な開発のための教育(ESD)、地球市民教育(GCED)などの理念を学習者の心に育成するために 1953 年に創設した世界的な学校間ネットワークです。現在日本国内だけで約 1,100 校、世界には 182 ケ国に約 12,000 校の加盟校をもつ巨大なネットワークですが、ユネスコスクール加盟校として大妻中野で学んでおられるみなさんには、まさにこの

世界の 12,000 校のユネスコスクールで学んでいる児童生徒たち、また先生たちと同じ理念を共有する「仲間」なのだとということをぜひ再認識して頂きたいと希望します。そして、機会があればぜひこの 12,000 校の仲間たちと交流の機会をもち、世界に友だちの輪を広げていって下さい。これこそ地球市民に期待される態度であり、今回の成果発表会でのすばらしいプレゼンテーションにおいて地球社会の平和や共生に向けて当事者として高い意識と能力(コンピテンス)をもったみなさんには十分にそれができる資質が備わっていると確信するからです。

分断や対立の広がる世界は現在、深刻な状況にありますが、みなさんの創意工夫や努力で世界はより良い方向へと変えてゆけます。そして世界をより良い場所へと変容させていく努力をしていくことは、みなさん自身の人生をより有意義で満たされたものへと「変容」させていくことにもつながるのです。大妻中野でのさまざまな学びを通じて世界の現状に対する冷静な認識を養いながらも、より平和で公正で持続可能な未来への希望をもってご自分の中にある潜在能力を創造的なアクションへと開花させていって下さい。大妻中野中学校・高等学校のみなさんの人生が充実した、世界につながる、そして恵み多き旅路となりますよう心から強く祈念しています。

WWL 運営指導委員から -「その問いはなぜ？」WWL 拠点校成果発表への助言 -



大東文化大学准教授

文部科学省グローバル化に対応した外国語教育研究事業(フランス語)

WWL 拠点校運営指導委員

野澤 睿

成果発表会へ参加させていただきましてありがとうございました。今年も大妻中野の生徒さんたちの素晴らしいパフォーマンスに感動しました。ひとつチャレンジしてもらいたいことを書きたいと思います。

いま、皆さんには、プレゼンの一つの形を獲得する段階にあるのだと思います。プレゼンの形を習得して外国語で発表するわけですから、生徒たちの学びに対する熱意は素晴らしいと思います。力ある皆さんだからこそ挑戦してほしいことがあります。

皆さんは情報をよく調べてまとめていました。そこに加えてほしいものがあります。独自な視点です。服部先生が「なぜそのテーマを選んだのか」と複数回質問されていました。学問においてこの問いはとても大切です。そこに発表者のビジョンがかいま見えるからです。

でも、もっと時間をかけてもっと深く掘ってみてください。例えば、他のテーマではなくてなぜそのテーマで発表しようと思ったのか、このテーマのなかでなぜその問題を提起したのか、この問題を扱うためになぜその視座から見るのであるのか、そもそもなぜこの問題を解決しないといけないと考えるのか、その問題に答えが出るとどんな未来になるのか、などなどです。

そして、出した答えに対しても「なぜ？」と自問していきましょう。誰かが言っていたから、メディアで取り上げていたから、本に書いてあったから、ネットに書いてあったから、みんなが言ってるから。大量にある外部の情報を私たちは重視しがちですが、じっくりとあなた自身にも目を向けてください。自分が大事にしたいテーマに出会ったら、たくさん自問してください。自分の中にあるものを問い合わせ続けると、あなたでないと辿り着けないところに行けるはずです。それがあなたの独自性です。あなたでなければ聞えない問いを立ててみてください。

簡単なことではありませんが、これから皆さんが挑戦する学問の根本になるはずです。これからも大妻中野中学校・高等学校の生徒さんのご活躍を期待しています。

WWL 連携校から - グローバル教育・WWL 成果発表に寄せて - 連携校 大妻多摩中学高等学校



大妻多摩中学高等学校
校長 熊谷昌子

グローバル教育・World Wide Learning 成果発表会開催、おめでとうございます。貴校の長きにわたるグローバル教育の成果として、このように立派な発表会を 10 年以上も続けて開催されてきた事に、心からの敬意を表します。生徒の皆さんのがんばり努力とそれを支える先生方の熱い想いが一体となって開催される WWL 発表会ですね。

そのような素晴らしい会に、本校生徒が参加させていただけますこと、大変光栄に存じます。大妻系列の中高は 4 校あり、いずれも大妻コタカ先生の教えを基とし、「恥を知れ」を校訓としておりますが、教育内容の特徴はそれぞれです。

多摩中高では、“Tsumatama SGL”と称した教育プログラムを掲げて、中学校段階では Science·Global·Liberal Arts それぞれの基礎を全員で楽しく学び、高校段階では生徒各自の問題意識の向かう方向に探究を進めていくスタイルを特徴としています。本日本校の生徒が発表するのは、その探究の成果です。探究は自分が知り得たことを他者と共有し、問題意識を共にする仲間と次のステップに進んでいくのが理想です。ですから、自身の研究を他者に発信することはとても大切な活動です。英語での発信はハードルがグンと高くなりますが、そのハードルを乗り越えられれば、世界に向けての発信が可能、つまり世界中の仲間と繋がれるのです。なんだかワクワクします。

この発表は、発表者による英語(一部はフランス語)での発信、聴衆によるその理解、さらに英語での質疑応答という一連の活動自体が、世界と繋がるためのものです。今日の体験を全ての生徒さんが楽しみ、世界と繋がる喜びを感じられる機会となりますよう、願っております。

WWL 連携校から - Message from 台湾 聖功女子高級中學 Sheng Kung Girls High School



Sheng Kung Girls High School
聖功女中校長 許佳涓 Principal Ms. Kate

回望 2024 年 5 月, 大妻中野高校師生的蒞臨, 為聖功女中注入了一縷文化交流的清風。而在太極拳的文化體驗中, 伴隨學伴的身影, 東方智慧的緩緩流動彷彿穿越時空, 凝聚成了一幅動人心魄的畫卷。而當 2024 年 12 月, 聖功女中師生回訪大妻中野高校, 猶如跨越季節的呼應, 我們感受到您們同樣溫暖的待客之道。

教育, 於我而言, 不僅是知識的傳遞, 更是心靈的呼應與文化的共鳴。每一次的互動, 每一堂課程的編排, 皆是架設在異國文化的理解、包容與友誼之上的橋樑, 將彼此的心靈緊緊相繫。我衷心感謝大妻中野高校師長與學生為此交流付出的辛勞, 也為我們兩校之間日益深厚的情誼感到由衷的欣慰與歡喜。

展望未來, 我期待聖功女中與大妻中野高校能在教育的原野上, 攜手播下更多文化與友誼的種子。讓我們以教育為舟, 以文化為帆, 共同航向多元與包容的彼岸, 一起拓展學子們的視野與關懷國際的襟懷。

再一次, 祝願大妻中野高校全體師生新的一年裡, 健康如春, 學業如夏, 歡愉如秋, 萬事如冬之安穩。此致

Looking back to May 2024, the visit from Otsuka Nakano High School brought a refreshing breeze of cultural exchange to Sheng Kung. When Sheng Kung's teachers and students visited Otsuka Nakano High School in December 2024, it was like a seasonal echo of friendship. We deeply felt your warm hospitality.

For me, education is not merely the transmission of knowledge but also the resonance of hearts and the harmony of cultures. Every interaction and every lesson plan we crafted became a bridge built on

understanding, tolerance, and friendship across cultures, tightly connecting our hearts. I sincerely thank the teachers and students of Otsuma Nakano High School for your efforts in making this exchange possible, and I feel deeply gratified and joyful about the growing friendship between our two schools.

Looking to the future, I hope Sheng Kung Girls' High School and Otsuma Nakano High School will continue to sow more seeds of culture and friendship in the vast field of education. Let us use education as a boat and culture as a sail to sail together to the other side of diversity and inclusivity, and broadening the horizons of our students and caring for the world.

Once again, I wish all the faculty and students of Otsuma Nakano High School to be filled with health as vibrant as spring, academic success as thriving as summer, joy as plentiful as autumn, and peace as steady as winter.

WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校としての取り組み成果 Student Works Anthology



大妻中野中学校・高等学校

教頭・WWL 担当 水澤 孝順

拠点校である大妻中野中学校・高等学校は、建学の精神「学芸を修めて人類のために」、そして校訓「恥を知れ」に基づき、これまで築いてきた教育の伝統を土台とし、自らの意識行動を俯瞰し互いの個性を尊重する「自律」、多様性が本質であることを理解し、多様性を活力とする「協働」、そして、いま取り組んでいる学業はすべて地球の持続、人類の持続に繋がっているということを意識した「貢献」の3つのコンピテンシーの育成を柱に、「地球市民として、Society 5.0における持続的なより良い社会の創造と自らの幸せを紡ぐことのできる人材育成」をスクール・ミッションとして、教育に取り組んできました。

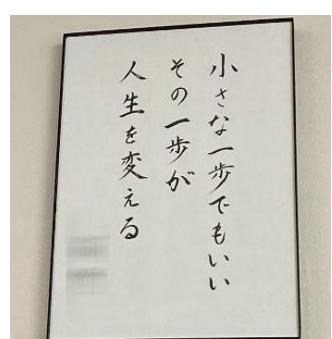
2002年に帰国生教育の取り組みを開始し、現在では1割を超える帰国生が在籍し、多様性を強みとして、経験を相互に活かしあう学校文化を基盤に、2015年からは、先進的な探究型教育手法と世界標準の英語教育、複言語教育などを柱としたグローバル・リーダーズ・コースの設置、生徒主体の課題解決プロジェクトのフロンティアプロジェクトチームの活動、ICT活用の授業実践に取り組んでいます。そして、2017年度に文部科学省の「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」の研究拠点校になり、様々な大学の先生と協働して、フランス語教育でのアクティブラーニング手法のモデル開発にも取り組んでいます。その後も、ユネスコスクールとして正式加盟認定を受け、また、SGHネットワーク校として、様々な先進的な学校との協働の機会も非常に増えています。

長年の取り組みで、拠点校の大妻中野ではBeyond School という行動指針が確立し、生徒が学校の外へ向かう取り組みに主体的にチャレンジすることを教育活動にビルトインされています。こうしたこれまでの取り組みの上に、様々な大学との高大連携が加わり、Global Well-Beingへ貢献できる人を育てていくという特徴あるグローバル教育の分野での取り組み目標が加わりました。

このBeyond School という教育手法を、連携校、協働機関とのALネットワーク構築により、さらに一層、積極的、効果的に活用し、カリキュラム化し、その成果を共有することを目指し、2024年度、WWLコンソーシアム構築支援事業の拠点校として大妻中野は、採択されました。

このレポートは、こうした本校(拠点校)のネットワークを活かした本校のテーマであるBeyond School アプローチをカリキュラム開発・研究・実践に活かした様々な事例と生徒の成果物の一例をまとめたものです。このレポートを皆様と共有することで、このネットワーク全体がさらに、多面的、多元的に、包括的に繋がり、新たなケミストリーがそこに生まれ、お互いが前進していくべきと考えています。

本校で留学した生徒が、留学先のカナダの学校に自身の手になる書を掲げてくれました。「小さな一歩。でもその一歩が人生を変える」は、本校生徒の指針です。皆さまの一層のご助言、ご指導をいただければ幸いです。



II. WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校 令和6年度構想計画、ALネットワーク概要

期間	ふりがな	がっこうほうじん おおつまがくいん	都道府県名
令和6年度 ～ 令和8年度	管理機関	学校法人大妻学院	とうきょうと 東京都
	ふりがな	おおつまなかのちゅうがっこう・こうとうがっこう	
	事業拠点校	大妻中野中学校・高等学校	

令和6年度 WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業 グローバル人材育成強化事業 構想計画書(概要)

1. 事業拠点校名

学 校 名： 大妻中野中学校・高等学校
学校長名： 諸橋 隆男

2. 構想名

繋ぐ・行動する -“Beyond School”アプローチによる協働型の地球市民教育 -

3. 構想概要

本校は、2015年から SGH アソシエイトとして「国際共生都市・東京から、行動し、繋ぐグローバルリーダーを創る」ことを掲げ、さらにユネスコスクールとして、特に SDGs を課題として設定し、ICT を活用したチームプロジェクト型のグローバル探究教育の開発に取り組んできた。特に、複言語、STEAM、探究型留学、CLIL 型英語教育などで、学校を超えたチャレンジをカリキュラムに導入し、モチベーションとインスピレーションを高める実践を行っている。

これまで連携、協働した多様な大学、学校、機関と共に取り組んできた経験を踏まえ、一層、学校の枠を超えて (Beyond School アプローチ)、対面とオンライン双方の特質を活かし、ポスト SDGs の時代に求められる「グローバル well-being 2030」の実現に貢献するマインドとスキルの体得のためのカリキュラム・プログラムを開発する。そのために、連携校、協働機関を互いの重要なリソースとしてリスペクトし、生徒、教職員とともにチームビルディングで取り組んでいく。

4. 体制

関係機関・学校に関する情報							代表者・校長名	
管理機関	学校法人大妻学院						伊藤正直	
大妻中野中学校・高等学校 (私立)							伊藤正直	
事業拠点校	学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模		
	高校グローバルリーダーズコース	74	71	29	174	457		
	高校アドバンストコース	128	155	0	283			
	中学グローバルリーダーズコース	31	23	80	134	761		
	中学アドバンストコース	218	256	153	627			
対象外				182	182	182		
事業協働機関 (国内外の大学、企業、 国際機関等)	① 大妻女子大学						伊藤 正直	
	② 玉川大学教育学部						小林 亮	
	③ 順天堂大学						代田 浩之	
	④ 津田塾大学						高橋 裕子	
	⑤ Temple University Japan Campus						Mathew Wilson	
	⑥ University of Saint Joseph (アメリカ)						Rhona Free	
	⑦ Tours Langues (フランス)						Yannick Durand	
	⑧ The YMCA of Chiangmai (タイ)						Chularat Phontudsirikul	
	⑨ 公益財団法人 ユネスコ・アジア・文化センター (ACCU)						田村 哲夫	
	⑩ 一般社団法人 Japan Study Abroad Foundation						森山 真二	
	⑪ Air Canada Japan Branch エアカナダ 日本支店						伊藤 正彰	
	⑫ 株式会社 ATI						田中 國智	
事業連携校 (国内外の高等学校等)	① 大妻多摩中学高等学校 (東京)	(私立)					熊谷 昌子	
	② 立命館宇治中学校・高等学校 (京都)	(私立)					越智 規子	
	③ 清教学園中・高等学校 (大阪)	(私立)					森野 章二	
	④ Saint-Denis International School (フランス)	(私立)					Olivier Gervès	
	⑤ St. Andrew's Catholic College (オーストラリア)	(私立)					Ian Margetts	
	⑥ New Plymouth Girls' High School (ニュージーランド)	(公立)					Jacqui Brown	
	⑦ Inglewood High School (ニュージーランド)	(公立)					Rosey Mabin	
	⑧ Taranaki Diocesan School for Girls (ニュージーランド)	(私立)					Maria Taylor	
	⑨ Sanpatong Wittayakom School (タイ)	(公立)					Ravee Kongpasri	
	⑩ 臺南市天主教聖功女子高級中學 (台湾)	(私立)					Hsu Chia Chuan	
	⑪ Sekolah Menengah Kebangsaan (Perempuan) Sri Aman (マレーシア)	(公立)					Puan Suhafna	

繋ぐ・行動する - “Beyond School”アプローチによる協働型の地球市民教育

Connect & Act - New Global Citizenship Education with Partners “Beyond School”

Otsuma Nakano Junior and Senior High School

Administration	Active Learning Network
• Otsuma Gakujin Educational Institution With	• Otsuma Nakano - Global Center
• VISION OTSUMA 2028 - for sustainable development	• Inquiry Education Team, Curriculum Management Team
• Faculty of Data Science to Start-up	• ICT Team
	• Career Development Team

Otsuma Nakano PBL

- Global Leaders Course
- SGH Network
- UNESCO Associated School
- Frontier Project Team
- S-TEAM

Presentation Contest for Global Education

International Conference by High School Students on Global Issues

Otsuma Nakano School Value for Global Citizenship

- Self-management
 - The ability to cultivate one's own sense of ethics and enrich sensitivity, enabling one to act without shame to one's conscience.
- Cooperation with Diversity
 - The ability to recognize diversity as essential, not only accepting various cultures and personalities but also using differences as strengths to achieve self-fulfillment through cooperation.
- Contribution to the World
 - The ability to think about issues ranging from local to global scales and contribute to the creation of a better society.

Otsuma Women's University Tamagawa University Department of Education

- Juntendo University
- Tsuda University
- Temple University Japan Campus
- University of Saint Joseph (USA)
- Tours Langues (France)
- The YMCA of Chiangmai (Thailand)
- (ACCU) Asia Pacific Culture Center for UNESCO Japan Study Abroad Foundation
- Air Canada Japan Branch
- ATI Inc.

Partner Universities and Institutions



Global Citizenship and Well-Being through Beyond School



Workshops and Lectures with Partners

- Plurilingualism - Francophonie
- Advanced IT Education
- AI programs
- Foreign Universities Application Project
- Diversity and Inclusion Projects
- Liberal Arts School Curriculum Development
- Global Study Tour
- Study Abroad Programs

- Otsuma Tama Junior & Senior High School (Tokyo)
- Ritsumeikan Uji Junior & Senior High School (Kyoto)
- Seikyo Junior & Senior High School (Osaka)
- Saint Denis International School (France)
- St. Andrew's Catholic School (Australia)
- New Plymouth Girls' High School (NZ)
- Inglewood High School (NZ)
- Sanpatong Wittayakom School (Thailand)
- Sheng Kung Girls' High School (Taiwan)
- SMK(P) Sri Aman Girls' Secondary School (Malaysia)

- Whole School Approach

- Whole School Approach



Phase 3 - 2026 Onward: Enhance - Advanced Network through International High Schoolers Conference

Phase 2 - 2025-2026: Update - AI Network / International High Schoolers Conference with AI Network

Phase 1 - 2024-2025: Start up - AI Network / Presentation Contest for Global Education with AI Network



III. WWL ALネットワーク 令和6年度 全体連絡協議・運営指導委員会（会議要録）

日時と場所： 2025年2月19日(水) 11:00 ~ 12:00 @ 大妻女子大学市谷キャンパス G棟 525 講義室
出席：

渡邊 優 大使	成蹊大学客員教授、元キューバ特命全権大使、運営指導委員
小林 亮 先生	玉川大学教授 本校 ASPUnivNet 支援アドバイザー、運営指導委員
野澤 督 先生	大東文化大学准教授 本校文科省グローバル化に対応した外国語研究指導、運営指導委員
赤阪 清隆 大使	公益財団法人ニッポンドットコム理事長、元国連事務次長・国連大使、検証委員
竹内 春久 大使	元シンガポール特命全権大使、元外務省国際情報統括官、検証委員
熊谷 昌子 先生	大妻多摩中学高等学校 校長（連携校）
安藤 浩明 先生	大阪・清教学園中・高等学校 地歴・公民科教諭（連携校）
中西 雅子 先生	大阪・清教学園中・高等学校 地歴・公民科教諭（連携校）
藤本 早恵子 様	公益財団法人 ACCU ユネスコアジア文化センター 教育協力部（協働機関）
伊藤 正彰 様	エアカナダ日本支社社長（協働機関） - 公務より欠席
吉岡 大輔 様	JSAF Japan Study Abroad Foundation - プログラムディレクター（協働機関）
嶋田 紀夫 様	(株) ATI 取締役（協働機関）
服部 孝彦 先生	大妻女子大学教授、文部科学省 WWL 評価会議委員、運営指導委員
拠点校大妻中野中学校・高等学校 校長 諸橋 隆男、教頭 五反 美千代、主幹 光村 剛 (管理職 AL ネットワークチーム)	拠点校大妻中野中学校・高等学校 校長 諸橋 隆男、教頭 五反 美千代、主幹 光村 剛 (管理職 AL ネットワークチーム)

司会：拠点校大妻中野中学校・高等学校 WWL担当教頭 水澤 孝順

会議要旨：

・ 服部孝彦先生から：

文部科学省で、SGH 事業の立ち上げ当初から、評価会議委員を務め、その後の WWL の評価会議委員として継続して、WWL の取り組みの審査、助言を担当している。その立場から、改めて、SGH とは何を目指しているのか、そして WWL と SGH とどこが違うのかについて、運営委員、連携校、協働機関の関係者に説明。

・ WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業概要 -

本事業は、将来、世界で活躍できるイノベーティブなグローバル人材を育成するため、これまでの SGH(スーパー・グローバル・ハイスクール)事業の取組の実績等、グローバル人材育成に向けた教育資源を活用し、高等学校等の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備をしながら、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組み(ALネットワーク)の形成を目指す取組である。

・ WWL拠点校から(教頭 水澤と拠点校生徒)

この WWL の趣旨にそって、大妻中野中学校・高等学校の WWL 拠点校取り組みを説明。その実例として、高校3年生の2名の生徒 (L.H.,Y.H.) から、英語で WWL の取り組みの実績と自身の成長、大学での学びへの接続についてプレゼンテーションを行った。

・ 運営指導委員から

拠点校大妻中野の成果報告プレゼンテーションを受けて、グローバル人材育成のこれまでの取り組みの実績を活かして、非常に生徒が成長していること感じられる。国立大学付属高校が WWL 拠点校になっての取り組み、県の教育委員会をあげてトップ進学校が WWL 拠点校になるケース、または、巨大な私立大学学校法人傘下の中等学校が WWL 拠点校として取り組むケース。それぞれに特色を生かした取り組みをしているが、大妻中野中学校・高等学校のこれまでの取り組みは、そうした学校に引けを取らない。帰国生教育を始め、SGH ネットワーク、ユネスコスクールとしての経験の実績をさらに活かし、WWL 拠点校として、一層、様々な学校、大学、機関と連携して、取り組みを進めてほしい。

WWL ALネットワーク 拠点校の令和6年度の取り組み成果発表 グローバル人材育成学会@中村学園大学

大妻女子大学・同大学院教授・大妻中野中学校・高等学校 WWL 運営指導委員

言語学博士 服部孝彦

大妻中野中学校・高等学校 教頭・WWL 担当

水澤 孝順

グローバル人材育成教育学会 第12回全国大会（大会実行委員長 佐々木 有紀 中村学園大学教授 - 大会全体テーマ：「個人・組織・社会の Well-being を目指すグローバル人材育成」、2025年2月開催）にて、九州、四国のWWL 拠点校と合同して、本校の高校3年生が、WWL 拠点校としての成果発表を行った。以下がその報告である。

特にこの学会では、シンポジウム<高校生による課題解決型探究学習シンポジウム>が開催され、<WWL 拠点校における探究学習の取り組みと教育効果>というテーマの元で、3校のWWL 拠点校による協働の成果発表となった。

本シンポジウムでは、まず大妻女子大学教授、文部科学省WWL企画評価委員 服部 孝彦 教授から、WWLの概要説明があり、続いてWWL 拠点校における探究学習の取り組みについて、大妻中野高等学校、中村学園女子高等学校、愛媛大学附属高等学校から説明を行い、その後、高等学校の生徒による探究学習による研究成果の発表となりました。

- ・大妻中野高等学校の紹介とWWL事業の取り組みについて（大妻中野中学校・高等学校教頭 水澤孝順）



Outline

Otsuma Nakano
FRONTIER

SGH
SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

unesco
Member of
the Associated Schools
Network

WWL
Member of
the Associated Schools
Network

グローバル人材育成教育学会 第12回全国大会@中村学園大学
「高校生による課題解決型探究学習シンポジウムに向けて
- WWL 拠点校における探究学習の取り組みと教育効果 - 」

- ・大妻中野中学校・高等学校の概要とWWL構想
- ・大妻中野中学校・高等学校 - その取り組み
- ・Lisa Hirose & Yuri Hirose - Senior Graders Presentation on what they have achieved

大妻中野 スクール・ミッション

地球市民として、Society 5.0
における持続的な
よりよい社会の創造と
自らの幸せを紡ぐために

ユネスコスクールの目的
Global Citizenship
Sustainable Lifestyle
Appreciation of Cultural Diversity

カリキュラム・ポリシー

大妻中野中学校・高等学校は、探究活動による深い学びと、地球
市民的視野を持ったリーダー育成に対応できる教育を行います。

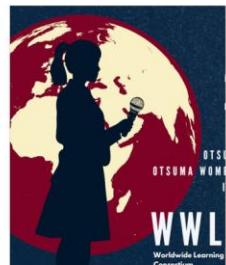


大妻中野中学校・高等学校 WWL



構想名

繋ぐ・行動する “Beyond School”
アプローチによる協働型
の地球市民教育



グローバル Well-Being 2030
の実現に貢献するマインドとスキルを
育てる

大妻中野 WWL背景 – Why WWL ?



SGHとして10年近い取り組みの蓄積

- ・探究への取り組みと外部プログラムへのチャレンジ実績
- ・4技能、発信能力 Productive Skill 重視の英語
- ・複言語主義、フランコフォニーから視野を広げるフランス語
- ・ICT活用スキルと探究を融合させた学びのモデル

ユネスコスクールとしての活動の成果

- ・学校を超えた学びの場を活用する探究アプローチ
- ・異文化学習、GSTと海外研修、留学、国内外学校間交流

大妻中野 WWL構想 What & How



チームプロジェクト型のグローバル探究教育の開発
複言語、STEAM、探究型留学、CLIL型英語教育
学校を超えたチャレンジをカリキュラムに導入

- ・一層、学校の枠を超えて - Beyond School -
ポストSDGsの時代に求められる
「グローバル well-being 2030」の実現に貢献する
マインドとスキルの体得のため、連携校・協働機関と共に
カリキュラム開発に取り組む

- ・大妻中野高等学校生徒による発表

The challenges we have made and the achievement we have created –

- Otsuma Nakano as a WWL school with the value of “Challenge and Create” 英語発表
L.H.(高校3年生)、R.H.(高校3年生)

The challenges we have made and The achievements we have created – OTSUMA NAKANO AS A SCHOOL OF WWL AND “CHALLENGE AND CREATE”

Otsuma Nakano H3 Lisa & Yuri Hirose

Our journey with GLC

GLC FEATURES

- English classes tailored to proficiency levels
- Learn various global issues
- Academic skills: discussions, essays, and presentations.
- Can also learn French

ACHIEVEMENTS

- IELTS 7.5
- TOFEL iBT 112
- Eiken first grade

Extracurricular Highlights

Frontier Project Team

TEDxYouth event

Power of Clothing Project (UNIQLO and UNHCR collaboration).

Model UN

Debate competitions

OUR EXPERIENCE AT THE ALL JAPAN HIGH SCHOOL FORUM 2023

- Discussed diversity with other high school students
- LGBTQ issues and gender problems in Japan
- Made a small group presentation



[SGHN037] OTSUMA NAKANO

HOW TO GET RID OF THE STIGMA AROUND MENTAL HEALTH IN JAPAN

RESEARCH MOTIVE

We have always heard from the news that the suicide rate in Japan is higher than any other developed country. We believe that one of the reasons for this is due to people not being able to talk about their mental illnesses openly with anyone or even go to the doctor to be diagnosed. This results from the stigma around mental health and the widespread belief that mental illness does not require treatment. Therefore, to fix this situation and be able to support people who have mental illnesses, the stigma around mental health in Japan must be decreased.

CURRENT SITUATION

- 1 in 12 Japanese elementary school children, and 1 in 4 Japanese high school children suffer from depression.
- There is a **rise in suicide rates** among those under the age of 20.
- Causes of depression include learned patterns of **negative thinking**, which can stem from bullying or academic problems, low self-esteem, stressful life events, and more.
- Only 6% of Japanese people are reported to receive counseling in 2020.
- Students who committed suicide blamed **pressure from school** as the main source of their problems.



FUTURE GOALS

Strive to delve into various subjects utilizing the interdisciplinary approach

Continue pushing my boundaries



WWL校(中村学園女子高等学校、愛媛大学附属高等学校)の発表

- ・中村学園女子高等学校の紹介とWWL事業の取り組みについて(中村学園女子高校教諭 西岡隆行)
中村学園女子高等学校生徒による発表 (英語発表)
「身近で取り組む世界の課題 ～私達が地球温暖化を止めるには 日本の今と昔の比較～」
- ・愛媛大学附属高等学校の紹介とWWL事業の取り組みについて(愛媛大学附属高等学校教諭 上床孝樹)
- ・愛媛大学附属高等学校生徒による発表 (日本語発表)
「愛附」の魅力を引き出す地域資源活用プロジェクト」

WWL 校代表として学会発表振り返り 高校 3 年 Y.H.

2025年2月8日に福岡県の中村学園大学で開催された学会において、高校生活を通して取り組んできた活動について、WWL 校の代表として成果発表を行いました。学会というプロフェッショナルな場での発表が決まったときから、大きな責任を感じるとともに、緊張をしていましたが、この貴重な機会を活かそうと準備に励みました。

発表は、まず私たちの簡単な自己紹介から始め、その後、大妻中野でのグローバルリーダースコース(GLC)の英語の授業やフランス語の授業について紹介しました。これらの授業では、多岐にわたるグローバルなトピックを扱い、文章力やコミュニケーション力を身に付けられたことから、私自身も大きく成長できたと感じています。

次に、課外活動について説明しました。私は 3 年間にわたり、フロンティアプロジェクトに参加し、「服のチカラプロジェクト」や「難民映画祭」を通じて、社会課題に向き合う活動を行ってきました。また、TEDxYouth@OtsumaNakano の運営チームの一員としてイベントを成功に導くために尽力した経験や、英語ディベート大会 HEnDA への参加、模擬国連での議論を通して培ったスキルについても発表しました。

そして、今回のプレゼンテーションのメインテーマとして、昨年 12 月に出場した全国高校生フォーラムについて紹介しました。私たちは「日本のメンタルヘルスに対する偏見をどのように取り除くか」というテーマを選び、社会に根付いた偏見をなくすために、個人、学校、政府がそれぞれ実践できる具体的な解決策を提案しました。また、このフォーラムを通して得た学びとして、異なる視点を尊重することの重要性や、多様な意見を受け入れることでよりよい解決策を見出せることを実感しました。

さらに、学会では大妻中野以外にも、福岡県や愛媛県から参加した高校生の発表を聞く機会がありました。同じ WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)に所属していても、それぞれの学校に異なる特色があり、特に農業に特化した高校の発表は新鮮で刺激的でした。各校の強みを活かした取り組みを知ることで、教育の多様性や地域ごとの特色を深く理解することができました。

今回の学会での発表を通じて、これまでの活動を振り返ることができただけでなく、他校の取り組みから新たな視点を得ることもできました。今後もこのような機会を大切にし、自らの成長につなげていきたいと思います。

WWL 校代表として学会発表振り返り 高校 3 年 R.H.

2 月 8 日に福岡県の中村学園大学で開催された学会発表会に参加しました。私たちが行ったプレゼンテーションは、The Challenges We Have Made and The Achievements We Have Created – Otsuma Nakano as a school of WWL and “Challenge and Create” というテーマのもと、大妻中野での 6 年間の学びと挑戦を振り返る内容でした。WWL拠点校として採択される土台となった英語に特化したカリキュラムや GLC での探究学習、フロンティアプロジェクトチームでの活動、さらには All Japan High School Forum 2023 でのメンタルヘルスに関する研究発表や、TEDxYouthイベントの運営など、さまざまな体験を通して私たちがどのように自分自身を成長させてきたかを英語で発表しました。

中でもプレゼンテーションのメインとなったのは、WWL 全国高校生フォーラムで行った「メンタルヘルスの偏見に関する探究」です。私たちは調査を通して、OECD 加盟国の中でも日本の若者の自己肯定感が特に低いというデータや、自殺が 10 代の死因の上位を占めている事実を知り、この問題の重大さを強く感じました。そこで、私たちは日本の若者の間でメンタルヘルスへの理解が十分に進んでいない現状に着目しました。まず、学校においてはメンタルヘルスについて学ぶ機会はほとんどありません。にも拘らず、若者の SNS の利用率は高く、それにより精神的な負担が大きくなっています。また日本特有の本音と建前を使いわけるような社会的な風潮も影響していると思われます。そういう実態の中、支援を求めることが困難であることも主要な要因であると考えました。これらのことと生徒へのアンケート結果を元に、海外のメンタルヘルス教育の事例の引用を用いて発表しました。

学会での発表はもちろん初めてのことですので発表するまではとても緊張しましたが、先生方や参加していた他の学校の生徒の方も熱心に聞いてくださったので、落ち着いて行うことができ、発表を終えた時には大きな達成感を感じることができました。大妻中野での6年間の学びや挑戦を多くの方の前で発信できたことは、とても良い経験となり自信に繋がりました。また、他校の生徒のみなさんの発表にも刺激を受け、自分の視野を広げることができたと思うので、これから大学での学びに活かすことができるようしたいです。

WWL ALネットワーク 拠点校の令和6年度WWL取り組み成果発表会レポート@大妻講堂



令和6年度の文部科学省のWWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業の成果を英語によるプレゼンテーションコンテストの形とフランス語教育、生徒主体の探究プロジェクト発表として、2025年2月19日に大妻講堂で開催しました。当時は、ALネットワークの連携校、協働機関の多くの皆様に参観いただき、フィードバックをもらうことができました。そのフィードバックからいくつか紹介します。

竹内 春久 大使 元シンガポール全権大使、元外務省国際情報統括官 (WWL検証委員)

大妻中野WWL成果発表会にお招きいただきありがとうございました。皆さんの発表はいずれも充実したもので私自身多くのことを学ぶことができました。皆さんが多様なテーマに正面から取り組み、しっかりと発表する姿には大いに勇気づけられました。皆さんのがこれからも日本のこと、世界のことに関心を持って、よく学び、いろいろな経験を積み重ねることを通じて大妻中野から「世界」への扉を開いてゆくことを期待しています。

松川 雄哉 先生 早稲田大学商学部専任講師 (文部科学省事業「グローバル化に対応した外国語教育研究」指導)

大変興味深く発表を拝見しました。英語部門については、分野が「災害」、「テクノロジー」、「倫理」、「心理」、「言語」、「経済」、「教育」、「移民」、「医療」、「平和」、「環境」と多岐にわたっていたのが印象的でした。またテーマ設定がより具体的で、「災害×テクノロジー」など複数の分野にまたがった発表もあり、見ごたえがありました。ある分野において課題を見つけ、その解決策を考える際に、他の分野の知見が役に立つ場合があります。またそうすることによってオリジナリティーにもつながるのだと大変勉強になりました。フランス語チームの発表は、フランコフォニーに関する発表もとても興味深かったです。今後もフランスだけでないフランコフォニーの魅力を伝えていただければ嬉しく思います。さて、今後さらに、フランス語圏の地域と日本の関係についても触れてみるのはいかがでしょうか?例えば、今回取り上げたモロッコはタコやマグロを日本に輸出しています。そういうことを取り上げることによって、聴衆がフランス語圏の地域を身近に感じてくれるのではないか?皆さまの今後のご活躍を楽しみにしています

白山 芳久 先生 順天堂大学 国際教養学部 准教授 (WWL協働機関・WWL拠点校連携大学)

発表会にお招きいただき、誠にありがとうございました。チェンマイでのフィールドワークの発表は、タイ語も交えながら非常に充実した内容で、参加者の皆様にその貴重な経験がしっかりと伝わる素晴らしいものでした。また、STE(A)M教育に関する成果発表も、見応えがあり、文理融合の学びがどのように実践されているかを感じることができました。この活動は、順天堂大学の中でも、国際教養学部の文理融合のリベラルアーツの学びに引き続き活かされるのではと感じingおりました。

安藤 浩明 先生 大阪・清教学園中・高等学校 (WWL連携校) 地歴・公民科教諭

生徒のみなさんの発表の素晴らしさ、それを指導される先生方の熱量、さらに支援される有識者の方々の豪華な顔ぶれ、大妻中野中学校・高等学校と学校法人大妻学院の圧倒的な力を見せていただき、感銘を受けました。特に印象に残ったのは生徒のみなさんのパフォーマンスのレベルの高さ、何よりも素晴らしい言語能力です。今回の発表を拝見して、あらためて、英語によるプレゼンの重要性を感じました。本校の探究学習も社会科と英語科の教員が連携してレベルアップしていかなければと思います。今後、大妻中野の生徒のみなさんと本校生徒の協働の機会を頂ければ幸いです。

0. WWL 拠点校構想「繋ぐ・行動する – “Beyond School” アプローチによる協働型の地球市民教育 -」実践

1. 取り組みの概要とねらい

Frontier Project Team は、本校が SGH アソシエイト校の認定を受けた 2015 年度に、翌年度新設予定だった「グローバル・リーダーズ・コース(GLC)」のカリキュラムを先取り体験させようと発足させた学年横断型の課外授業チームである。コース設置後も活動は継続し、GLC の生徒に加えてアドバンストコースの生徒も参加し、自分たちが学んだことや体験したことの校内外に発信する活動を行っている。10年目を迎えた今年度は「多文化共生チーム」「中野まちづくりチーム」「ゴミ環境チーム」「生物多様性チーム」「女性ジェンダーチーム」にそれぞれ所属し、チームごとに、講師の話を聞く授業、企画を実践する日、ワークショップやボランティア活動の日など授業の企画を考えて、FPT メンバー全員で行う活動を、実施してきた。

中学生から高校生までがグループごとに協働し、主体性をもって課題解決に向けて取り組むことで、教科の枠を超えた教養を身に着け、自ら思考し行動する力を育てることを目標とする。



2. 実施時期と対象生徒

希望者が通年で受講し、原則毎週土曜日の午後(特別企画はその限りではない)授業を行う。

2024年度は、中2生2名、中3生11名、高1生7名、高2生15名の希望者、合計35名が参加。

3. 外部との連携、協働、関連

順天堂大学国際教養学部 白山芳久准教授による出張講義

東京農業大学生物資源開発学科 松林尚志教授による出張講義

東京ジャーミイ 見学質疑応答ツアー

大妻女子大学多摩キャンパス 文化祭ゴミ環境ボランティア

新渡戸文化高等学校の生徒との協力活動

板橋区立熱帯環境植物館見学と松林教授・BSBCC 共同講演会参加

ボルネオマレーグマ保護センター(BSBCC)との募金活動及び講演会の開催

**LION 株式会社 ハブラシリサイクルプロジェクトへの参加
中野区国際交流協会(ANIC)の見学及び今後の協働に向けての話し合い**

4. 取り組み内容と生徒の変容、成果、振り返り、成果物など

①2024年度FPT(10期)年間カリキュラム原則毎週土曜日5時限(13:30~14:30)外部活動は別途日程あり。

学 期	月	日	曜 日	単元・学習項目	学習内容	備考	担当
1 学 期	4	20	土	①FPTガイダンス&導入授業 ～心理的安全性を高めるワークショップ 13:30~15:00	チーム希望調査／新規メンバーのペアワーク 継続メンバーと新規メンバーのグループワーク 自己紹介・チーム紹介	ガイダンス案内プリントは4/8(月)配布 参加申込書提出期限は4/17(木)まで チーム希望調査用紙記入は20日の活動中 新チーム発表は翌週23日(火)予定 →24日(水)昼にチームリーダー召集	吉名・武下
		27	土	授業なし(中高保護者会)			
	5	11	土	授業なし(宿泊研修のため)			
		18	土	②順天堂大学国際学部白山先生特別授業 13:30~15:00	<熱帯地域に暮らす人々の健康問題> グローバルヘルスサービス領域	5/22(月)国際生物多様性の日アクション	白山芳久先生 吉名・武下
		25	土	授業なし(考查1週間前ため)		第1回学校説明会 第1回帰国生説明会	
	6	1	土	③チーム発表&チーム企画の話し合い ブレインストーミング 13:30~14:30	manaba授業アンケート Jamboardを活用して、チーム企画のブレインストーミング	6/5(水)世界環境デーアクション	吉名・武下
		8	土	④大妻大服装孝彦先生特別授業 13:30~14:30			服部孝彦先生 吉名・武下
		15	土	⑤チーム企画の準備 13:30~15:00		6/20(木)世界難民の日アクション	吉名・武下
		22	土	⑥東京農業大学松林先生特別授業 13:30~15:00	<ボルネオ熱帯雨林に野生動物を追って> 生物多様性領域	IELTS Free Practice 6/24(月)女性と外交の国際デーアクション	松林尚志先生 吉名・武下
		29	土	授業なし(考查1週間前ため)			
7	6	土	授業なし(中間検査のため)				
	20	土	オープンデイ企画 <世界の食卓>ワークショップ	多文化共生チーム主体	オープンデイ		吉名・武下
	7	土	⑦チーム企画の準備 13:30~15:00				吉名・武下
	14	土	⑧板橋区熱帯植物館訪問・ユネスコスクール準備 13:30~15:00		第3回学校説明会 第3回帰国生説明会 9/16(月・祝)オゾン層保護のための国際デー アクション		安井・吉名・武下
	21	土	⑨中野まちづくりチーム企画 13:30~15:00	中野区の学校とオンライン対談			吉名・武下
2 学 期	28	土	授業なし(文化祭)	第一会議室前に中野の街PR動画や活動ポスターを掲示	9/29(日) 食品のロスと廃棄に関する啓発の国際デー アクション		吉名・武下
	5	土	⑩第5回ユネスコスクール関東ブロック大会		10/11(水)国際ガールズデー アクション		吉名・武下
	12	土	授業なし(考查1週間前)		第4回学校説明会 第4回帰国生説明会 10/13(日)国際防災の日アクション		
	19	土	⑪女性ジェンダーチーム企画 13:30~15:00	モスク訪問(高校生)	吉名引率		吉名・武下
	20	日	⑫ゴミ環境チーム企画	大妻女子大文化祭参加企画			吉名・武下
	26	土	⑬生物多様性チーム企画 13:30~15:00	ナガミヒナゲシの駆除企画	IELTS Free Practice		吉名・武下
11	2	土	⑭グローバル教育発表会プレゼン準備 1年間のチーム活動成果ポスターの作成				吉名・武下
	9	土	授業なし(教検・面談週間)				
	16	土	⑮女性ジェンダーチーム企画Ⅱ 13:30~15:00	モスク訪問(中学生)	第1回入試問題説明会 11/20(水)アフリカ工業化の日アクション		武下引率
	23	土	授業なし(祝日のため)				
	30	土	授業なし(考查1週間前)				
3 学 期	11	土	⑯グローバル教育発表会プレゼン準備 1年間のチーム活動成果ポスターの作成	*グローバル教育発表会はリーダー全員+各チームの高1or中3から1名計2名で発表			吉名・武下
	18	土	⑰BSBCC Japan講演会		1/24(水)教育の国際デー アクション		武田菜由子先生 吉名・武下
	25	土	⑯グローバル教育発表会プレゼン準備 1年間のチーム活動成果ポスターの作成	1/28(火)多文化共生チーム企画16:30~17:30	1/26(金)クリーンエネルギーの国際デー アクション		吉名・武下
	8	土	⑰グローバル教育発表会リハーサル		2/19(水)グローバル教育発表会		吉名・武下
	15	土	グローバル教育発表会リハーサル(代表のみ)		数検校内実施 2/17(月)世界観光レジリエンスの日		
	22	土	⑲1人1分スピーチ&修了証授与	「FPTと私」をテーマに1分スピーチを発表する。(全員) スピーチのタイトルは事前にFPTロゴ提出箱へ			吉名・武下
	3	土	授業なし(考查1週間前)		3/3(月)世界野生生物の日 3/8(日)国際女性デー		

中野まちづくりチーム - 学校のある中野について知り、魅力を発信する

中野区の新渡戸文化学園の生徒と交流し、中野にまつわるクイズ企画を行ったり、魅力や改善点を話し合ったりして、今の中野の状態を可視化しました。学外の生徒との交流で新たな気づきもあり、次年度中野の魅力を発信する活動につなげる予定です。

また、中野ブロードウェイにおいて外国人観光客に中野に来た目的インタビューを行いました。意外な目的も多く、こちらも次年度の活動につなげていく予定です。



女性ジェンダーチーム 一様々な点から社会的属性、ジェンダーに関する問題を学び、考える

高校2年生のGSTでマレーシアに行ったのでイスラムの視点からのイスラム女性について興味を持ち、代々木上原の東京ジャーミイに行きイスラムの人達の価値観について学ぶことが出来ました。また昨年度は10/11の国際ガールズデーにちなんで、～Change your mind男女差別の問題について考えよう～というワークショップを行いました。このワークショップでは過去に体験したジェンダーバイアスについてグループで考えて、男女差別について主体的に考えられるように企画しました。根本的な性差別の実態や、女子校の中高生であるからこそ必要な女性としての生活の認識についてディスカッションしました。



ゴミ環境チーム — ごみ問題を中心に環境について考え、解決策を見つけ出す

大妻女子大学多摩キャンパスでのごみ回収リサイクル活動のボランティアをしました。大きなイベントでのごみの分別や管理について考える機会となりました。また、株式会社ライオンの歯ブラシリサイクルに参加し、校内での回収を呼びかけましたが、まだ目標に達していないため次年度以降継続して行う予定です。

Garbage Environment Team

Our activities throughout the year:



1) Garbage organization in Otsuma University

Throughout the year, our team volunteered at Otsuma University, where we organized and disposed of rubbish. One interesting observation from this experience was how people naturally separate their trash.



2) Toothbrush Recycling Project

Another activity we did this year was collecting toothbrushes from ON students. Instead of throwing them away after use, we will send them to LION JAPAN to help them recycle.

多文化共生チーム 一多様な文化や価値観を持つ人々の共生を考える

中野区国際交流協会(ANIC)を訪問し、外国にルーツのある人の日本語習得サポートの様子を見学しました。そこで学ぶ外国から来た子供たちと、中高生だからこそできる交流や日本語を使った遊びを通じて私たちにできることを考えるきっかけとなりました。次年度の企画として継続予定です。

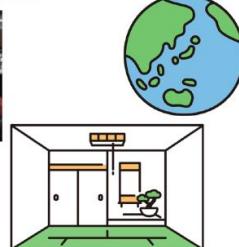
Multicultural Team

Equal relationships between people of different cultures and values

Volunteer at the fair



Nakano International Association



生物多様性チーム 一生き物や生態系の豊かさを学び、伝える活動をする

前年度に学んだ絶滅危惧種についてさらに深く学び、より多くの人に伝える活動をしました。外来種ナガミヒナゲシの駆除活動や、マレーシアボルネオ島のオランウータンや、マレーグマ保護活動に関する講演会や募金活動を行いました。次年度に向けて、ボルネオマレーグマ保護センターと協力し、チャリティーグッズ販売のお手伝いや、講演会を開催しより多くの方に絶滅危惧種のことを考えてもらえるよう活動したいです。

Biodiversity Team

- Long-headed poppy
- Fundraising activities for sun bear
- lecture on sun bear



What we can do next

Organize a commemorative lecture meeting

Selling goods at the cultural festival



③生徒の振り返りより抜粋

◎順天堂大学白山教授の講義（グローバルヘルス分野）

今回の講義を聞いて、元々私たちが恵まれた環境にいることはわかつていたが、具体的にどんな格差があるのかを改めて知ることができてよかったです。過ごしている環境自体も私たちとはだいぶ違っているなと思いました。過酷な状況で生きている人のことを、恵まれている人が助けるべきだと思うので、今回の講義を受けて、考えるだけでなく、何か行動に移したいと思いました。環境が不衛生なうえ、小さな子の犠牲や感染症もあることが想像以上でした。助けたいと思っても、自分が実際に現地へ行くことや、同じ環境で過ごすことはハードルが高いことだと思ってしまいました。そんな中で、現地へ行って論文を書いている先生はとてもすごいと感じました。先生がおっしゃっていたように、今考えること、家族に伝えることだけでも行動の1つになるのだと知りました。国際問題には、前から興味があったから、あまり難しく考えず、できることから取り組み、問題解決に貢献したいと思いました。今後は周りの人に伝えたり、寄付をしたりと、小さなことから取り組んでいきたいです。将来的には現地の人と会ったり、ものを送ったり、直接的に現地の方々を救えるような取り組みをしていきたいです。

中3 H.K.

本日の講義を受けて、自分で学んだことを自分で知識として蓄えて終えるのではなく、学べる機会に感謝して、学びたくても学べない人へ機会を与えられるような工夫につなげていくことが大切だと再認識するとともに、自分の興味のあることを世界とつなげて考えることで、世界の問題を解決できることができるかもしれませんと感じました。今後は、目の前のことだけを見るのではなく、いま世界で何が起こっているのかについても目を向けて、日本で学んだことを、他の国でどう活用していくか格差をなくせるか、詳しく知りたいと考えました。また、様々な事について詳しく学び、だれもが幸せに思う暮らしを送れるようにしていきたいです。

高1 K.N.

◎東京農業大学松林教授の講義（生物多様性分野）

まずボルネオという場所が聞いたことなくてどんなところなんだろうという疑問から始まりました。ボルネオにはオラウータンやゾウをはじめたくさんの生物たちがクラス自然豊かな地ですが今森林伐採が行われていて彼らのすみかが失われつつあります。だからこのような動物たちは保護センターに連れていかれ保護されている状態にあると知りました。

私は今回の講義を通して「なんでもやってみよう」この言葉がとても印象的で、人はだれしも新しいことにチャレンジするときは自信もなくすし、不安になります。しかし先生は誰に何と言われようと自分のやりたいことを曲げずに最後まで諦めず行動していてその話を聞いたときこれから自分が生きていくうえでとても大切なことだと感じました。誰に何と言われようと目標に向かって必死に努力できるような人になりたいと思いました。私は留学を控えているので、この考え方を忘れずに現地に行つてもめげずに頑張りたいと改めて思いました！

高1 H.S.

昨年、多摩動物公園でボルネオオランウータンについて調べたものの、実際に研究している先生にお話をうかがうことが出来てより理解を深められました。現在森林がどんどん少なくなってきて野生の動物たちが生きる環境がどんどん破壊されているのを聞くと、とても深刻であり自分たちにも影響が及ぶことがわかりました。

森林はただ植えるだけでは改善しないという知識が今までなかったので、それは沢山の人に知ってもらう必要があると思いました。木を植えれば環境が整うというのは間違いだと知ってもらいたいです。

高2 A.H.

◎東京ジャーミイ訪問(女性ジェンダーチーム主催)

モスクはなんとなく居心地の良いところでした。建物の外観はラブンツエルの塔の様な、物語に出てきそうなものでした。礼拝堂は2階にありましたが、行ってみると海外に来たような感覚で、建物の外見ても日本とは思えませんでした。日本語を見てやつと感覚が戻る感じでした。モスクの礼拝堂はステンドグラスなど美しい空間でした。壁には漢字の様なアラビア語が書いてあり、案内の方に意味を聞いてみるとコーランの大事な部分が書いてあると教えていただきました。この案内の方もユーモアがあり、快く私たちを迎えて下さいました。私はその方から「元気な子だ」と言われました。

参拝者は大体が外国の方で、日本とは違う文化を感じました。もしかしたらイスラム教の文化かも知れませんが、みなさんとてもフレンドリーな、心を開いてくれている様でした。目が合ったとき、ニコっとすれば笑顔を返してくれたり、狭い階段も譲り合いながら上り下りしていたり、人ととの距離が近かったです。海外でそこの文化に染まることで受け入れてもらえるように、同じ宗教を信仰していると分かり合えるのではないかと思いました。私は今回初めてモスクに行ってみましたが、違う文化の場所で不思議な空間でした。私にとって新しいところで楽しかったです。

中3 M.M.

なぜイスラム教の建物が代々木上原にあるのか、という疑問に対して、ロシア革命が絡んでいることを知り、驚きました。マレーシアに修学旅行に行った際にモスクを訪れたことはありましたが、実際に礼拝の様子を見て、気になることを質問することができる機会は初めてだったのでとても貴重な経験だと感じました。これまでフロンティアの活動で異文化理解を目的とした企画を経験してきましたが、宗教面でも異文化についての理解を深められるということを改めて感じることができました。また、イスラム教徒の子供は礼拝を強要されるのではなく、初めは自由にしているが、親の姿を見て自然と礼拝と一緒にするようになる、という話を聞き、子供に強制的に礼拝させるのではなく自主的にするまで待つ、という考え方がとても素敵だなと思いました。今回で様々な側面から異文化について考えることの大切さを感じたので、今後も柔軟な考え方を身に付けるために様々な経験をしていたら良いなと思いました。

高2 S.M.

◎活動全体を振り返って

初めは友達がやっていたからというちょっとした理由で始めましたが、思ったより10倍楽しかったです。主觀に頼らず、まずやってみるということを今までの生活で最も感じた一年でした。今年は先輩に頼りきりだったので来年は必ず、自分から計画・行動できるような成長できる年にしたいです。来年もぜひ参加したいです。

中3 R.S.

今年は、去年と違った活動をごみ環境チームではすることができました。私はこの3年間を通してごみ環境チームがどんどんよりよい活動になっていると感じています。他のチームの活動もオンラインで交流をしたり、いろいろな場所に訪問をしたり、フロンティアの活動範囲がどんどん広がってきているので、嬉しいです。一昨年、去年、に比べて社会問題について深く知ることができ、実際に現地の方々から話を聞くと、社会問題が身近に感じました。来年度は、歯ブラシリサイクル活動を受け継いで、ごみ環境チームの活動範囲をもっと広げたいと考えています。

高1 S.T.

私は今年から初めてフロンティアの活動に参加しましたが、新しいことに挑戦すること、そしてさまざまなことに興味を持つことの大切さを改めて学ぶことができました。これまで自分の興味のあることだけに注目していましたが、フロンティアで多様なチームや、異なる関心を持つ仲間と活動する中で、さまざまな視点から物事を捉えられるようになり、関心の幅が広がりました。

また、フロンティアに参加している人たちの、積極的で何事にも全力で取り組む姿に大きな刺激を受けました。私もその姿勢を大切にし、積極性を持って行動していきたいと思います。フロンティアの活動で学んだことを将来に生かせるよう、これからも新しいことに挑戦し、様々なことに興味を持ち続けていきたいです。

高2 R.M.

私はフロンティアで、物事を多角的に見る力や積極的に発言する姿勢を養いました。出張授業では、自分の興味を超えてさまざまな知識を吸収することができました。フロンティアでの4年間の活動を通じてコロナ課題チーム、防災減災チーム、ごみ・環境チーム、中野街づくりチームと多方面にアプローチすることができ、今年の中野まちづくりチームでは、自分の興味のある国際的な視点での活動にも取り組むことができました。フロンティアでは知識を蓄えるとともに人の縁の大切さを学ぶことが出来ました。

去年までは多くの先輩に支えられて、今年は同輩や後輩に支えられて1年間楽しく有意義な活動をすることが出来ました。これまで養った知識と関わる事の出来た人との縁を大切にしながら次のステージである大学生活や将来の職業に活かしていきたいです。この土曜日の午後にあるフロンティアの活動に参加できなくなるのは寂しいですがまた新たなことに挑戦していきたいと思います。4年間ありがとうございました。

高2 M.S.

④アンケート結果より生徒の変容について

今年度は昨年度からの継続参加者が多かったこともあり、2年前との比較をすることで受講生徒の変容をより詳細に伝えることができると考え、次の表のように、2022年度の終了時点と2024年度の終了時点を比較した。結果、2年前より、全体的に数値が減少傾向にあった。これは、2022年度は大きなプロジェクトを成し遂げた年であり、受講生徒にとっても非常に満足度・達成感の高い活動年度になったからだと考えられる。そのため、2023年度からは、新たなチームが発足し、企画を一から立てて実績を積み重ねていく必要があった。2022年度から継続して活動に参加してくれていた生徒には、少々これまでの活動と比較してスピード感や規模に違和感を覚えること多かったため、青地で示したような、グローバル社会の相互依存関係や地球問題に関する取り組みの部分が大きく下がってしまったように思える。

本活動は、今年度で10年目を迎え、初期のころから継続してこのデータを取ってきた。開始当初と比較して、数値が大きく伸びたものを赤字で示した。この10年間、本活動の中では、SDGsをテーマにグローバルイシューを自分事としてとらえ、身近な中野の街からこれらの問題に取り組むことを生徒主体に進めてきた。活動していくうちに次々と取り組みたい内容が生まれ、十分な活動の準備時間が取れないこともあったが、その中でもチーム内で協力して設定した問題解決に取り組む様子が伺え、それをグローバル発表会などで世間に発信するスキルも飛躍的に向上した。毎年チームの形は少しずつ変化しているが、前年度から継続していた生徒たちの持つこれまでの成果と、新たなメンバーの新鮮な視点が学年を超えた交流によって次の活動へつながっている。今後も、更なるグローバルイシューの探究、解決に向けた取り組みの発展を目指し、企画、実践、発信し、常に進化し続けるフロンティアプロジェクトチームでありたい。

大妻中野ESD(持続可能な開発のための教育)理解アンケート

対象: フロンティアプロジェクトチーム30~40名(中学2年生からの高校2年生までの有志からなる課外授業の生徒・年)

現在、あなたに「身についている力」を測る自己評価シートです。とてもそう思う「5」、そう思う「4」、中間レベル「3」、あまりそう思わない「2」、そう思わない「1」として5段階で評価して下さい。

	ポイント・カテゴリー	目標・指標	2015年度 FPT開始時 15.4.25 A	2015年度 FPT終盤 15.12.11	2022年度 FPT修了時 23.2.25 B	2024年度 FPT修了時 25.2.22 C	2022年度 FPT終了時と 2024年度FPT 修了時の差 C-B	2015年度 FPT開始時と 2022年度FPT 修了時の差 C-A
知識・理解	地球的課題	(1) 人権・環境・平和・持続可能な開発などについて基本的用語を理解している。	2.81	3.02	4.15	3.93	-0.22	1.12
		(2) 人権・環境・平和・持続可能な開発などについて主要な問題を例示し、説明することができる。	2.65	2.99	4.20	3.63	-0.57	0.98
		(3) グローバルな課題の複雑性を認識し、具体例を説明できる。	2.41	2.96	4.15	3.63	-0.52	1.22
		(4) 地球的課題解決のための様々な取り組みや活動について知っている。	3.03	3.44	4.55	4.07	-0.48	1.04
	多様性・多文化社会	(5) 人々との共通点・相違点に関心を払い、それらを見出すことができる。	3.41	3.69	4.55	4.03	-0.52	0.62
		(6) 地域、国、世界の多様性(文化・価値観・アイデンティティなど)を認識している。	3.84	3.96	4.55	4.07	-0.48	0.23
		(7) 多文化社会の現状を把握し、多文化共生社会づくりのための課題を理解している。	2.86	3.37	4.15	3.90	-0.25	1.04
	グローバル社会・相互依存	(8) 世界の国々の目に見えないつながりを意識し、グローバル社会の現状を例示できる。	2.41	3.09	3.95	3.83	-0.12	1.42
		(9) 多方面におけるグローバル化社会の功罪を述べることができる。	2.03	2.73	4.40	3.47	-0.93	1.44
		(10) 世界の問題を身近な事柄と結びつけて具体的に考えることができる。	2.89	3.04	4.15	4.23	0.08	1.34
技能・スキル	批判的思考・問題解決	(11) 他者の意見に耳を傾け、それに対する自らの意見を整理・表現できる。	3.49	3.86	4.50	4.40	-0.10	0.91
		(12) バイアスやステレオタイプを自覚し、冷静な判断ができる。	3.14	3.05	3.80	4.00	0.20	0.86
		(13) 一つの事柄に対し、肯定側・否定側等多面的思考ができる。	3.46	3.70	4.45	4.33	-0.12	0.87
	コミュニケーション・協働	(14) 自らの考えを(言語を含めた)様々な方法で表現することができる。	2.78	3.35	4.10	4.00	-0.10	1.22
		(15) 自らの学びや意見を効果的に伝達(プレゼンテーション)できる。	2.84	3.32	4.20	4.03	-0.17	1.19
		(16) 全体の中での自らの役割を認識し、他者と協力しながらタスクに取り組むことができる。	3.19	3.45	4.75	4.30	-0.45	1.11
		(17) 異なる意見に遭遇しても自らの見解を再構築し、合意形成ができる。	2.81	3.37	4.35	4.03	-0.32	1.22
	情報収集・活用	(18) 情報にアクセスし必要な情報を収集し、それを目的達成のために活用することができる。	3.05	3.60	4.35	4.17	-0.18	1.12
		(19) 課題解決のための探求テーマやプロジェクトを設定し、自ら調査・分析できる。	2.70	3.52	4.30	4.07	-0.23	1.37
		(20) メディアや与えられた情報を冷静に分析する目を持っている。	2.84	3.34	4.10	3.90	-0.20	1.06
姿勢・態度・価値観	自己理解・自己認識	(21) 自らの長所・短所を自己分析でき、良い点を伸ばそうとする。	3.03	3.32	4.30	4.07	-0.23	1.04
		(22) 自分自身を大切に思い、自分自身の生き方を探求している。	3.22	3.48	4.70	4.20	-0.50	0.98
		(23) 困っている人々の問題を自らの問題に置き換えて捉え、真剣に考えることができる。	3.30	3.82	4.40	4.30	-0.10	1.00
	異文化や多様性の尊重・寛容	(24) 考えや意見、タイプの異なる周囲の人とも協力しようと努力できる。	3.65	3.79	4.65	4.33	-0.32	0.68
		(25) 自らに心の壁を作らず、社会的状況、家庭環境、民族、宗教などが異なる人ともコミュニケーションできる。	3.54	3.87	4.60	4.10	-0.50	0.56
		(26) オープンマインドを持ち、様々な違いを認め、肯定的に受け止めることができる。	3.46	3.71	4.60	4.50	-0.10	1.04
	地球市民としての自覚と責任、行動への意欲	(27) グローバルイシューを自覚し、ライフスタイルを見直す。	2.43	3.07	4.20	4.03	-0.17	1.60
		(28) 身近なプロジェクトや活動の計画、話し合いに積極的に参加する。	3.00	3.45	4.65	4.27	-0.38	1.27
		(29) プレゼンテーションや啓蒙活動などを行い、計画実行のために他者と協力して行動する。	2.78	3.48	4.55	4.30	-0.25	1.52
		(30) よりよい未来をイメージし、それに対してすべきことを考え、実行できる。	3.00	3.23	4.55	4.10	-0.45	1.10

1. S-TEAM およびその活動について

Science(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学)、Arts(芸術)、Mathematics(数学)の頭文字をとった STEAM 教育に対し、大妻中野の学校内で先進的に取り組むチームが「S-TEAM」である。このチームは、学年を超えた生徒が課外で活動し、その先進的な取り組みを学校全体に還元している。

初期の段階では「動画班(YouTube 甲子園への参加)」「デザイン班(本校生徒会公式キャラクター:つまもんの作成)」「プログラミング班(Scratch によるゲーム作成・高大連携プログラミングへの参加)」「Web 班(S-TEAM 公式ホームページ、文化祭ホームページの作成)」の 4 つの班で活動を行った。また、コロナ禍においてはオンラインでの活動の可能性を探求するとともに、zoom などのテスト利用などを実施し、学校全体のオンライン授業構築に貢献した。

社会や教育を取り巻く ICT 環境およびその役割は年々変化しているため、現在は活動内容を柔軟に変化させている。

2. 2024 年度の主な活動について

オープンディ	小学生に Hour of Code を用いてプログラミングを体験してもらう企画を実施
会社見学	サイバーエージェント社への企業訪問を実施
夏季合宿	文化祭に向けての活動を中心に実施
文化祭	動画作成および公開、学校公式キャラクターのグッズ作成および販売、 文化祭ホームページの作成
研究発表会	個人またはグループでの研究の発表の場を設ける
SGH・WWL 発表会	S-TEAM の 1 年間の活動報告のプレゼンテーション
掲示物制作	校長室前の看板の作成に取り掛かる

3. 2024 年度 S-TEAM 研究発表会の生徒報告

CG 技術の歴史と発展(R.H.・K.F.)

概要:

CG は現代において、映画やゲーム、コマーシャルなどにも使われ、生活の中に溶け込んでいます。映画に例えるなら、世界初のフル CG 映画トイストーリーに始まり、最近ではこれを用いたゴジラがアカデミー賞を受賞するなど、技術の進歩は目覚ましいものです。今回はこのような歴史を調査するとともに、実際に CG 制作ソフトを使って、自分たちも CG でオブジェクトを作成しました。

感想:

準備の段階で私は CG のオブジェクト制作を、深野さんは CG 技術の発展についての調査をそれぞれ担当しました。今回使用したソフトはティンカーキャドといって、保育園や小学校でも使われることもある操作も簡単なものでした。今回は調査も制作も楽しい方面で進められたと思います。来年度も CG 技術について探求する場合はブレンダーなどもう少し自由度の高いものを扱ってみたいと思います。可能なら少しプログラミングなどを用いて動かしてみたいと思っています。(R.H.)

全体的に調べ学習がメインだったので来年度以降はもう少し研究に重きを置けるようなテーマを考えていきたいと思います。(K.F.)

SNS のメリット・デメリット(M.M.・A.M.)

概要:

発展してきた SNS のデメリット・メリットを実際にあったトラブルをもとに調べました。

感想:

私は、SNS について調べて、知らないことも多く知ることができ、自分も学ぶことができました。今後は、それをもとに、もっと深く調べていきたいです。(M.M.)

私はこの研究発表会を通して、SNS のメリットやデメリットを学ぶことができました。また、デメリットについては、事例を調べたので自分も同じようなことをしないように気をつけようと思いました。今後は調べたことを知識だけで終わらせずに、研究に生かしていきたいと思いました。(A.M.)

STEAM 教育の現状とそのギャップ(K.K.・R.S.)

概要:

世の中が STEM 教育から STEAM 教育に変化しているなかで、このふたつを比較しながらそれぞれどのようなメリットやデメリットがあるのかを調べた。そこから日本と海外の STEAM 教育の現状を挙げ、これを基にどのようにすればよりよい STEAM 教育を実現できるのかを探究した。

感想:

今回初めて研究発表会に参加させていただきました。それぞれの発表がとてもユニークで、私たちの発表もまじめなテーマながらもユニークな内容を取り入れていたら、よりよい発表になっていたのかなと思いました。この発表では、私たちが受けている STEAM 教育がどのような現状にあるのかということを、私たち学生の視点・日本全体の視点・海外の視点から捉えました。さまざまな角度からみることができ、今後の学校教育にとどまらない国全体の課題について知ることができていい機会になりました。今後の発表では、今回できなかったフィールドワークを取り入れ、より説得力があるものにしたいと思います。(K.K.)

今回初めて研究発表会に参加させて頂いたのですが、テーマの制限などがなく自分達で 1 からテーマや探究内容を考え、そこからどう深めていくかを考える経験ができたのでよかったです。また、S-TEAM に所属していてその名前が何の略称なのかということは知っていたけれどどういう歴史があるのかということや詳しい内容はあまり知らなかったので知ることができて良い機会になりました。またこのような機会があればもう少し調べ学習ではなく探究できるように考えていきたいと思いました。(R.S.)

写真と動画の見やすい構図(K.M.・Y.A.)

概要:

画像なども使ってどのように撮影するのか見やすいか、綺麗に見えるかを研究した。

感想:

スライドと音声での発表にしたため、スライドの提出がごたついてしまった。前々から気になっていた分野の研究ができて面白かった。(Y.A.)



ChatGPT で課題を作成したらばれるのか検証してみた！(M.S.・S.M.・A.W.・A.O.)

概要:

近年トレンドになっている AI を使用した検証です。今回は英語のエッセイを対象に研究しました。人間が書いた複数個のエッセイと ChatGPT が書いた別のトピックのエッセイを比較し、AI チェックツールの判定をもとに AI の頻出使用単語などの文章の特徴を見つけ出しました。

感想

今回は動画での参加となっていましたが、同時に久しぶりのグループ発表にもなりました。研究テーマは時事的で学生なら興味を持つてくれるであろう内容にしたかったので面白くできたと思います。反省点としては研究対象が少なすぎる、文章の特徴として単語しか探求できていないなど基本的な課題が多くありました。ですが、発表日になんとか形にして成果を見せられたのは良かったです。今後もしこの研究を続けていくならエッセイの数を増やしての分析や文章の構成など範囲を広げて調べていきたいです。(A.W.)

今まで調べ学習をする際はいつもただ自分で文献やネット記事を調べてまとめるような主体的ではない活動が多かったのですが、今回は自ら問い合わせ立てて実験を行うという今まであまりしてこなかった学習ができたよかったです。実際今 chatGPT の利用の仕方が議論になっていて、私たち学生に直結するような有意義な問題を取り扱うことができたと思います。制作過程でも機械トラブルがあったり、余裕もって終わらせることができなかったなどといったこともありました。また現場で発表できなかったのは残念ですが試行錯誤して録音形式で発表できてよかったです。私の研究結果からは特定の言葉に気をつければ課題を chatGPT でも AI だと気づかれにくいという結果になりましたが実際には chat GPT がこれ以上発達すると更に見分けがつけづらくなると思うのでこれから的学生と chatGPT の問題は見過ごせない問題になっていくと考えます。(S.M.)

研究発表会では chatGPT で課題を作成したらばれるのか検証してみたというタイトルで発表を行ないました。反省として課題を検証する方法に対する詰めが甘かったと感じています。いざ発表全体が出来上がったときに本当にこの方法を使うことで検証できたと言えるのだろうかと思ったからです。この経験を活かして次回からは安易に方法を決めるのではなく検証する方法を考えることに重きを置いて研究を行なっていきたいと思います。(M.S.)

Optical Fiber(M.Y.)

概要:

光ファイバーについて、光ファイバーが一般化される 前の情報通信技術、光ファイバーの最新研究

感想:

かなり噛んでしまってスムーズな発表ができなかったこと。今後は話す練習もちゃんと取り組んでいきたいと思う。

02

CGのメリット

非現実を可能に

存在しないものを作り出し、表現できる

製作の手間を削減

データとして残るため使いまわすことができる
→何度も書き直す手間がなくなる

撮影で難しいところを補う

実写のみでは難しい飛行・爆破などのアクションや天候・環境など自然の影響を補える

コストの削減

複雑なセットなど、実写で用意するものを映像で表現することでコスト削減

人を惹きつける効果

アニメーションを加えた刺激的な効果や実写の無駄な動きをカットすることで人を惹きつける

03 日本の現状

課題

- ①ICT導入の遅れ
- ②家庭や地域の格差
- ③指導教員の不足
- ④認知度や注目度が低い

政策

- ・文部科学省
Society 5.0
GIGAスクール構想
- ・経済産業省
STEAMライブラリー
- ・認定校
スーパーサイエンスハイスクール (SSH)
ワールド・ワイド・ラーニング (WWL)

WWL ALネットワークを活用したカリキュラム開発・実践 第5回ユネスコスクール関東ブロック大会取り組み

ALネットワーク事務局

大妻中野グローバルセンター



大妻中野は、ユネスコスクール加盟校として、「建学の精神『学芸を修めて人類のために』及び校訓『恥を知れ』」に基づき、地球市民として、Society5.0 における持続的なより良い社会の創造と自らの幸せを紡ぐことのできる人材の育成を目指します」というスクール・ミッションを掲げている学校です。

10月5日に玉川大学で開催された第5回ユネスコスクール関東ブロック大会で、本校生徒がフランス語チームのポスターセッション、分科会では「国際対立の解決に向けた

ユネスコスクール・ユースの探究ワークショップ」というテーマで、国際紛争に関して、大学生、都立高校の生徒とともに議論しました。

この経験は、参加した生徒に、大きな自信と新しい視点を与えてくれた素晴らしい経験になりました。この第5回ユネスコスクール関東ブロック大会を振り返ります。

- 主催の玉川大学教育学部教授の小林亮(こばやしまこと)先生から本校に寄せられた振り返りです -

第5回ユネスコスクール関東ブロック大会では、大妻中野中学校・高等学校から、多数の生徒のみなさんに参加いただき、分科会およびポスター発表にて大きな成果を上げ、本大会の成功にひとたなぬ貢献をして下さいましたことにあらためて厚く御礼申し上げます。

第5分科会に関する参加生徒の皆さんのが振り返りは、非常に興味深く、また嬉しいものでした。貴校の生徒の振り返りから、「異文化学習」と「葛藤解決」に焦点を当てながらウクライナ危機をテーマにした高大連携の分科会が決して「的外れ」ではなかったことが実感できましたので、とても嬉しく、心強く感じた次第です。

貴校の生徒のみなさんの興味深いポスター発表と分科会での創意ある議論に本学の学生たちは、大きな刺激を頂きました。高大連携そして学校間共修はユネスコスクール・ネットワークならではの試みだと思いますが、今回の分科会での共同討議を見て、この学校間共修のチャレンジが、ユネスコの提唱する「変容」的な意味で確実な成果を上げてきているのを実感することができました。

貴校とは同じ首都圏に位置するユネスコスクール加盟校同士として、今後もさまざまなコラボレーションを展開させて頂けたら幸甚です。今回の大会へのご尽力に深く感謝申し上げると同時に、今後の学校間協同活動に向けて引き続き何卒よろしくお願ひ申し上げます。玉川大学教育学部教授 小林亮

参加した生徒の振り返り

H1 K.N.

私は、この第5回ユネスコスクール関東ブロック大会を通して学んだことが主に2つあります。1つ目は、『先入観にとらわれないということ』です。今回の論点はウクライナとロシアの戦争についてでした。その中で私はロシア側の立場に立ちました。日々ニュースを見ていると、ロシアの全体が悪いというように見え、ロシアという国=戦争を仕掛けた悪い国というイメージがついてしまっていましたが、ディスカッションを通してロシアの一力国全体の国民が戦争を望んでいるわけではないということに気づきました。ロシアとウクライナの戦争が本格的に始まったのは2年前なので、今年2歳になる子供たちは始まった時には生まれてなかった子供たちもいると思います。



国のトップが勝手に始めた戦争を国全体ロシアが悪いとして見るのではなく、全員が全員戦争を望んでいるわけではないということを再確認する必要があると思いました。

さらにもう一つの学びとして、二つ目は、さまざまな視点から物事を見ることの大切さということです。プログラムの中で三つの立場のグループが一つに集まって、議論するという場面がありました。お互いが自分の意見を発表する際、自分たちの国が思っていたことと異なるような政策を出されて、新しい視点から考えることができました。国連の方々がウクライナとロシアの関係をもとの関係に戻せるように条約を提示してくださいました。ロシア側もここまでなら妥協することができるかも、ウクライナ側もここまでなら妥協することができるなど、さまざまな視点から考えることができてとても興味深かったです。

私がこの大会での活動を通して、受け身になるのではなくもっと能動的に考えられる高校生になりたいと思いました。いままではこれらのニュースを聞いて、「こんなことがおこっているんだ。」で終わっていました。日本は唯一の被爆国なので、その悲惨な経験を2度と起こさないように広めていくのが、今の私たちにつないでくださった過去の方々への恩返しにつながると思います。2度と日本と同じような思いをする国が出ないように、高校生の私たちが戦争を起こしたいと思っているようには感じられないウクライナの高校生とロシアの高校生でタッグを組み、10年後、20年後には良い関係が築けるように今の状況を変えていけるような行動力が大切だと思いました。今の戦争を止められるのは若い世代から動いていかないといけないということをより強く感じられました。現在のこの状況を知れたのこのようユネスコスクール関東ブロック大会を開催してくださった先生方、学生のみなさんの協力があってこそだと思います。このような機会を設けてくださってありがとうございました。今回の経験を通して、今後は学校内外で平和についての話し合いの場を設けて、様々な方と考え、共有していける企画を考えていきたいです。

H1 M.N.

今回、第5回ユネスコスクール関東ブロック大会

に参加し、ロシアとウクライナの関係について学ぶ機会を得たことは、私にとって非常に貴重な経験でした。特に、国連の立場に立って議論を行うという役割を担ったことで、一番難しい中立の立場ですし、お互いの同意が必要なのが難しかったです。国際問題に対する理解が深まり、さまざまな視点からのアプローチの重要性を実感しました。

まず、ロシアとウクライナの関係は、地理的要因や、歴史的、政治的、経済的な要因が複雑に絡み合っていることを学びました。特に、クリミア半島の併合や東部ウクライナでの紛争は、国際社会における法の支配や国家の主権に対する重大な挑戦であることを理解しました。国連の立場からは、平和維持や人道的支援の重要性が強調され、国際的な協力が不可欠であることを再認識しました。特に解決方法の中でメディアを遮断すると被害が減るという案や国連だと常任理事国がある限り何を言っても否定されるので解散させる案も出ました。議論の中では、グループ同士で意見を交わし、山崎高校さんの異なる視点を尊重しながら問題解決に向けたアイデアを模索しました。特に印象的だったのは、各国の立場や歴史的背景が議論にどのように影響を与えるかという点です。国連の役割として紛争解決に向けた平和的な手段を模索することの重要性を強く感じました。

また、国際法や人権に関する知識が、議論を進める上での基盤となることも実感しました。国連の一員として、国際社会が直面する課題に対してどのようにアプローチすべきかを考える中で、法的枠組みや倫理的な視点がいかに重要であるかを学びました。特に、紛争地域における人道的支援の必要性なども感じました。お金などの支援をするだけでは、変わらないという気づきもありました。

私は、国際系の進路を考えており、この取り組みで一層、国際関係を学びたいと考えるようになりました。



ユネスコプログラム アジア太平洋青少年相互理解推進プログラムへのチャレンジ 高1 R.O.さん

私は、対話型ワークショップや、Model UNESCO(ユネスコ模擬国連:国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)の国際会議を模擬した教育プログラム)などの多様な手法を用いて、国・地域の垣根を越えた学び合いと交流を進めるユネスコ・アジア文化センター(以下 ACCU)主催の「アジア太平洋青少年相互理解推進プログラム”BRIDGE Across Asia Conference 2024” (以下 BAAC)」へ参加しました。



た高校生がオンラインおよび対面で対話をを行い、お互いの国の文化や社会問題などについて、英語を共通言語としてディスカッションや模擬国連、プレゼンテーションを行うといったものでした。

このプログラムでは、私は、帰国子女やインターナショナルスクール出身など、これといった華やかな経歴を持っていないこともあります。最初は、BAACで出会った仲間たちに圧倒されてしまいました。これまで旅行や短期研修以外で海外へ訪れた経験がなく、今年(高校1年)から大妻中野のグローバルリーダーズコース(GLC)に入った私にとって、彼らのキャリアはとても刺激的なものでした。国内有数の進学校へ通い、6力国語を操り、堪能な英語と豊富な語彙を持つなど、皆さんとてもまぶしく、鮮やかで私にはとても遠い存在に感じられました。「このプログラムを絶対に自分のものにして、これからに活かそう！」そう意気込んで参加した私は、初日に挫折し、萎縮しました。

どうにか議論について行こうとしても、理解するだけで精一杯、意見を求められても、そもそも自分が聞き取った内容がっているのかすら、自信がもてませんでした。しかし、そんな状況の中でも、このプログラムの参加者の皆は、私を受け入れ、私の意見に耳を傾けてくれました。私と同じように萎縮してしまって、「僕の英語が下手だから、ごめん。」そう言った日本人生徒に向けて「君の言葉は僕たちにきちんと届いているし、積極的にコミュニケーションをとろうとしているその姿勢が一番嬉しいんだよ。」そう言ったタイの学生の言葉が忘れられません。自身の足りない部分を受け入れ、お互いを理解しようとする姿は、今回のBAACのメインテーマであった

“ Face myself, Know others, Meet the new world ”

「自分自身と向き合い、他人を理解し、新しい世界に出会う」 ということ、そのものだと感じました。

今回の経験を経て、学んだことは数えきれないほどあります。アジアの各国の皆さんとの価値観の違いを直接、経験したり、参加各国同士でも全く異なる視点があり、その異なる視点で物事をみるといったことはとても新鮮なことでした。つらいこともたくさんありました。このプログラムで得た経験と友人は、何ものにも代えがたい、かけがえのないものとなりました。今後は、他者の考えを理解し、自分の考えを発信するできるようにして、今後の留学、大学生活に活かしたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) 教育協力部の藤本 早恵子様からのメッセージ

Bridge Across Asia Conference 2024に参加された生徒さんのレポートをありがとうございました。このプログラムを通じて得られた学びの大きさや心の変化がありありと伝わり、とても感動しました。多くの皆様に本事業について知っていただく機会にもなり、当方としても光栄です。これからも、どうぞよろしくお願ひいたします。

「第5回ユネスコスクール関東ブロック大会」第5分科会 大学教育棟505教室

タイトル 玉川大学・大妻中野中学校・高等学校・東京都立山崎高校 合同分科会

国際対立の解決に向けたユネスコスクール・ユースの探究ワークショップ

運営者（大学名、学校名、組織名など）

玉川大学教育学部・ユネスコクラブ、東京都立山崎高等学校、大妻中野中学校・高等学校
(グローバルセンター、フロンティア・プロジェクトチーム、複言語取り組みチーム)

プログラム（会の構成、登壇者等）

国際対立が尖鋭化しウクライナやパレスチナなどにおける紛争が深刻化している現在、SDGs が目標とする持続可能な世界の基礎である平和を回復することは人類全体にとって喫緊の課題である。世界の安全保障環境が厳しさを増す現在だからこそ、社会の指導層とは異なる視点や行動力を持った若者へのエンパワメントが必要不可欠である。また、平和で持続可能な社会づくりにむけた若者の主体的イニシアティブを効果的に支援できる教師の役割についての再検討も大きな教育課題と言える。

第5分科会では、玉川大学教育学部・ユネスコクラブの学生、大妻中野中学校高等学校の生徒、東京都立山崎高等学校の生徒で高大連携のプロジェクトチームを作り、「国際対立を解決するにはどうしたらしいか」という問のもと、高校生と大学生とが協働で討議を行い、考得る葛藤解決方法について発表を行う。具体的にはロシアのウクライナ軍事侵攻に焦点を当て、①なぜこの紛争が起こってしまったのか？（原因）、②このウクライナ危機は世界にどのような影響を与えているか（影響）、③この紛争を解決するにはどうしたらしいか（解決）、の3つの問を立てる。この3つの問について、A) ロシアの視点、B) ウクライナの視点、C) 仲裁者としての国連の視点、の3つの立場（3グループ）に分かれてもらい、それぞれの視点から検討する。最後には、異なる視点の間で議論を行い、共通理解が得られるかどうかを検証する。地球市民として「正義の対立」を乗り超える視座を獲得することが狙いである。

分科会のねらい（期待される効果および今後の展望など）

ユネスコスクール加盟校である異学校種（大学、公立高校、私立高校）の生徒・学生達が現在の世界で喫緊の課題である国際対立に焦点を当て、協同で異なる視点から解決法を探究していく議論を行うことは地球市民として葛藤解決スキルを育成するために有効なアクティブラーニングの取り組みになると期待される。

備考（準備過程での留意事項など）

高校生と大学生の間での事前学習と打ち合わせが重要な準備作業になる。

大妻3校協働模擬国連 「SDGs弁当会議」へのチャレンジと実践

大妻グローバル連携として、模擬国連の取り組みを管理機関大妻学院傘下の学校が連携する形で、2024年度から大妻協働模擬国連が始まりました。まず第1回が8月28日(水)、大妻中高、大妻多摩中高、大妻中野中高の3校合同で模擬国連「SDGs弁当会議」が、大妻多摩中高を会場に開催。今回の会議では、「文化や国境を越えて、世界中の皆が幸せに食べられるSDGs弁当を考える」という、実際の国連で扱われる議題より身近なテーマで行われました。



模擬国連の初参加の生徒も多く、事前指導からポジション・ペーパー・プレゼンテーション(PPP=模擬国連の会議に参加する各国の代表が、自国の立場や意見を事前にまとめた文書)の作成まで、試行錯誤を重ねながら準備に励みました。事前指導は大妻中高の関先生と山本先生にご指導いただき、生徒たちは多くの学びを得ました。



この模擬国連を通じて、多くの生徒が世界の国際課題に対して興味を持ってくれたことを大変嬉しく思います。今後も、生徒たちが国際的な視野を広げられる機会を提供していきたいと考えています。

以下、本校の参加生徒の振り返りを紹介します

中3 S.U

私は模擬国連の存在すら知りませんでしたが、今回はやる気のある同級生が多く、友達が経験者ということもあって参加しました。事前のzoom、そして事前学習の時から分からぬ単語が飛び交っていて、当日も「モード」「アンモデ」なども知らず、本当にスタート地点にすら立てていないような状態でした。正直始まってからすぐは、スピーチうまく話せるかな、みんなに追いつけるかな、と不安ばかりでしたが、最初に経験者の大使さんを通して意見の同じ大使さんと話し合うことができました。「モーション」の時も近くにいた経験者の大使さんが小声で教えてくださり、議長の方のとても分かりやすい説明のおかげで助かりました。私たち初心者をしっかりサポートしてくださった経験者の大使さんにはとても感謝しています。

最初は2、3人の國の大使さんと話していましたが、徐々に輪が広まり、最終的には10カ国ほど集まってお話しすることが出来ました。自分は初心者だけれど、ここで自国にとって不利な状況になってはいけないと頑張って沢山提案し、いっぱい意見を言いました。色々な国の意見を取り入れながら、1つの案にまとめるのはすごく難しくて途中みんなで躊躇したり、他のグループの大使さんと本格的な討論になりましたが、話していくうちにどんどん楽しむことが出来ましたし、最終的には他の大使さんと交渉してDRを提出することが出来ました。みんなで1つのお弁当案を作れた時は達成感がとてもありました！！



私は今まで模擬国連のように、みんなで協力して、かつ自分にとっても他の人にとっても良い案を一つにまとめることは、したことがありませんでした。沢山意見を交わしたり、みんなと試行錯誤したりすることもありませんでした。今回の模擬国連を通して、様々な国のことや文化を学びました。また、物事をいろいろな角度から見たり、お互いの利点を尊重し合いながら話をしたりする大切さを知り、前よりもはるかに自分の意見や気持ちを伝えられるようになったと思います。また、心から楽しい！と思うことが出来ました！この経験を生かして、これからもいろいろなことにチャレンジして行きたいです。また、模擬国連も参加したいです！

最後に、このような貴重な機会をプレゼントしてくださった先生方、本当にありがとうございます！

中1 S.H.

今まで授業で同じ学年の友達と話したりという事しかなかったので、高校生などの年上の先輩方が言ってることが具体的すぎてとても驚きました。今回のように他の学年やさらに他の学校の人と色々な形で関わることができ、とてもいい経験になりました。

家に帰ってきて今日の模擬国連はこんな感じだったんだと母に話したら、「あなた、さっきからすごかったしか言ってない。でもそんなにすごかったことは伝わる」と言われました。何がすごかったかというと最初に考えていた雰囲気が違ったこと、誰かが似た意見の人たちを集ませて互いの国益を合わせて一つのものがどんどん作りあがっていったことです。ひとつの DR に入っているすべての人が納得いくようなものを作るのってこんなに時間がかかるんだと思いました。「私たちはブルーベリーパイという一つのものが伝統料理のようになっているから他のものは入れないで欲しい」とおっしゃっている先輩がいました。ただ全ての国の要望を聞くだけじゃできないんだと実感しました。

私はオーストラリアのどんなことを調べればいいんだろうと何も分からぬ状態からやったので PPP の作成やスピーチの原稿作りはとても苦労しました。でもペアの友達と必死に考え、調べた時間は本番に生かされていたことに気づきました。これからも英語の勉強や自分から動くことを日常生活から意識していきたいです。

中3 Y.H.

私にとって 3 回目の模擬国連参加でした。これまでの参加では分からぬことが多かったのですが、今回は模擬国連の流れやルールをしっかりと把握して臨むことができました。

「お弁当」は身近な物ですが、世界中の人々が幸せにおいしく食べられる SDGs 弁当を考えるのは難しかったです。しかし、3 校の活発な話し合いの結果、最終的に DR を 3 つに絞ることができ、私の知識も大いに深りました。

模擬国連はただ参加するだけではなく、積極的に国益を守るために発言し、他国をリードすることが重要だと実感しました。また、今回は自国の情勢を把握するのが精一杯でしたが、次回は他国的情勢も事前に調べ、より準備をして会議に臨みたいと思います。

私が今回ルールを理解できたのは、大妻中高のフロントの方々や、大妻多摩の積極的リードのおかげです。私も皆さんのように他国を引っ張っていけるような大使になれるよう、これからも頑張ります。ありがとうございました。

冬の大妻模擬国連@大妻女子大学千代田キャンパスへのチャレンジ

12月19日～21日の立命館宇治中高 模擬国連に続いて、12月末には、大妻模擬国連会議(大妻女子大学千代田キャンパス)でも大いに活躍しました。この会議には、本校から中学2年・3年・高校1年から計21名が各国代表として参



加しました。今回は「海洋保全と持続可能な利用のためのグローバル行動計画」をテーマに、生徒たちは国際的な課題に真剣に取り組みました。

サポートした Spencer Schwartz 先生から

この模擬国連の後、生徒たちが全力を尽くしたことを探いました。しかし、生徒たちはそんな思いを超えて、生徒たちは集まり、次回に向けてどのように改善し、さらに何ができるかを真剣に話し合いました。彼らは次回、さらに素晴らしい成果を出せる

と確信しています。この経験が、模擬国連だけでなく、世界の連携校とのプロジェクトなど、今後の具体的な取り組みにどうつながっていくのか、とても楽しみにしています。

参加した生徒の振り返り - 高1 N.K.

今回、学んだや気づいたことがたくさんあります。まず、周りの大使の皆さんの積極性に驚かされました。会議を進めていく上で自ら意見を出したり、他の大使たちに反対の意見を言うという場面がありました。特にモーションやグル

一ピングの時のその議場の雰囲気が一変し一斉にみんなが声を上げる場面は今まで体験したことの無いような感覚でした。

今回は国連海洋会議で海洋問題自体もともとそんなに知識を持っていなくて、とても準備が必要だと感じ、私は日本大使だったため日本の課題を調べ、自国の提案する政策を考えて会議に臨みました。しかし他国の大使の自国の現状やできることできないことなどの知識量が自分とは大きく差があり、模擬国連に参加するうえで準備がとても足りなかつたことに気付かされました。

さらに、この 2 日間の会議によって他校の生徒さんと関わることで自分の学校だけじゃなくもっと広い範囲で関係を築けることの重要性、それがどれだけ貴重な機会かを知りました。他校でなくとも初対面の人とのコミュニケーション能力も鍛えられると思いました。また複数の人と喋ることが大半なので情報の処理能力や集中力も鍛えられると感じました。

このような経験をたくさん積んでいくと本当にたくさんの能力が身につくし、たくさんの知識が得られるととても感じました。大妻中野でこのような体験をさせていただけることは当たり前ではなく感謝したいと思いました。次回からの模擬国連はさらに自国についての知識量を増やし、もっと会議に参加できるようにしたいです。



立命館宇治中学校・高等学校 模擬国連大会 2024へのチャレンジ！

本校は、立命館宇治の模擬国連には、オンライン時代から、5年連続での参加になりました。今回も 2024 年 12 月 19 日から 21 日の 3 日間で、第 6 回立命館宇治模擬国連に、約 30 名の中 1 から高 2 までの生徒が、立命館大学びわこ・くさつキャンパスへ遠征参加し、大きな成果をあげました。この経験が、模擬国連だけでなく、世界の連携校とのプロジェクトなど、今後の具体的な取り組みにどうつながっていくのか、とても楽しみにしています。参加した生徒の振り返りを紹介します。

中3 S.K.

私が参加した立命館宇治模擬国連の Commission C は、模擬国連の中でも、全員が単独の完全英語の議場です。今回の会議は合計 3 日間で、オンラインでの準備日後に、正式な模擬国連が 2 日間行われました。

まず、オンラインの準備日には特殊な模擬国連システムの説明と、その実践をしました。実践するテーマが、コーヒーとお茶の生産の経済的価値について、という面白い内容で、良いアイスブレイクでした。スピーチの内容を即席で考える必要があり少し緊張しましたが、皆さん、すでに準備していたかのように流暢に話していくかっこよかったです。

立命館大学びわこ・くさつキャンパスで開催された模擬国連の二日間は、とても刺激的でよい経験になりました。1 日

目は完全に英語のみの環境に適応するのに時間がかかるつてしまい、大変でした。Commission C には、英語を母語として扱う生徒や、日本語と同等に実用することができる生徒がたくさんいました。そのため、会議中も含めて日常会話はすべて英語でした。帰国生ではない私は、そのようにアカデミックな英語を日常的に触れる機会が今までなかったので、慣れるのが大変でした。私はそれを克服するために、英語の文法や、相手がどう思うか、気にせずに思い切って話してみました。すると、周りの人たちが自然に話しかけてくれるようになって、嬉しかったです。

2 日目は、それを踏まえて、英語を即席で活用し、文章や



スピーチを書くことに挑戦しました。スピーチには、事前にほとんど準備をせずに話し始めることをやってみることにしました。緊張してなかなか挙手できずにいたスピーチ希望を、同じグループの仲間に勧められて挙手してしまいました。

全体を振り返って、今回の模擬国連では、英語をスムーズに使うことに関して努力することができました。私の議場はIB 取得を目指している人が多く、英語の発言はもちろんのこと、日常会話も英語でした。私にとってこの議場に参加することはとても良い機会になりました。ありがとうございました。

中3 K.E.

立命館宇治さんの模擬国連では、初めての英語議場、また初めての関西スタイルということで緊張していた。関東でのやり方は、事前に自国の政策のみをまとめておき、会議本番に、みんなで意見をすり合わせながら決議案を「作っていく方式だ。だが、関西でのやり方は会議前にできるだけ国同士の政策をまとめて暫定的な決議案を作つておき、会議本番で質問、調整を通して改良していく方式だった。関西スタイルの自分の国の意見が反映された決議案が通らないかもしれない、ひょっとしたら提出すらできないかもしれない、という臨場感はあまりなかったが、一点について深く議論でき、新鮮でまた楽しかった。

また、関西スタイル独特だと感じたことがもう一つある。その議場の中で議題が 3 つあり、その中でさらにサブトピックとして 3 つに分かれているというものだ。その中から二つを選んで議論した。そのため、ペアが一人ずつ一つのトピックに集中しなければならないので、関東のように内政、外交と別れることはなかった。

私が参加したのは、「Peace, Justice, and Strong Institution」の中の、私が「Combatting human trafficking and modern slavery」、相方が「Rehabilitation and reintegration programs for victims of forced labor」であった。

関東スタイルは公式会議以外の水面下のやり取りも強く再現されていると感じたのに対し、関西スタイルはおそらく、実際の公式の国連での会議もこのような感じなんだろうな、と感じた部分が多かった。

全体的に落ち着いた雰囲気の会議で、英語の議場にも初めて参加したが、わたしやペアの和田さんは日本語議場の出場経験があったので、みんなの行動や雰囲気を見てその時起こっているアクションについてなんとなく推測することができた。英語でのスピーチも原稿を読むだけで終わるのは悔しく、他の人の発言から文言を聞き取り、モーションを発動することができた。大きな目標でなくても、なにかしらの爪跡を残そうとする意識は大切なのかもしれない。

高2 H.S.

It was my first time participating in Ritsumeikan Uji MUN, despite having participated in other MUNs previously. While I was unsure if I could properly express our clauses in the meeting, my pair and I prepared by researching about our country and attended the online meeting. Many other delegates kindly assisted me, so my excitement grew despite my nervousness. On the actual day, I was glad to see many of the delegates I had met online. Nonetheless, I felt relieved. I could not give a confident speech on the first day, but I was able to submit the amendment on the second day. This was a precious experience for me to meet with all the other delegates from all around the country.

高2 A.W.

It was my very first time participating in an MUN conference. Surprisingly, it was much more complicated than I had initially expected. Everything had to be done at a fast pace and with great attention to detail. My assigned country was Argentina, and before becoming its delegate, I knew very little about the nation. However, I had to step into the role of representing Argentina. During the MUN, I felt immense pressure alongside a mix of emotions. One key lesson I learned from this experience was the importance of communication skills in collaborating with other countries to draft and submit amendments. I believe this skill is essential in certain circumstances and will play a significant role in life. The MUN conference helped me realize how crucial this skill truly is.

WWL ALネットワークを活用したカリキュラム研究開発・実践 グローバル・キャリア・セミナー

ALネットワーク事務局
大妻中野グローバルセンター

グローバルな視点で、様々な課題に取り組み、自身のキャリアを切り開く力を身に付けるために、本校のWWL取り組みの一環として、以下の3回にわたって、ALネットワークを活用したグローバル・キャリア・セミナーを実施した。

① 高2 GISIIと連携したグローバル・キャリア・セミナー(エアカナダ日本支社)

日時: 2024年10月22日(火) 7限 15:25 – 16:15

場所: 本校 Cosmos アゴラ

テーマ: 「外資系企業やグローバル企業でのキャリアに求められる力 を探究する」

講師: エア・カナダ (Air Canada) 日本支社長伊藤 正彰 (いとう まさあき)氏

内容: 長年、航空業界で活躍され、現在、カナダ最大の航空会社であるエア・カナダ日本支社長に就任されている伊藤氏から、エア・カナダのヴァリューや人材観とともに、グローバルな企業で活躍するために求められることを踏まえた高校時代や大学での取り組みへの指針をいただいた。

② 高3対象 第1回 ABIC グローバル・キャリア・セミナー

日時: 2025年1月29日 3限~4限

場所: 本校 Cosmos アゴラ

テーマ: 「グローバル時代を生き抜く女性のキャリア形成」 - 多様性を受容する力を身に付け、予測不能で複雑な現代のグローバル社会で活躍する女性としての生き方を、講師の経験から一緒に考えます -

講師: 藤巻 奈津子 氏 (グローバル人材育成起業)

内容: 「グローバル時代を生き抜く女性のキャリア形成 - VUCA 時代に自分の道を自分で切り開く力~」というトピックで、自身で、働く女性を支援するビジネスを起業している藤巻奈津子氏を講師に行われました。

藤巻氏は、日本女子大学卒業、London School of Economics 修士修了。働く女性支援&子ども向けグローバル人材教育起業。高校時代、大学時代、大学院と3回の留学を経験されて、企業勤務から自分で起業されたことを振り返り、高校を卒業する高校3年生に向けて、アドバイスをされました。

③ 中1~高3対象 第2回 ABIC グローバル・キャリア・セミナー

日時: 2025年2月22日 15:00 – 16:30

場所: 本校 Cosmos アゴラ

テーマ: 「女性が長期的視点を持って真剣に社会とかかわるために」

講師: 川口 恵 氏 - 上智大学卒業、総合商社 統括部部長。

内容: 男女ともに働くことが当たり前の現代だが、「女性が長期的視点を持って、真剣に社会とかかわろうとする」と自体が生意気で問題のある考え方として忌避された」という世の中の矛盾は完全に解消されたわけではなく、根雪のように残っている。今回、自分自身の体験を通して何を考え(目の前に差し出されたハードルをチャンスとして認識して避けることをしない、その場でベストを尽くす、トラックレコードを意識する等)、どうやって人生を過ごしてきたかを、潔癖症だったことによる失敗も含めて、参加者と共有して考える機会となった。

① 高2 GISIIと連携したグローバル・キャリア・セミナー(エアカナダ日本支社) 参加した生徒の振り返り -

H2 R.K.

伊藤さんのお話を聞いて、海外で働きたい意思がさらに強まりました。英語がままならない中、自分の夢を叶えるために、海外の企業に就職することなど、とても勇気がいる行動にとても感動しました。最初は、伊藤さんは帰国子女で元

から英語喋れるのかなと思っていたのですが、自分と同じように日本で生まれ育って、そこから英語を学んでいったんだと聞き、とても親近感が湧きました。自分の夢、入りたい大学はありますが、大学を卒業したあの、就職先に海外の会社も視野に入れてみようと思いました。そして、今幸せと感じることについて、自分のやりたいことができていると仰っていたことから、自分もやりたいことを諦めずに、自分で自分の道を選択し、後悔しないように今できることをやり遂げようと思いました。とても貴重な時間でした。

H2 H.E.

私は伊藤先生の話を聞いて、どんな仕事に就くとしても企業や組織に入るためには、若いうちから勉学に励むことの必要性や、自分にできることをアピールする力(Confidence)や私はこの仕事に全力を注ぐという意識(passion)の重要性について学びました。

また伊藤先生は語学において40代で英語を学び始めたということから大変苦労されており、その当時だったからといることもあるのかと思いますが、国に帰れというきつい言葉をかけられたらしく、その体験談を聞いたとき私は自分がフランスの現地校で周りの人から当時フランス語での意思疎通が上手くいかないから呆れられたことを思い出しました。伊藤先生がおっしゃっていたように失敗は自分をむしろ成長させてくれるもので、私が今までの学校生活で失敗してきたことは決して恥なのではなく、寧ろ今のうちに失敗できるこの環境に自分が所属できていることがとても恵まれていると感じました。私は産婦人科医になりたいという夢があり、私のその夢に対する情熱は人一倍あるという自信があります。伊藤先生のように好きなことを仕事にできるようになるためにまずは大学受験など人生において与えられたタスクを一つ一つ地道にこなすことだと思うので、それに向かって日々精進してまいりたいと思います。

H2 M.S.

今回のセミナーで、私は初めて航空会社の方のお話を聞きました。冒頭で見た工ア・カナダの安全ビデオが、カナダの各州で撮影されていて、カナダの景色を知ることができました。また英語とフランス語が公用語のため、2言語+字幕で流れていて、とてもグローバルだと感じました。

伊藤さんの話を聞いて、伊藤さんの努力と強い意志を感じました。自分の夢をできないから諦めるのではなく、どうしたらその夢や目標に近づけるか、大学受験や社会人になる時に念頭におき、日々励んでいきたいと思いました。

また伊藤さんの行動力にも心を動かされました。日本がだめなら海外へと、可能性と選択肢を自ら広め、自らの手で海外航空会社への就職を掴めていて、かっこいいと思いました。海外の企業や海外で働くことに興味があるので、日本の大学に行ったから、日本の会社に入るとだけ考えず、自分でどうしたら海外で働くことに近づけるか考え行動することを実行していきたいです。

② 高3対象 第1回 ABIC グローバル・キャリア・セミナー 参加した高3生の振り返り

近年の日本社会では男女平等について様々な政策や制度の改革があるけれど、いまだに社会に出たら女性が困難な場面に遭遇することが多いということを学んだ。女性がキャリアを積むには、そのような制度や改革をただ待つのではなく、自分自身で道を切り開き継続してキャリア形成をすることが必要だと言うことがわかった。終身雇用制度が廃止されていきパフォーマンスが重要視されてきている現代の社会において、グローバルな視野・先見性、論理的な思考力、物事の本質、背景を分析する力、教養が大学生のうちに習得するとよく、女性のキャリア形成にはスキルセット、希望する職種に求められるスキルや経験、行動力、問題解決能力、一步踏み出して挑戦する勇気が大切だということも学ぶことができた。



女性がもっと活躍できる社会を実現するために、自分にできることを考えたいと思いました。将来結婚や出産といったライフイベントを迎えるても、自分のキャリアを諦めずに続けられる環境を整えることが大切だと感じました。そのため

には職場の制度やサポート体制を知るだけでなく、自らも柔軟な働き方を模索し周囲と協力しながら働く力を身につける必要があると思います。また、家庭と仕事を両立している先輩女性の経験を学び、実際の働き方の工夫や考え方を吸収していきたいです。社会全体で多様な働き方を認め、男女問わず誰もが活躍できる環境を作るために、私自身も行動していきたいと感じました。

日本のジェンダーギャップ指数

▶ 日本は146カ国中118位(2024/6/12発表)
ジェンダー・ギャップ指数(GGI) 2024年

セミナー講師 藤巻奈津子氏からのメッセージ

みんなの前でお話をする機会を頂き、ありがとうございました。学んだことを、しっかりと振り返り、みなさ

んがそれぞれの目標に向かって、将来に向けて具体的なステップを考え、「行動に移そう」、「頑張ろう」と思うことが素晴らしいです。「自分がどのように活躍したいか」を考え、ギャップイヤーの学びを深めていってください。

セミナーで、「自分と向き合うこと」や「多様な人と関わること」の大切さを学んだと感想を寄せてくれた方多かったです。キャリアの土台となるのは、自分の価値観や目標を明確にすることです。ぜひ、多様な人との交流を通じて、自分自身を見つめ直したり、多様な見方を身につけたりして下さい。その中で、自分が大事にしたいことが見えてきます。また、世界や日本で起こっていることについて、SNSだけではなく、新聞などの媒体を通してニュースにもアンテナを張るとさらに良いと思います。新聞は、今はオンラインでも読むことができますし、自分の関心のある分野以外の一般教養や知識を身につけることができ、視野を広げてくれます。インターンシップやアルバイトも良い経験になると思います。

皆さんから、「VUCA」についても感想を多く頂きました。VUCA時代には「アントレプレナーシップ」が大事になります。例えば、ある仕事が10年後には、AIに取って代わられるかもしれません。また、コロナのような感染症が流行し、今までの「常識」が「非常識」になるかもしれません。その様なとき、諦めるのではなく、柔軟に変化に応じて、新たな価値を創出するにはどうしたら良いか、新しいサービスや仕事を生み出すにはどうすれば良いかなど考え、指示を待つではなく、自ら行動をとっていくことが求められます。

起業でなく会社勤めをする場合でも、この様な心構えや思考、行動力は、VUCA時代にはとても重要です。アントレプレナーシップを身につけることで、どんな変化にも対応できる柔軟な思考を持ち、自分の道を切り開くことができます。皆さんのこれからの大學生がより充実したものになることを願っています。みんなの意欲と行動力が、みんなの未来につながりますので、心から応援しています！

※「アントレプレナーシップ」とは、起業家的行動能力のことであり、新たな事業を創造し、リスクに立ち向かう姿勢を意味します。引用元:東大IPC <https://www.utokyo-ipc.co.jp/column/entrepreneurship/>

③ 中1~高3対象 第2回 ABIC グローバル・キャリア・セミナー

参加された保護者の振り返りから

貴重な機会ありがとうございました。先生ご自身の経験された事を先生自身の言葉で話していただきとても説得力がありました。娘にも感想を聞いたところ、「何に価値観をおいて勉強してその後就職して生きていけばよいのかわからない。実は今混乱している。日々悩んでいる。今日の話しを聞いてさらに混乱してる。でも、この混乱はいい事なんだ。と気づいた。じっくり混乱しよう。」と。

大人になったら悩みがなくなると思っていたようです。今日の先生も悩んで悩んで生きていたと思うよ。死ぬまで悩みは続くよ、大切なのは逃げないで悩みを解決する為に、人に相談したり、勉強したりすることだと思うよ。何よりもその問題に真摯に向き合うことだよ。そして人間は死ぬまで一生勉強勉強！と伝えました。などなど娘と話しました。帰りに『新13歳のハロワーク』を買ってあげました。

参加した高校生の振り返りから

私も世界に関わる仕事、仕事を口実にして海外に行きたいなと思っていたのでとても参考になりました。また、その将来の夢を実現するためにもまずは語学力を伸ばすこと、国際経験を積むこと、その上で新たな価値観を広げたり、自らの冒険心や楽観性を育てていくことを大事にしていこうと思いました。

IV. WWL 拠点校 - 研究開発・実践 (カリキュラム) 中1 探究と生徒の成果

中学1年学年主任・理科担当 宮川 七菜
中学1年探究国語担当 市川直人

0. WWL 拠点校構想名「繋ぐ・行動する - “Beyond School” アプローチによる協働型の地球市民教育 -」の実践

1. 取り組みの概要とねらい

本校では、SGH ネットワーク校としての取り組みの中で、特に「探究」をあらゆる教育活動・授業で実践することを目指して、2022年度以降、ホールスクール・全校探究化に取り組んでいる。この「探究全校化」が、本校の WWL 拠点校として取り組みの土台となっており、さらに、上記の構想にある“Beyond School” - 学校を超えた繋がりを意識した探究カリキュラム開発と実践に繋がっている。

この探究への取り組みの中で、本校では、中学1年次で理科授業において個人での自由研究をもとにポスター発表を実践し、そして国語の授業で探究アプローチによるプログラムの開発、改善に取り組んだ。

2. 実施時期と対象生徒

中学1年次の年間の取り組みで、中学1年生全員を対象としている。

3. 外部との連携、協働、関連

- ・あおぞら高等学院主催「なりたい大人作文コンクール」への出品
- ・法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催「“社会を明るくする運動”作文コンテスト」への出品

4. 取り組み内容と生徒の変容、成果、振り返り、成果物など

①理科の自由研究におけるポスター発表

1学期のうちから「身近にあるなぜ」を意識できるように授業を実施し、夏休みに実験・観察を取り入れた自由研究を行った。テーマを決めるところから生徒自身が行い、仮説をたて、それを実証するための実験や観察を行うため、生徒自身が非常に興味を持って課題に取り組める。結果と考察・感想までをまとめたのち、一人3分間のポスター発表ができるように発表用資料の作成までを夏休みの宿題とした。夏休み明けの授業で、複数クラスで合同授業とし、発表者一人に対し、二~三名の聴講者でポスター発表を行い、聴講者は必ず質問を行うようにして意見交換まで実施することを、3回行った。そして、各クラスから二~三名の代表を選出し、代表生徒のポスターは文化祭に向けて展示を行った。

授業後に行った生徒の振り返りでは、話し手・聞き手それぞれの難しさを学べたという意見が非常に多かった。これまでグループで発表をする機会や一方的に成果を発表する機会はあっても、セッション形式のものは経験がほぼない生徒が多かったため、最初のポスター発表の際には時間配分や質問対応がうまくできていなかったが、3回目になると発表のコツをつかめたり、質問に対する考え方や想定ができるようになったりして対応力を育むことができたと思う。また、振り返りの意見の中には、理科の自由研究ということで様々な自由研究の題材があり、自分の知らないことに気づけたり、同じテーマでもアプローチ方法や考察が異なったりするということもあり、知識や物の見方の視野も広がったという意見が多く見られた。これも、自由研究という課題を提出して教員が評価をするだけにせずに、生徒同士で発表をする・意見交換をすることによって生まれた感想だと思える。このポスター発表は自分一人ですべてを担ったため、知的好奇心の育成に加えて、探究心を育成するいい機会にもなったと考える。次年度以降は、外部へのプログラムやコンクールへの参加を促していく予定である。

この取り組みの生徒成果物の例を以下に示す。

■実験方法	■目的・仮定
①100gのフルーチュの氷に 同じ量(同じ時間凍庫で冷やす)。同じ量(100g)の牛乳、 豆乳、低脂肪乳、オーツミルク、アーモンドミルクを入れ よく混ぜる	目的：フルーチュは牛乳以外でも作れるのか調べ。牛乳の 役割や性質などを知る。
②出来上がったら冷蔵庫で冷やす	仮説：低脂肪牛乳は牛乳と同じで牛からできているから 牛乳と味も匂いもどちらも違わないと思う。 でも、豆乳やオーツミルク、アーモンドミルクは 原材料が違うから作れないと思う。



ピタゴラスのカットの原理

2 事前調査

1 この実験をしようと思ったきっかけ

① テーマ：氷に食塩を加えて水を冷やしたとき、どのような条件の場合に最も温度を低くすることができますか？

② きっかけ：暑い日が続くこの夏は、よく飲み物の周りを氷で冷やしている。そこで氷に食塩を加えることで、温度が0℃以下になるという事をを利用して、より飲み物の温度を下げたいと考へた。

③ 目的・方法

（方法）材料：食塩、氷、水、温度計
（目的）様々な条件で氷を冷やし、水の温度変化を調べる。その際、温度が温度が底になった時の条件を観察する。

（手順）ガラスの量皿中に水100mL注ぎ、温度計を挿入。その周囲に一面氷を盛り、手で氷を揉む。氷に食塩を1kg（100g）をまぶし、手で揉む。これを繰り返す。30分後まで。水の量を温度を計測する。
 ※最初は水位が下る。

☆測定した温度には誤差が生じるが、各条件ごとに測る。その平均値を扱うものとする。（小数第1位を四捨五入）

④ 実験結果

右の図は、4つの条件で5分毎に計測した温度の平均値をグラフにしてみた。

（誤差）
 温度の変化が大きいのは4条件のときであり、30分後も最も水の温度が低いのが4条件の条件。

4条件よりは変化が小さい。それと同じくらい2条件の条件で温度が底化している。

1条件（標準）と3条件の温度差は1℃あまり大きい。

どの条件も時間とともに変化が底化している。

☆4条件（氷を揉んでいた）と2条件の温度差を比較してみると、

⑤ 考察

水を揉んでいた（4の条件）と揉んでいない条件（2の条件）の温度が0℃以下にならなかった。氷に食塩を加えたが、温度が底化しない（2の条件）と水を揉んでいたが、温度が底化しない（4の条件）。

水の量を減らすと、水の「冰点」が下がる。氷を揉むと、水の量が減る。温度が底化しない。

⑥ 結論

氷を揉んでいたことで、水の「冰点」が下がった。氷を揉んでいたことで、水の量が減った。水の量が減ると、温度が底化しない。

②探究国語

この探究国語の授業は、「話す」「書く」「聞く」「読む」活動を通じて、生徒たちの思考力・表現力の向上を図るとともに、伝統的な言語文化に対する理解と関心を高めてゆくことを目的として構成されている。

1 学期にはオリエンテーション旅行でお世話になった宿泊先へのお礼状作成や数名ずつのグループに分かれて学校所在地である「中野」についての探究活動を行った。「中野の歴史」「中野の環境問題」等のテーマ設定は各自で行い、クラスごとにその活動の成果を互いに発表した。

2 学期には自身の将来を考え、それを言語化する活動として「なりたい大人作文コンクール」に中学1年生248名が応募し、全国27,446通の応募から1名が入選した。またそれと合わせて中学1年生の希望者3名が「社会を明るくする運動」作文コンテストに応募。全国301,664点(中学生171,824点)の中から1名が中野区推進委員会委員長賞の受賞に至り、中野区代表として選出された。この他、オリエンテーション旅行での山梨についての探究活動や文化祭でのクラスごとの探究活動の成果をふまえ、総合の授業内でも SDGs についてのプレゼンテーションを行った。この活動ではクラスごとに数名のグループに分かれ、「ジェンダー平等の実現」「質の高い教育をみんなに」といったテーマをグループごとに設定し、現在課題となっていることやその課題に自分たちがどのようにアプローチしてゆけるか、プレゼンテーションを試みた。

3 学期には我が国の伝統的な言語文化を学ぶ活動として中学1年生全体での百人一首大会を企画し、クラスごとに百人一首の理解を深める活動や「百人一首かるた」の実践を行った。それと同時に「書写」のテキストを活用して楷書、行書、草書といった書体の違いを紹介し、書く目的に応じて筆記用具だけでなく書体を使い分けることでメッセージをより効果的に伝えることを学習した。また、日本の伝統文化である和紙や墨がどのように作られているか、後継者不足をいかに乗り越えようとしているかについて、映像資料をもとに学習を進めた。

【受賞・入選】

- ・第6回おおぞら全国中学生「なりたい大人作文コンクール」
入選「あったかい。」中1K.A.
- ・第74回“社会を明るくする運動”作文コンテスト
中野区推進委員会委員長賞「悩みを一人で我慢しないで」中1T.M.

【生徒成果物】

SDGs 5
～ジェンダー平等を実現しよう～

○取り組み [海外]
・ドイツでは女性ワーキング法(女性比率に関わる何らかの目標値を掲げ、女性比率に直接の影響を及ぼさない措置)が制定されている。職場において、意思決定を行う上層部の男女平等を達めることで、一般労働者にも男女平等の実現を期待して実現されたりである。

○ジェンダーとは [日本]
・指導的地位に就く女性の割合を30%に。
→ 2030年には性別意識をなくし、誰もが活躍できる社会となることを目指し、政治分野や民間企業において女性が指導的地位に就く割合を30%にねらうと目標としている。

○問題
・衆議院の女性議員比率が9.7%
特に日本のジェンダーギャップ指数が格差が大きいとされる政治分野では、衆議院の女性議員比率が9.7%にとどまっている。
これは、政治は男性が行うものという考え方があるから。
家事や子育てを行う男性が少ない
内閣府の調査によると、1日当たりの育児・家事の時間は、夫が83分、妻が154分と、1.8倍以上の差がある。

○解決策 (Point)
・一人一人がジェンダーに关心を持ち、募集中イベントに参加する。
・家庭内の家事や育児の分担を女性や男性が関係なく、協力して行う。
・誰もが相手の性別を認め、誰も批判しない社会を作り出す。

【題名】
SDGs 4
【目的】
① 2030年までに全ての子どもが公平で質の高い教育を受けるようにする。
② 小・中学校を再編するようにする。
③ 住民に開かれた力を育成する。
④ すべての子どもが小学校にあがむための準備が整ふようにする。
※ 読書率
…書の読み書きや文章を理解できる能力のこと。

【現状・問題点】
○いじめや虐待による不登校
○子供が勤く→勉強がしたくても出来ない
○コロナの影響で教育の機会がうまいる。
○教員不足
・経済的に貧しく、
※ 読書率
男子 90%
答え
○中性の読み書き率の割合が何パーセントでしょうか？

○性別
・男女の割合
男の子 約2200万人
女の子 約2100万人

1. 取り組みの概要とねらい

本校では、SGH ネットワーク校としての取り組みの中で、特に「探究」をあらゆる教育活動・授業で実践することを目指して、2022年度以降、ホールスクール・全校探究化に取り組んでいる。この「探究全校化」が、本校の WWL 拠点校として取り組みの土台となっており、さらに、上記の構想にある“Beyond School” - 学校を超えた繋がりを意識した探究カリキュラム開発と実践に繋がっている。

この探究への取り組みの中で、本校では、中学2年次で、探究社会を設置して、Beyond School（外部プログラムを効果的に活用したカリキュラム開発）を実践している。探究社会は「アウトプット」の力を伸ばすことを目的としています。今年度の授業もアウトプットの力を伸ばすことを重要な目標として展開しました。

2. WWL 関連 WiDS TOKYO@Otsuma Women's University プロジェクト

この探究社会では、最後の課題として WiDS TOKYO のコンペティションへ、Beyond School アプローチとしてチャレンジしました。* WiDS…Women in Data Science の略で、ジェンダーに関係なく、データサイエンス分野で活躍する人材を育成する目的の活動。

(1)取り組みの手順

- ・SDGs の目標を決める（1つでも複数でも可）。
- ・キーワードを決める。
- ・データを用いて目標を達成するためのアイディアを考える、作る。

(2)審査方法

- ・データ思考…データをもとに提案、主張が展開されているか？
- ・SDGs 目標の実現を目指す斬新な提案、主張になっているか？
- ・分かりやすく、共感を得られるような発表、表現かどうか？

(3)審査方法

- ・一次審査…応募されたものを大妻女子大学職員が書類審査。
- ・二次審査…一次審査を通過した人（10組程度）は、ショートプレゼン動画（5分以内）を作成。
- ・最優秀賞1組、優秀賞2組を決定し 3/11 のシンポジウムで受賞者の発表、表彰。

3. WiDS TOKYO@Otsuma Women's University プロジェクト での成果物

教育でジェンダー・ギャップ
を無くすためには
～男女別学をあえて作る～



大妻中野中学校

アイスランドは男女平等

- ・同じ仕事をする男性と女性に対して同じお給料を支払う
- ・企業は役員の4割を女性にするクオーター法
- ・1980年には初めて女性大統領が誕生したり、女性だけの党がでたり、と国会議員や首相も女性が担う社会になってきた
- ・子供を抱いて会議に参加する
- ・男性が育休を取ることも当たり前



アイスランドの幼児教育は…



日本でも…

男女別学を あえて作る



持続可能な社会を目指す – グローバル課題への解決法の提案

13 気候変動に
具体的な対策を

1. アイディア

バイオマスインキ
を使った商品を広める

出典: SDGs ACTION!
「商品になぜ環境のマークで見るSDGs?」
<https://www.asahi.com/sdgs/article/14365672>

2. 世界で大問題 気候変動

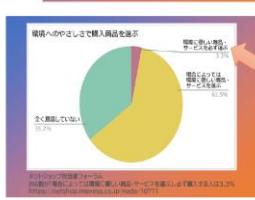
海面温度の上昇



干ばつ



環境問題に
興味を持っている人は
全体の80%以上



実際に環境へのやさしさで
商品を選ぶ人の割合は
たったの3.3%

4. 地球の未来への展望



バイオマスインキを使うことが当然になり、
バイオマスインキマーク表示が不要となる

→ CO2の排出量が減り、
SDGs目標13番の達成につながる

また、他のSDGs課題を解決していく

WWL 拠点校構想「繋ぐ・行動する – “Beyond School” アプローチによる協働型の地球市民教育-」の実践

1. 取り組みの概要とねらい

本校では、SGH ネットワーク校としての取り組みの中で、特に「探究」をあらゆる教育活動・授業で実践することを目指して、2022年度以降、ホールスクール・全校探究化に取り組んでいる。この「探究全校化」が、本校の WWL 拠点校として取り組みの土台となっており、さらに、上記の構想にある“Beyond School” - 学校を超えた繋がりを意識した探究カリキュラム開発と実践に繋がっている。

この探究への取り組みの中で、本校では、中学探究の総まとめで、かつ高等学校への深い学びに繋がるステップとして中学3年次の「総合的な学習の時間(探究)」を数学科が担当している。ねらいは、社会課題の設定、データ分析による課題の可視化、課題解決に向けた仮説構築とリサーチ、発表・成果普及というプロセスを数学的な視点を活用して実践することである。

2. 実施時期と対象生徒

中学3年次の年間の取り組みで、中学3年生全員を対象としている。

3. 外部との連携、協働、関連

この取り組みでは、Beyond School として、東京都が主催している「東京都統計グラフコンクール」へ参加。

4. 取り組み内容と生徒の変容、成果、振り返り、成果物など

この探究数学の授業では前半(1学期～夏休み明けまで)と後半の二段階構成とし、前半の個人探究はより総まとめとしての意味合いが強く、後半のグループ探究は高校での探究に繋がる橋渡しを意識している。前半は「東京都統計グラフコンクール」に応募するためのポスター製作を主軸に置き、生徒たちにあまり馴染みのない Microsoft Excel での図表・グラフ作成とテーマ設定を各自が行なう。テーマ設定は中学1年次から各授業や文化祭などの行事を通して探究してきた SDGs に関連する社会課題から、自身の興味がある「推し活事情」まで様々である。統計グラフを作成する必要があるため、主にインターネットから信頼できるデータを収集する手法を学び、単なる調べ学習ではなく、流れのある展開と説得力を持った主張を行うポスター製作を目指した。

2024年度中学3年生229名中213名が事務局へ応募し、事情により応募できなかった生徒も合わせると98%がポスター製作を完了し、クラス内での発表(口頭発表はなし、本来の趣旨に即したポスター閲覧のみ)を経て自己評価と振り返りを行なった。

なお、この東京都統計グラフコンクールでは、今年度は小学生から大学生・一般の方まで、作品 1,965 点、総勢 2,221 名もの応募があり、その中から、今年度は、本校から以下の 5 名もの生徒が入賞し、3 年連続の入賞を果たすという優れた成果をあげている。以下、参照として主催の東京都の HP を記す。

<https://www.toukei.metro.tokyo.lg.jp/kidsc/gc-2024/index.htm>

入選 SNS×選挙 ～SNS は政治にどう影響しているのか～ Y.H.

佳作 日本の農業の未来について考えてみよう グラフで考える原因と身近にできる解決方法 M.I.

私の学校がある東京都中野区ってどんなところ？ E.O.

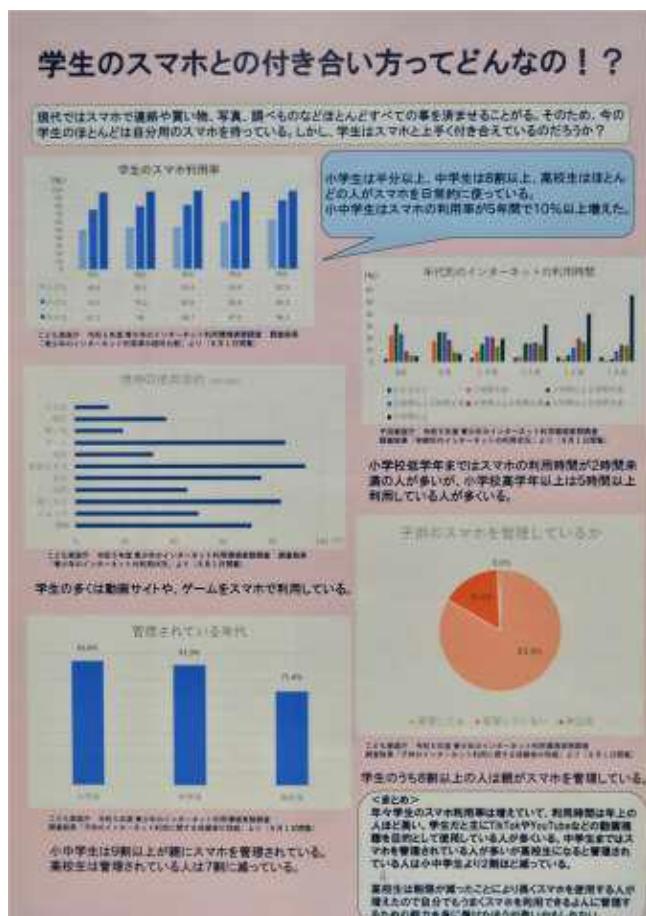
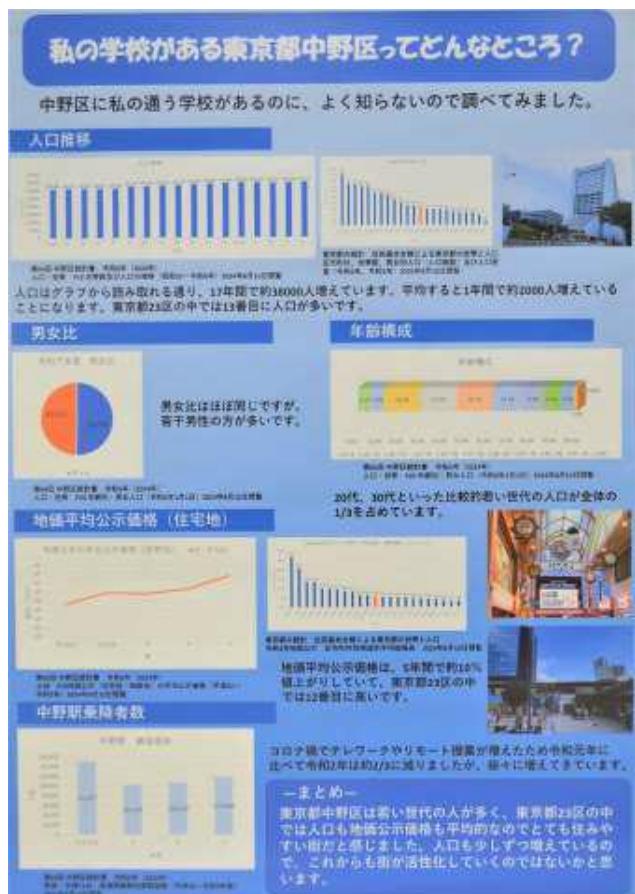
健康へ導く私たちの睡眠時間 K.K.

学生のスマホとの付き合い方ってどんなの!? Y.K.

<生徒による振り返り抜粋>

- 今回のポスター作成を通して、伝えたいデータをどう伝えるかを学びました。どうすれば伝えたいものに目を向けてもらえるか、必要な項目はどれだけいるか、どの項目は省いた方がいいか、どのグラフ、データを使えばいいか、等たくさんの創意工夫が必要だと思いました。
- グラフの使い方が少し難しいなと思いました。それが折れ線グラフに最適か、それが円グラフに最適かなどと考えることが多くありました。ですが、一つ一つのグラフの説明を見てそれがどの数値に最適かなどを改め学ぶことができました。(中略)グラフはなるべく多くしたかったのですが同じグラフばかりではありませんに面白くないと思い、いろんな種類のいろんなグラフをいくつも使いました。グラフを増やすにあたってポスターの内容がおかしくならないように、テーマからはずれないように考えながらたくさんの中をつくりました。
- ポスターを作成する際、テーマはなるべく自分の身近なものについて知れると良いなと思ったので、コンビニについて調べました。また、授業で Excel を使用したときは、「複雑で使いづらいな」と感じていましたが、実際ポスター作成で使っているとだんだん操作も慣れてきて、今まで調べ学習をしてポスターにまとめるときなどはいちいち手書きでグラフを書いていたので Excel を使用するととても楽に感じました。
- 統計グラフコンクールでポスターを制作して、私は、こういう本格的なコンクールに応募するのが初めてだったので、緊張しました。最初はグラフをどうやってまとめるのか、どのように配置したらわかりやすいのかなど、わからないことだらけでした。なので、授業ではじめて学ぶことがたくさんあって、やりがいを感じながら学習することができました。また、自分の興味があるテーマについて調べてグラフにするという内容なので、調べることも含め、楽しく学ぶことができました。今回の学習を通じて、今後ほかの教科や授業でスライドなどを作成する機会があれば、今回学んだ配置の仕方やグラフの作り方、出典や参考にしたサイトなどを欠かさずに書く、グラフでの調べ方などを生かしていきたいと思います。
- 他の人の作品を見て、自分が作ったものとはレイアウトやグラフの種類が全く違ったり、自分では思いつきもしなかったようなテーマが多く見ていてとても面白かった。次に、ポスターなどを作るときはぜひ参考にしたい。





1. 取り組みの概要とねらい

本校では、SGHネットワーク校として、これまで、「グローバルな視点から課題を捉える洞察力」を育成し、地球市民として、その課題を自身の課題として捉え、協働して取り組むカリキュラムやプログラム開発を行っている。WWL 拠点校としての採択後は、さらに、「探究学習」のアプローチを重視し、生徒が主体的に学び、論理的思考や創造性を育むための取り組みに力を入れている。また、本校は、ユネスコスクール加盟校として、以下の3つの柱を教育活動に取り入れている。

【ユネスコスクールが重点的に取り組む3つの柱】

- ①地球市民および平和と非暴力の文化
- ②持続可能な開発および持続可能なライフスタイル
- ③異文化学習および文化の多様性と文化遺産の尊重

WWL 拠点校であることとユネスコスクールであることを活かし、公民授業と連動し、授業の中に取り込む形で、「平和学習」のカリキュラム開発に取り組んだ。

①冬休み課題

「被団協(日本原水爆被害者団体協議会)」の活動や平和への貢献について調査し、ノーベル平和賞が果たす役割と、平和のために自分たちができるることを考える

②ディベート大会の実施

テーマはクラスごと選定

(社会問題の中から、政策論題、価値論題、ユーモア要素のある議題、一つずつバランスよく選ぶよう指示)

2. 実施時期と対象生徒

本プログラムは、2024年度の2学期から3学期にかけて実施。対象となったのは、中学3年生の5・6組(GLCクラス)と高校1年生の5クラスである。約230名の生徒がこの取り組みに参加し、国際理解と地球市民としての責任を深めることを目指した。

3. 外部との連携、協働、関連

この取り組みでは、Beyond Schoolとして、公益財団法人 ユネスコアジア文化センターからの支援を受け、また、国内のユネスコスクールと連携した取り組みになっている。

4. 取り組み内容と生徒の変容、成果、振り返り、成果物など

1. 冬休みの課題(中3・高1全クラスで実施)

本課題の目的は、世界平和を目指す取り組みや個人・団体の功績について理解を深めることである。具体的には、被爆者団体である「被団協(日本原水爆被害者団体協議会)」の活動や平和への貢献について調査し、ノーベル平和賞が果たす役割と、平和のために自分たちができるることを考えることが含まれる。また、ACCU(アジア文化交流センター)とユネスコスクールの共同プログラムに参加し、被団協のノーベル平和賞受賞に関連した活動を通じて、「平和への意識を広めるための取り組み」を学んだ。

- ・被団協の活動について
- ・被団協がどのような団体なのか、その目的や活動内容、平和への取り組みについて調べる。
- ・ノーベル平和賞と被団協の関連性：被団協が過去にノーベル平和賞候補になった背景や評価について述べる。
- ・ノーベル平和賞とは何か：ノーベル平和賞の目的や歴史、受賞の条件について説明する。
- ・平和とは何か（自分の考え）：平和を守るために私たちに何ができるのか、自分の意見や考えをまとめる。
- ・平和への願いを込めて千羽鶴を折る。

この課題は5人1グループで行われ、一人ずつ発表が行われた。特に「なぜ 2017 年批准の核兵器禁止条約に日本は加盟していないのか」「世界で唯一の被爆国として何を訴え続けるべきか」などの問題について、生徒一人ひとりが自分ごととして考えることができた。また、中学 3 年生の有志生徒が平和への願いを込めた千羽鶴の活動にも取り組んだ。



2. ディベート大会(中学3年 GLC クラス・高校1年5クラスで実施)

ディベート大会では、次のテーマについて議論を行った。「夫婦別姓制度」「死刑制度廃止」「AI は人間の仕事を奪うか」「大妻中野共学化」「核兵器廃絶」など。特に「核兵器廃絶」については、世界で唯一の被爆国としての日本の立場から、核保有国側の立場から、肯定側否定側がそれぞれの立場に立って深く掘り下げて議論された。このテーマに焦点を当てて、生徒たちには以下の能力の育成を目指して実施した。

○学習目標

- ・論理的思考力の育成 ・能動的発言力の育成(自分の意見を明確に相手に伝えられる)
- ・情報処理能力の育成(情報の収集と整理、ポイントを見抜く力)

○ディベートのプロセス

肯定側立論、否定側立論、質疑応答、反駁を通じて、各チームが自分たちの立論を防御し、相手の主張に対して攻撃する。ジャッジは、表現力、構成力、反論力に基づいて行われる。生徒たちは、これらのルールと指導のもとでディベートを行い、学習目標にある各スキルを実践的に磨く機会を得た。特に「核兵器廃絶」のテーマでは、それぞれの生徒が自分ごととして深く考え、国際的な視点から問題を理解することを目指した。1人1回は、担当議題において発言の機会を設け全員が参加することとした。



<教員総括>

この取り組みを通じて、生徒たちに見られた変化は多岐にわたる。生徒たちが学んだスキルや今後の授業で改善すべき点について総括する。

生徒たちの変化

(1)論理的思考力の向上

ディベートや課題を通じて、生徒たちは物事を論理的に考え、自分の意見をしっかりと組み立てる力を伸ばすことができた。また、情報を集めて自分の言葉で表現する訓練が、生徒たちの考える力を豊かにしていくことを改めて認識した。

(2)コミュニケーション能力の強化

意見を交換する機会が増えたことで、生徒たちは互いの立場を理解し、効果的に意見を伝える方法を学んだ。

(3)国際問題への意識の高まり

世界で唯一の被爆国としての日本の立場を掘り下げることで、生徒たちは国際的な問題に対する理解を深めている。特に、核兵器廃絶や平和維持の重要性について深く考えるようになっている。

(4)個人としての成長

このプログラムは、自己反省の機会を生徒たちに提供しており、ディベート参加しない議題についても生徒は「聴衆」として参加した。各議題はいずれも正解のない社会問題であり、自分の価値観や行動を見つめ直し、個人としての成長を遂げることができた。

改善すべき点

(1)情報の取り扱いの改善

生徒たちが情報源の信頼性を評価する際に苦労していることが明らかであった。情報リテラシーの指導を強化し、どの情報を信じるべきかをより明確にする必要がある。

(2)より深い議論の促進

限られた時間の中での活動である。ゆえに表層的な議論にならないよう常に争点の声掛けや机間巡視を行った。教員による誘導が行き過ぎないようにし、より深い理解と議論を促すための指導方法を模索し、改善していく。これらの点を踏まえ、次年度の教育活動では反省点を活かし、生徒たちの学びの質をさらに高める計画である。

<生徒による振り返り抜粋>

S・Mさん(中3GLC)

夫婦別姓についてのディベートでは、さまざまな視点を聞くことができ、大変興味深かったです。まず、伝統的な価値観と現代的な自由のバランスが難しいという点が改めてわかりました。一方で、夫婦別姓を支持する意見として個人のアイデンティティやキャリアを尊重する重要性や過去の事例をもとにし、他国での現状などを強調しました。対して、姓を共にすることで家族の一体感が強まるという主張もあり、否定側の意見も非常に説得力を持っていました。

また、社会の変化に伴い、法律や制度も柔軟に進化すべきだという考え方もあり、特に、女性の社会進出や結婚に対する価値観の変化に着目するべきだという点が印象的でした。結局、個人の自由と社会的な価値観の間でどのように折り合いをつけるかが重要だと感じました。

今回ディベートをして緊張して早口になってしまふなど大変でしたが、みんなで一生懸命考えしっかり話すことができとても満足なディベートでした。

H・Kさん(中3GLC)

死刑制度肯定の立場になって、死刑というものの重さについて俯瞰することができた。命の尊さはみんなわかっていて、だからこそ死刑は、本当は無くなるべきだが、その尊い命を無残に奪った人を裁くために殺すのだと死刑を作った人は考えたのだろうと思った。でもこれは矛盾しているようにも感じて、難しい課題だと感じる。感情的には死刑をなくしたいが、死刑存続によって得られる利益や抑止効果などを深く知ったため、今は死刑を存続すべきだと強く思う。ディベートを通して自分の主張がはっきりしたと感じる。

ディベートをするのは今回が初めてだったけど、まだまだ改善できると感じた。ディベートは口喧嘩とは大きく異なり、事前準備がすごく大切なだけ分かった。多くの質問を考え、たくさんの準備をして数分の発表になるのだと知り、すごく面白いと思った。今回あまり集中して準備もできず、心残りの部分が多くかったと感じる。また、発表の時も自身のなさから相手に主張が伝わりやすい話し方にできなかつたと感じる。次回ディベートがあるときはもっとしっかりとした事前準備をして強い主張ができるようになりたいと思った。

K・Hさん(中3GLC)

まず、とても緊張しました。応答役だったので家で父にいろんな質問をしてもらって答える練習をしました。でもディベートは予想外の難しい質問がとんでもくるかもしれない！と、びくびくがたがたの状態で始まりました。私たち“核兵器廃絶”に反対側は相手の“核兵器廃絶に賛成”側の考えは比較的予想しやすい立場でした。授業や冬休みの宿題でも「核兵器廃絶」に肯定的な授業を習い、勉強してきました。それでもこのディベートで何とか一票差で勝つことができてとても嬉しいです。グループのみんなと「相手はどんな主張をするだろう？」とか「どんな立論をすれば説得力があるかな」とじっくり考えて準備しました。それが十分だったかと言えば自信を持って頷くことは出来ないですが、あの空気の中でみんなちゃんと発言出来て無事終わって勝ててよかったです。

このディベートを通して、私は“今は”核兵器廃絶をするべきではないという考え方を持つようになりました。調べるうちに廃絶がとても難しいこととリスクが沢山あることを知りました。しかし、あくまで“今は”ということです。私たちの反対側グループと賛成側のグループは結局核兵器を廃絶したいことに変わりはなかったのです。今も戦争が続けられています。私がこの約2000文字を打ち込んでいる間に何人の人が戦争によって亡くなつたでしょうか。私たちができることは何かありますか、先生。

中学3年学年主任 島田 幸子

中学3年担当 小浦 あす貴

1. 取り組みの概要とねらい

本校では2019年度から4年間、学年横断型課外授業であるフロンティア・プロジェクト・チームが主体となって、ユニクロ・GUを展開する株式会社ファーストリテイリング社とUNHCRが共催する「届けよう、服のチカラ」プロジェクトに参加してきた。本プロジェクトは、社員による出張授業を受けたのち、子どもたちが主体となって校内や地域で着なくなった子ども服を回収し、回収した服を難民などの服を必要とする人々に届ける活動である。今回はじめて、その活動を中学3年生の生徒全員と学年団教員で取り組む形とし、新しいステップへのチャレンジとなった。学年で取り組んだことで、普段は社会問題に強く興味を持ったり、積極的に行動したりするタイプではない生徒にとっても、広く問題を知り、自分たちにも今できることがないかを考え、その一歩を実際の行動に移すという体験を積むことをねらいとした。

2. 実施時期と対象生徒

中学3年生全員が参加、10~11月に実施。全生徒・教職員に活動の告知と呼びかけをし、全校的に取り組んだ。



3. 外部との連携、協働、関連

株式会社ファーストリテイリング社とUNHCR共催の「届けよう、服のチカラ」プロジェクトに参加。地域の外部連携団体として「あけぼの保育園」「アルテ子どもと木幼稚園」「中野打越保育園」「中野ここわ保育園」「中野区立桃園第二小学校」「にじいろ なかの学童クラブ」に協力を依頼。

4. 取り組み内容と生徒の変容、成果、振り返り、成果物など

学年LHRのカリキュラム開発として、クラス単位の映像授業（難民問題、プロジェクトの概要説明など）を実施し、それを踏まえ、各クラスでプロジェクトの実行委員を募り、委員が中心となってその後の活動を進めていった。大きなガイドラインや目安となる検討項目については教員側である程度提示したが、外部の保育施設・小学校などへの連絡やプレゼンテーションを含め、中学3年間の集大成として生徒主体での活動を実施した。各クラスで一団体ずつ保育施設・小学校を担当し、校内への呼びかけも分担することで1人1人が責任感と達成感を持って活動に取り組み、「繋ぐ・行動する」ことを実践できた。また、中学1年次からSDGsについて学んだり調べたりする機会を多く設けてきたが、中学生にとってまだ身近には感じにくい「難民問題」と、「自分たちにもできる洋服の寄付」が結びつき、生徒たちにとって非常に大きな気づきが得られ、WWLに繋がる貴重な国際理解教育の一助となった。

結果として3,458枚の子ども服を回収し、本校としても過去最高の回収枚数となった。全校集会などやや遠い発表ではなく、各クラスがそれぞれ他学年の他クラスを担当し、分担してホームルームの際に告知をした。「他のクラスに行く」だけでも、アポを取り、日時調整をし、内容を考え、知らない人の前でわかりやすく伝える、などの様々な課題があり、「上手く伝えられなかった」「連携不足でポスターができあがっていなかった」など、失敗を含めてすべてが良経験になった。

本校生徒から、園児の皆さんに発表したいという要望をお伝えし、実現した発表の様子。園児にもわかるように言葉を選び、劇を作り上げ、難民問題を含めてわかりやすく発表を行うことができた。



<生徒による振り返り抜粋>

・失敗したことは幼稚園生とあまり話せなかったことです。もともと小さい子はあまり好きではなかったので、話しませんでしたが、せっかく入れてくれたのに先生にはお礼を言っても幼稚園生にはお礼を言えなかったことに気が付きました。相手が幼稚園生でもたくさんの服を持ってくれたことに感謝の意を伝えるべきでした。

・私は服を畳む仕事を手伝ったのですが服についている名前一つ

一つに愛を感じた。現地の子供たちにもそのような人からもう愛のぬくもりを少しでも感じてもらえたらいいなと思った。

・募金をすることができない、自分にできることはないんだ…と思うのではなく募金できないなら何ができるかな！と他の方法を探すことがとても大切だと思った。

・「服を捨てる」のではなく「誰かに役立てる」という発想が、環境問題や社会貢献に繋がると実感した。活動前は服をただの「モノ」として見ていたが、今では「服一枚にも社会を変える力がある」ということを強く感じている。

・この活動に参加したことで、普段何気なく着ている服の価値を改めて考える機会を得た。私たちは当たり前のように衣服を手に入れ、選ぶことができるが、世界には服や安心して暮らす環境さえ持てない人々がたくさんいる現実を再認識した。その事実を知ることで、私自身の生活がどれほど恵まれているかを深く考えさせられた。さらに、人と人との助け合いの大切さを感じた。たとえ自分ができることが小さくても、多くの人の力が集まることで大きな支援につながることを実感した。

・最初は服のチカラプロジェクトってなに？という感じで段ボールを装飾しているときも実感わからなかったけれど、実際に児童館に行って服を回収し子供たちと触れ合うことによって何か役に立っているという実感がわいて服を大切にすることや、自分ができる小さな行動が誰かの助けになることを実感した。

・今まで調べたりする探究活動が多かったが、このように実際に行動に移してたくさんの人に協力してもらうことに大きな達成感を抱くことができた。

・今まで、募金とかボランティアぐらいしかわからなかつたけど、もっと発展途上国のことについて知って、現地の人たちが何を必要としているのかが分かれば使わなくなったものや、いらなくなつたものなどを沢山寄付することが出来ると思う。この活動をしたことで、発展途上国の人達のためにもつといろんなことをしたいと思った。

(ポスターも生徒たちが自分で工夫して制作 ▶)

“届けよう、服のチカラ”プロジェクト

ご協力いただきました外部団体の皆様

- ・あいぽの保育園
- ・アルテ子どもと木幼稚園
- ・中野打越保育園
- ・中野ここわ保育園
- ・中野区立桃園第二小学校
- ・にじいろ なかの学童クラブ

大妻中野中学校・高等学校の生徒・保護者・教職員 の皆様

本当にご協力ありがとうございました！

皆様のおかげで**合計3458枚**の子供服が集まりました！

集まった子供服は世界中の難民などの服を必要としている人々に大切に届けられます！

2024年度 大妻中野中学校3年生

UNIQLO RECYCLE

2023年 744校・約82,000人の児童・生徒が参加

“THE POWER OF CLOTHING” PROJECT

“届けよう、服のチカラ”プロジェクト

2024.10.28~11.13

回収対象

子ども服のみ (赤ちゃん用60cm~160cm)
 ※必ず洗濯された状態でボックスに入れてください
 ※下着・小物類は対象外です
 ※迷彩・武器・ドクロ・血柄のものも対象外となります

集めた服のうち、そのまま活用できるものは
 世界各国の難民キャンプなどに寄贈されます！

衣料支援の実績
 80の国や地域に5,463万点(2023年8月までの累計)

大妻中野中学校・高等学校

もう着なくなった服が、誰かの特別な一着になる

1. Program / Project Summary

This course aims to develop students' critical thinking and global awareness. For this particular program, students examined conflict from personal, societal, and global perspectives. Through inquiry, reflection, and collaboration, students explored some of the causes and problems with ending conflicts.

2. Program Period / Date and Target Students

The class runs the entire academic school year (April to March) and is held every other week for fifty minutes. GIS I is taught to all first year high school students enrolled in the Global Leadership Course.

3. Process / Activities with inquiry mindset

First Term: students reflected on conflict in their lives, why they happen, and how to overcome it. They then outlined and drafted submissions to the 2024 Goi Peace Foundation's Essay Contest for Young People (My Experience of Overcoming Conflict).

Second Term: was spent discussing conflict in society (with a guest speaker from Temple University) and the world at large. Students were encouraged to listen to and critically examine multiple sides of a conflict. For example, for a class on the war in Ukraine, students watched and analyzed portions of interviews with both Zelensky and Putin to consider both perspectives on the conflict.

Third Term: students collaborated in teams to research conflicts in Israel, Palestine, Ukraine, and Russia. They found symbols, statistics, and other details about the conflicts. They created an interactive “peace wall” display where students from the entire school could add their own messages for peace and understanding.

4. Reflection and Achievement / Transformation in Students' skillset and mindset

- ・「色々な地域で起きている紛争について知ることができた。
- ・日本に戦争がないことに安心したし、他の国もそうなって欲しいと思った。
- ・今アメリカがウクライナの支援を無くすと言って、アメリカだけが悪いふうに言われているけれど、ウクライナはどうなのか考える必要があると思う。日本の報道も未だに正しいことを伝えきれていないのが問題点だと思う。
- ・今年のGISをきっかけに、色々な視点から戦争に限らず考えられるようにしたい。J.S.C.

“I was able to think about what kind of image war is. It was fun to create a piece as a team. By discussing the war together, I encountered different perspectives.”-I.K.

5. Students' Reports / Products

Ukraine-Russia Conflict Perspectives

ウクライナ・ロシア紛争の視点

Complete each section as directed.

指示に従って各セクションを完成させてください。

1. Prior Knowledge

1. 既存の知識

What do you know about the Ukraine-Russia conflict?

ウクライナ・ロシア紛争について知っていることは？

ロシア側が侵攻開始。 フークン vs セレニスクー

ウクライナを支援する国が弱い。 他のヨーロッパが船をもぐらいたいに始めた。

2. Ukrainian Perspective

2. ウクライナの視点

Key points from Ukraine's stance:

ウクライナの立場の要点：

ロシアに勝つことはもとよりお金が必要。

ロシアはウクライナをウクライナという国として見てられない

人々や文化が殺されていく。

もし武器があったら、生きていけるだろ。

Wall Design Planning Worksheet 壁面デザイン計画ワークシート

Group Information

グループ情報

Country / 担当国:

イスラエル

Design Elements

デザイン要素

Cultural Representation

文化的表現

List key colors, symbols, or cultural elements that represent your country:

担当国を表す重要な色、シンボル、文化的要素を列挙してください:

- 色は青と白(ヨダヤ教の高僧ラビの属性)で
- ダビデの星(国旗) ヨダヤ教の神と人の関係、保護、調和
- ヤツカシラ、アネモネ、オリーブの木、カナドック→シンボル
- コショル(食文化)→豚、乳製品と肉の組み合わせ、砂、カニ、タコや貝類全般 すべて食べていけない



Historical Context

歴史的背景

What aspects of your country's involvement in war or conflict do you want to highlight? Consider casualties, key moments, or artistic responses:

担当国の戦争や紛争への関わりについて、どのような側面を強調したいですか？犠牲者、重要な出来事、芸術的な反応などを考えてください：

1年前（2024）の10月7日に行われたハマスによるイスラエルへの大規模な奇襲攻撃では、およそ1200人が殺害されたうえ、251人が人質として連れ去られ、いまも101人が捕らえられたままです。

Visual Design Plan

視覚的デザイン計画

Describe how you will show these ideas visually on your wall. Include any art, text, or interactive elements:

これらのアイデアを壁面でどのように視覚的に表現するか説明してください。アート、テキスト、インタラクティブな要素を含めて：



高1 GIS I - AIネットワークを活かしたカリキュラム開発・実践 テンプル大学ジャパン 連携授業



まず、11月1日と8日の2回にわたって、本校で実施されたGIS授業について。本校の高校1年生で開講されている授業グローバル・イシュー・スタディーズでのテンプル大学の先生による特別授業。英語でグローバル課題を深く学ぶ取り組みです。

テーマは、“**Understanding the Impacts of War on Women’s Roles & Ideas of Femininity – 戦争が女性の社会的な役割と女性らしさという概念に与えた影響について –**”

戦争というコンフリクト、社会の在り方を変えてしまう出来事が、女性の社会的役割や女性らしさの概念を大きく変えたことへの考察です。

担当された先生は、テンプル大学ジャパン・キャンパス教授の堀口 佐知子先生 Dr. Sachiko Horiguchi。上智大学をご卒業後、イギリス・オックスフォード大学で、社会人類学で博士号を取得された先生です。今回の本校での授業は、すべて英語で行われました。先生ご自身のキャリアパスのお話から入り、戦争が女性の社会における役割に与えた影響について、ポジティブなインパクトの点からも考察し、ジェンダーと社会についても考えました。

授業は、1回目を英語でのレクチャーを受け、2回目は、生徒同士で、「女性の社会における役割やリーダーシップのあり方」についてディスカッションを行い、堀口先生が丁寧に、各グループに英語で助言されていました。

まさに大学の授業そのもののアドバンスト・ラーニングを英語で行うという機会で、参加した生徒は、皆、その英語での講義に少し圧倒されながらも、社会課題について学問的に考えるプロセスを体感することができました。

受講した生徒の振り返りを紹介します。

“The professor explained a difficult topic with her experiences and common points with us which made me understand. It was a great time to have discussion with my friends.”

「テーマだけでなく先生自身の海外体験や具体例が多く盛り込まれていて面白かったです。また、友達同士で話しあうこともとてもいい体験になりました。」

「ディスカッションの時間があったことで、自分の考えを整理できたり、今回のトピックのような内容は意見が分かれがちなので、いろんな人と意見が交換できてよかったです。」

「堀口先生は、生徒同士の話し合いの際、皆のところを回って、私たちの話を聞いて、アドバイスや賛成意見などをしてくれて、とても自信を持つことができました！」

「先生ご自身のバックグラウンドを細かく説明してくださったことで、私たちの現在の環境と紐づけて考えることができた。また、このテーマについて、少人数でのディスカッションを取り入れてくださったため、内容について理解を深めることができたと思います。」



WWL 拠点校 研究開発・実践（カリキュラム） 高校2年 Global Issue Studies II (GIS II)

グローバルセンター部長 福島洋治

GIS II授業担当 楠本達治

同 授業担当 関倫明

1. 取り組みの概要とねらい

GIS(Global Issue Studies) IIは本校グローバル・リーダーズ・コース(以下 GLC)独自の学校設定科目であり、高1、高2の両学年でそれぞれ1単位ずつ設定されている。WWL として設定したテーマである「地球市民として、多様性を尊重し、様々な人と共感・共生できる力(マインド)」、「リスクを恐れず、新しい価値を創造するために様々な人と協議、交渉できる力(スキル)」の修得を目指すカリキュラム研究、開発で、学校の外(Beyond School)のリソースを活用し、世界的な課題に関する知見を深め、またその解決に向けたアプローチを考案・実践するというものである。

本学年における高校1年時の GIS I では、様々な社会課題に対する探究活動とプレゼンテーション、またそれに関連して経済活動の仕組みに関する知見を深めるための実践的な取組を行った。その流れを受けて本授業では、12月に行われた全国高校生フォーラムへの出場を一つの共通目標として、生徒たちがグループごとに研究を行い、その内容をポスター発表や動画プレゼンテーションの形で出力することをテーマとした。また、サブテーマとして「脱コタツ研究」、即ち、いわゆるメディアにおける「コタツ記事」のように独自の調査などを行わず、座してインターネット検索で済ませられる範囲のリサーチで研究活動を完結させることに対する問題提起をコンセンサスとして授業をスタートさせた。それは取りも直さず、ともすればそれだけでリサーチを終えてしまう昨今の高校生の風潮を打破するためのものである。

2. 実施時期と対象生徒

高校2年次、本校 GLC 全生徒対象。

3. 外部との連携、協働、関連

全国高校生フォーラムへの代表生徒の参加。ベネッセ S-TEAM フェスタへの有志参加。また、エア・カナダ日本代表伊藤氏によるキャリア・ワークショップなど。

4. 取り組み内容と生徒の変容、成果、振り返り、成果物など

本授業での取組は以下のような段階に沿って進行した：

①チームビルディング、研究テーマおよび仮説の設定(4~5月)

参考資料として前年度全国高校生フォーラムのパンフレットファイルとポスター掲載サイトへのリンクを配布し、研究のイメージを共有した。それから、個々の生徒が持つ関心に合わせて4人程度のチームを作り、教員に申し出ること、その上で、チームごとに研究テーマを決め、そのテーマに沿った検証すべき仮説を設定し、教員に報告することとした。

②リサーチ、フィールドワーク(5月~夏季休業)

リサーチはオンラインや文献調査など、授業時間内を中心に行うこととした。フィールドワークは放課後や休日にを行うことを原則としたが、教員の引率を伴い授業時間内に行うことも申請の上で可とした。

③ポスターの作成、検討、修正およびサマリーの作成(夏季休業~9月)

ポスター自体の研究内容を元に高校生フォーラムの代表チーム選抜を行うとした上でポスターを各チームごとに提出することとした。その後、形式上の細部について指摘と修正、調整など行った。また、発表時にポスターに沿えるサマリー(日英両語)も作成した。

④全国高校生フォーラム代表チームの校内選抜(10月)

提出された全チームのポスターを校内に掲示、およびオンラインで共有し、本校教員による審査を行った。その上で代表チームを決定した。

GISII で、グローバル・キャリア・セミナーを実施。(10月) エア・カナダ日本代表の伊藤氏による講演と質疑が行われた。

⑤選抜結果の共有、ベネッセ S-TEAM フェスタへの参加生徒募集(11月)

代表選抜から漏れたチームへの機会の提供として、本授業で作成したポスターを用いてのベネッセ S-TEAM フェスタへの参加を促した。参加チームは発表内容とポスターの調整を行った。

⑥全国高校生フォーラムへの代表チーム出場(12月)

代表チームはポスターの調整、発表準備を行ったうえで全国高校生フォーラムに出場した。

⑦動画プレゼンテーションの作成、共有(11月～2月)

各チームの研究内容(ポスター発表の内容と原則は同じものとするが、別テーマでも可)を自由なアイディアに基づいてプレゼンテーションし、主張を「伝わりやすい形で伝える」ことをテーマにした動画作成に取り組んだ。

以上のような形で、原則的には一年間を通じてそれぞれのチームが同じテーマに関する研究を行い、それをポスター発表、動画発表という二つのフォーマットでプレゼンテーションした。

以下、生徒の年間の取組に関する振り返りを何点か抜粋する：

- ・自分だけでは考えつかないような意見を知ることや、自分の意見を伝えることを経験できた。また、意見の食い違いをどうまとめるかについて学ぶことができた。周りを考えることの重要性についても学ぶことができた。
- ・この授業を通じて、自主的な発信活動、一次情報を求めて自分の主張を根拠づけるための活動を行うことができた。また、一次情報を得ることは難しいが自分で確かめたことはとても信用できる情報となるということを知った。しかし、それは難しくて手間がかかるので事前から長い時間をかけてしっかりと取り組みたいなと思いました。
- ・今回は食品ロスについて探究しましたが、スーパーが行っている取り組みなど、会社のホームページには記載されていないことを自らインタビューし、まとめるなど、自分の意見の述べ方も増えました。探究する力を培ったり、エア・カナダの伊藤さんのお話から自分の将来についての考え方、向き合い方、を考え直せる機会になりました。
- ・ポスター作りでは、「地震」というテーマをどのように発展させていくかまず考え、調べ学習だけでは終わらせずに自ら実験を行うなど、非常に活動的な学習を行いました。そのため、一つの物事について深く考える力や、いつもとは違う視点で見る力を養えたように思います。また成果発表によって、自分たちの研究結果をどのように人に伝えれば良いのか考えながらポスターや動画を作ったため、他者への伝える力も付けられたと思います。
- ・気になることに対する疑問(今回の場合は、現行耐震技術が二次災害にも耐えうることができるのか?といった問い合わせ)を解決するために自ら探究活動を行う能力が身についた。また、自身の行った研究をポスターや動画など様々な媒体を通して発表する力が培われた。地震という私たちの生活にとって身近な災害についてより詳しくな

ったことで、今後地震災害時に知識を活かせる場面があると感じた。また、現代で使われている多様な技術に対して批判的な思考を持って深く調べてみることを今後も大切にていきたい。

・グループとして難民について探究学習を進めました。難民について詳しく知るきっかけにもなり、また難民の方と交流する機会を得たり、自分たちで動き、情報や学びを手に入れるという事を学びました。また周りと比べ 1 学期と夏休み分、GISにかけられる時間が少なかったのにも関わらず、チーム内で協力したり、個人の頑張りが合わかる事で、短期間でも素晴らしい発表を作り上げる事ができると知りました。

・この活動を通じて、単に英語教育の現状を知るだけでなく、データ収集や分析の重要性を学びました。アンケートの作成方法や、バイアスを避けるための設計の仕方についても理解を深めることができました。また、集めたデータを統計的に処理し、そこから意味のある結論を導き出すスキルも向上しました。さらに、研究を進める過程で、論理的に考え、相手に分かりやすく説明する力も身につけることができました。

・この授業を通じて身に着けたのは、まずはアポイントメントを取る能力です。メールを通して一団体と個人間のやり取りをする機会はあまりないので、良い社会経験となりました。また、臆せず自ら話しかけに行くスキルです。一見基本的なことに聞こえますが、実際はとても難しく、相手の暖かさに助けられました。また、難民問題の複雑さも学びました。難民問題とひとくくりにされていてもその中にはいくつもの課題が絡まり合っていて、それらを整理して考えること、そしてそれを動画を通して説明することは簡単なことではなく、倫理的な問題もあるのでなおさらそれらを正確に伝える大切さを学びました。私たちのグループは今後難民に関する企画を行おうと思っているので、得た知識は存分に活かして、良いイベントに出来るようにしたいです。

・社会問題についてより詳しい内容を学べたのはもちろん、インプットした情報をどのようにアウトプットすることが出来るのかを学ぶことが出来ました。例えば、ポスターを作成する際に、一目見たら分かるようなグラフはどれか、どのようにしたら簡潔に情報をまとめが出来るのかなど、見る側の目線になって考えることが出来ました。さらに、動画を作成する際には、英先生役と生徒役を設け、授業形式の動画を撮影することで、英語教育の現状についてより多くの人に楽しく学んでもらえるように工夫をしました。加えて、視覚的にも楽しめるよう緒になるべくポップな色合いのスライドを用意することなどを心掛けました。このように、見てくれる人にとっていかに分かりやすい作品を作れるかを意識しながら取り組むことが出来ました。

以下、例として、実際に作成されたポスター、および動画のリンクを掲載する：

<動画(例として一部)>

<https://youtu.be/k7bB6rqOa8E>
https://youtu.be/VrvCsWD_K0I
https://youtu.be/yl03la_zuZw
<https://youtu.be/bbzkoGkWjQg>

<ポスター(いくつかのグループを抜粋、冒頭1枚目は高校生フォーラム出展用、2枚目はその原案)>



Well! ko-shock5

私たちはコロナウィルスの影響で学校での孤食を経験しました。コミュニケーション機会の減少など孤食の問題を実感し孤食の問題について調べることにしました。



現状3K

- ①働きによる子供 (KODOMO)の孤食
- ②核家族世帯の増加や高齢化による高齢者 (KOUREISHA)の孤食
- ③孤食の時代による個人 (KOJIN)の孤食

企業の取り組み

2023年度 総額2.1億円 630団体を支援した実績³
企業が携わることの意義：大き規模で世界の食と健康の問題の解決に貢献
「企業もしさ」を生かした解決策
運営会社の配当金→企業の信頼+従業員の満足度UP
・交流・体験の貧困→工場見学、マヨテラスで食の安心・安全や楽しさを育む



ボランティアの取り組み

- | | | |
|--------------------|---------------------|---------------------|
| ①子供 (KODOMO)の孤食 | ②個人 (KOJIN)の孤食 | ③高齢者 (KOUREISHA)の孤食 |
| ・どこも食堂による居場所づくり | ・刑務所を出た人の食を通じた取り組み | ・介護施設のどこも食堂 |
| →子供たちの置かれている状況を知れ! | →人の温かみを感じ、社会復帰を目指す! | →地域活動に貢献 |
| ・料理の指導 | ・弁当の配布 | ・しながら孤食ゼロへ! |
| →子供たちの今後を支え! | →料理がしうらい人も | ・弁当の配布 |
| ・フリースマートでの勉強サポート | →孤立しがちな人の居場所づくり | ・共食! |
| →食事だけでなく | | |
| ほがの面からアプローチ! | | |

私たちの取り組み

私たちも子どもの居場所と支援に向けて考え方のあるために学童保育のボランティアに参加しました。⁴ボランティアは主に学校終わりの小学生と遊んだり、宿題を取り組んだり、お菓子を食べあなた、子どもたちとの団結を楽しむなど、現代社会での子どもの心の団結をとめる場所について考えてきました。

ボランティアを通じた経験の中でも非常に印象的な出来事が多く、その中で毎日学校に来る男の子の事が「孤食」について考る所につけていました。

その子はいつもお金を持ち歩いてお菓子を買っていました。不思議に思い、「ざらしてそんなにお金持つてるのはア」と聞いてみると「いつもお母さんが持つててるのでかわいいが、お父だけはつて自分で夕食を買っている」と言っていた。私はこのお母さんの環境で育っている子でも初めて目にし、具体的にこの問題に向きあわせられました。私にとって「孤食」とお腹だけではなく心も満たされた場所であつてほしいと強く願いましたし、「孤食」というもののがみんなでつなげてやるものだという認識を広めていきたいです。

参考文献:
1) Inside ONLINE「春が世界になった理由」<http://www.inside.jp/media/jp/article/-/118/170202>
日本は過食国 (2017.3.27) 過食は世界のリスク要因 5位 https://www.nikkei.com/article/DGLASOp130C7Ma_3ZD90000
2) 運営会社の取り組み、新規方針を実現 (n.d.) 仲間と食うコトナリーズ <https://wellness-nichirei.co.jp/contents/detail/-/21>
3) フリースマートの取り組み (n.d.) <https://www.freeshmart.or.jp/>
4) ボランティアからのまとめ (n.d.) <https://www.kotakotan.or.jp/>
5) Chance for Allも私たちが今までやってきた実践の在り方 (2024. September 12) Chance for All: <https://chance-for-all.or.jp/>



What Is Koshoku?

Koshoku refers to the act of eating alone. Socio-economic factors such as the increase in individuals living alone and diverse lifestyles has contributed to the increase in eating alone. The decrease in family and social interaction that comes with solo dining can negatively impact our mental and physical health. Because this trending issue lurks in our daily lives, it has not received enough recognition.

Negative Effects of Koshoku

Aside from having higher rates of depression anxiety among adults, eating alone has also been associated with these health risks.

higher risk of heart disease,
stroke, and diabetes compared
to those who dine alone
among adult men⁶



2.58X
more likely to experience
angina, a coronary artery
disease symptom among
women⁶



The Current 4Ks

- ①Koshoku of children (KODOMO) with working parents
- ②Koshoku of elderly (KOUREISHA) due to aging population
- ③Koshoku of individuals (KOJIN) in the age of abundance
- ④Koshoku in other countries (KOKUGAI) becoming more serious

Efforts Made by Kewpie's Foundation

The involvement of this foundation has contributed in solving global food and health issues on a large scale.

Solutions that take advantage of corporate identity:

- Operations funded by stock dividends
→ In the fiscal year 2024, a total of 260 million yen was used to support 430 organizations.
- Current actions taken to mitigate lack of opportunities to engage over food
→ Organize tours and events to foster safety, security, and enjoyment in food.



Approaches Taken in Japan⁷

- | | | |
|---|--|--|
| ①Koshoku of children | ②Koshoku of elderly | ③Koshoku of individuals |
| • Creating a place for children through Kodomo shokudo | • Organizing Kodomo shokudo in nursing homes | • Efforts to support elderly |
| • Let supporters know the situation children are facing | • Eliminate solo dining while contributing to supporting the community and helping the elderly | • Efforts to support elderly |
| • Teach children how to cook | • Supports children's future | • Offer educational support at free school |
| • Supports children's future | • Distribute lunch boxes | • Actions taken for people with disabilities |
| • Support children from several aspects besides eating | • Offer meals to those who cannot cook while giving them opportunities to eat together | • Creating a place for people who tends to be isolated |

Our Actions

We participated in a childcare volunteering program to interact with children with different backgrounds to know the situation of Koshoku and think about the measures that should be taken. There were many memorable moments that led us think deeply about the importance of providing children with an opportunity to enjoy eating.

For us, a meal is not just something that fills our appetite, but also about nourishing the heart. We strongly hope that eating can be an activity that satisfies both our bodies and hearts. We also hope that more people will recognize the gravity of this issue, as well as the importance of eating together.



Approaches Taken Overseas⁸

- Culture that promote eating together (Italy, Vietnam, South Korea)⁹
 - These countries have cultures that promote eating together with family or friends and create an environment where people can interact over their meals
 - Community Kitchen (DK) ¹⁰
- There are many philanthropic organizations that provide food and water for free and offer a dinner in which people can communicate with others

References:
1) Inside ONLINE「春が世界になった理由」<http://www.inside.jp/media/jp/article/-/118/170202>
2) "Solid, Healthy, Sustainable, and Sustainable" (n.d.) <https://wellness-nichirei.co.jp/contents/detail/-/21>
3) "How to Eat Healthy" (n.d.) <https://www.kotakotan.or.jp/>
4) "My Kitchen" (n.d.) <https://www.freeshmart.or.jp/>
5) "Food Safety and Sanitation" (n.d.) <https://www.kotakotan.or.jp/>
6) "A Study Based on Interview Conducted by the Health Diet Trends Foundation" (n.d.) <https://www.hdtf.or.jp/research/report/report01.pdf>
7) "The Ground Truth of 'Obesity' Is Different for Adults" In: *Scientific American* (n.d.) <https://www.scientificamerican.com/article/the-ground-truth-of-obesity-is-different-for-adults/>



日本で英語教育は世界で通用するのか

取得CEFR

取得CEFR



*EPI英語指数ランキング(2023)

1位	オランダ
2位	シンガポール
3位	オーストリア
:	:
87位	日本

典型的な文法問題とアメリカの入試問題の正答率

またSAT(Scholastic Assessment Test)というアメリカの入試問題の正答率は22%と高く、海外では通用するには不十分であることが分かった。



日本の場合、教師や生徒の多くが、英語を学ぶ目的を受験においている傾向が強い。そして、入試の内容は、読み書きが中心となっている。その結果、授業は受験のテクニックを教える場になっている。

模試の結果と扱う分野



まとめ

日本で行われている英語教育は英検やTOEICなど日本国内の入学や社会で役立つ検定を受験するためのものであり、実際に海外で通用するようSATにおいては通用しない。

また、約9割の高校生が受けている英検ではreadingの配分は最も多く、実際に海外で通用するようspeakingとlistening力が足りておらず、日本人の英語力がどれだけ海外で通用するのかこれの検定で測ることは難い。

また、日本の高校では英語ネイティブの教師が少なく、これも生徒のspeaking力とlistening力の低下を引き起こしているのではと推測する。

地震が怖いあなたへ

日本では、皆さん気が付かないほどの小さな地震が毎日のように起こっている。それほど地震大国日本は地震大国故、度重なる地震災害によって世界最先端の耐震技術を確立してきた。実際、日本の耐震技術は輸出対象になるほど世界的にも認められているのだ。このように、現段階で日本の耐震技術は十分だといえるであろう。そこで私達は新たな疑問を提起した。

一日本の耐震技術は二次災害からも人々を守ることができるのか？

現行耐震基準

三度にわたるインベーションにより磨き上げられてきた耐震技術「現行耐震技術」は阪神淡路大震災の発生を機に開発されたため、より多くの条件が求められるようになってしまった。

例えば...

- ①十分な地盤の耐久性
- ②複合部に金物の使用
- ③バランスの取れた壁構造

などが建築の上で義務付けられている。



日本はほぼすべての地域で地震や二次災害からの被害が[図]から見て取れる。日本の耐震技術のみでは、結果的には地震災害から人を守れない。

しかし...

国民ひとりひとりが危機感を持つだけで被害は軽減される。

現段階の耐震技術に私たちの研究が加わることで、地震と二次災害による被害は確実に縮小できる。



WWL拠点校 研究開発・実践（カリキュラム）高2理系探究の生徒成果物

高2の探究では、理系分野での論文作成に取り組んでいる。学術論文のプロセスを体得することを目的に取り組み、生徒は論文指導教官のもとで、自分で課題を設定し、論文を作成する。以下、英文によるアブストラクトの生徒成果物の事例である。

Due Date: February 16th 2025

Teacher in charge: Tsuyoshi Shibata

Consideration of the Potential of Enhanced Rock Weathering technology and the Impact on Greenhouse Gas Emissions

Otsuma Nakano High School

Abstract

The effect of global warming continues to be a major issue. Meanwhile, the potential of Enhanced Rock Weathering (ERW) is highly valued to reduce greenhouse gas emissions. ERW accelerates the natural process of rocks weathering while capturing carbon dioxide(CO₂) from the atmosphere. Research worldwide shows that ERW has the potential to remove up to 3 billion tons of CO₂ annually. However, there are some concerns in that the consequence of this process remains unknown and requires more data. Since the climate of Japan is suited to collect the required minerals, a new project has been launched to introduce this method. In this project, researchers have developed ideas to improve the efficiency of weathering with less energy. Moreover, benefits on agricultural aspects and natural disasters are expected as well. By conducting additional research, ERW can be applied worldwide, and will contribute to preventing climate change.

カリキュラムと運動 - 文科省 全国高校生フォーラム All Japan High School Forum 2024 の成果報告



グローバルセンター部長 福島洋治
GIS II 授業担当 楠本達治、関倫明

文部科学省事業 WWL コンソーシアム拠点校である本校の高校2年生のチームが、高2のGIS(授業)の代表として、12月15日に東京・代々木オリンピック青少年記念センターで開催された全国高校生フォーラム 2024 に出場しました。

本校のWWLのテーマは、「グローバル Well-Being 2030 の実現に貢献するマインドとスキルの育成」です。様々な外部機関と繋がって、社会課題から具体的な問い合わせを設定し、それに向かって協働でアプローチをしていきます。この取り組みを、本校の高等学校の教育課程で学校設定教科として実施している GIS (Global Issue Studies)の中で、カリキュラム化しており、その成果をこの全国高校生フォーラムで発表しました。

今年度の本校から、全国フォーラムに出場したチームが設定した社会課題は、「孤食とコミュニケーションの課題」です。企業とも連携して、その課題の持つ本質とその具体的な解決方法を探究しました。本校の全国フォーラム出場チームの発表サマリーは、以下のとおりです。

KO-SHOCK5と一緒に孤食をなくそう！

現在、日本の高校生の二人に一人が孤食の状況にあることを知っていますか。コミュニケーション機会の減少による社会性・協調性の欠如、栄養の偏りなどの問題が起こっています。私たちKO-SHOCK5は、孤食問題に取り組む企業であるキューピー株式会社に実際に訪問しました。このポスターでは、キューピーで働く方々のお話をもとに、「子供・高齢者・個人」の3つの観点に分け、"3K"として解決策を掲げました。

How to address the undermined issue of eating alone!

Did you know that one in two Japanese high school students have dinner alone? Solitude eating can lead to problems such as lack of sociability caused by less communication with others, as well as imbalanced nutrition. We, KO-SHOCK5 investigated the problems that are associated with eating alone. To achieve this goal, we visited Kewpie, one of the most famous corporations in Japan that works on food issues, to gain information and a business point of view. In this poster, we suggest "3K", which stands for the Japanese translation of children, the elderly, and individual, as a solution to reduce solitude eating.

出場した生徒の振り返り - 高2 M.S.

私たちは、全国高校生フォーラム2024に参加し、「孤食」という社会課題についてポスターセッションを行ないました。英語で発表を行なう事は何度か経験がありましたが、大きいポスターを使用しながら発表する事はあまり経験が無かつたためポスターを作成することに苦戦しました。また、多くの方に私たちの発表に興味を持って頂けるように文に抑揚をつけて話したり重要な部分で間を取ったりすることを心がけました。

ポスターセッションの他に、全国の参加校の代表の皆さんとwell beingについてディスカッションを行ないました。私のチームではwell being という単語を、漢字を使って表すというアクティビティを行ないました。well beingは抽象的で様々な要素が含まれており、どの部分にフォーカスして表現するかを決めることがとても難しかったです。

今回このフォーラムに参加したことによって改めて多くの社会問題について目を向けることができ、またひとつひとつ問題は単体で社会にあるのではなく、混在しているのだということに気づくことが出来ました。問題を解決するた

めにはひとつの問題だけを考えるのではなくてその問題に関連した複数の問題も含めて考えることによって問題の新たな解決の糸口が見つかるのでは無いかと思いました。

We participated in the All Japan High School Forum and presented about Koshoku in this poster session presentation. I had many experiences in giving presentations in English, but not so much in using posters, so we had a hard time creating our posters. I also tried to speak with clear intonation and to pause at important points in my presentation so that many people would be interested in our presentation.

Along with that, we discussed well-being with participating students from other high schools all over Japan. It was very difficult to decide which part of the word “well-being” to focus on because it is very abstract and includes many different elements.

Participating in this forum allowed me to look at many social problems and to realize that each problem is not a single issue in society, but rather a mixture of problems. I believe that in order to solve a problem, we should not only think about one problem, but also about multiple problems related to that problem in order to find a new solution to the problem.

出場した生徒の振り返り – 高2 M.U.

私たちは2024年度全国高校生フォーラムに参加しました。GISの授業で取り組んでいたときには全国大会というと想像もつきませんでしたが、会場に行って全国の先鋭的で意識の高い高校生たちが集まっている中に自分が入り、初めて実感が湧いたとともに、緊張が押し寄せてきました。

私たちは「孤食」について探求し、日本で起きる孤食の問題とその解決策、外国での取組みなどをまとめました。また専門的な意見を得るために、子供の孤食について支援や寄付などを通じて様々な取り組みを行うキューピー株式会社でのリサーチなどを発表しました。スピーチ原稿を作り、発表の練習など、みんなで集中して練習に取り組み、本番では、審査員の心を掴むという意識で大きな声で発音し、ジェスチャーを使ったり、強弱をつけたりして工夫をしました。

また、当日には他校の高校生たちと“well-being”について話し合うディスカッションがありました。私と同じような考えを持った人たちとさらに深いテーマについて話すことで、様々なアイディアに触れ、視野を広げることができました。この大会を通じて、自分たちのテーマについてさらに深く知るきっかけになり、さらに、全国の高校生たちの社会問題に対する強い姿勢や意見を知ることができ、良い経験になったと思います。

We participated in the 2024 High School Forum. When we were working on this project in our GIS class, we never imagined we would be attending the national competition, but when we arrived at the venue and saw so many talented high school students from all over the country, it was the first time we truly felt the significance of it, and I felt nervous.

We explored the issue of “Eating alone” in Japan, examining the problems it causes, potential solutions, and initiatives from other countries. We also interviewed Kewpie Corporation, which is involved in various efforts to support children facing eating alone through donations and other initiatives, and we shared this insight during our presentation. We have been working very hard to prepare for this program. We wrote our script, memorized it, and practiced our presentation. Everyone worked hard and focused on rehearsing together. During the actual presentation, we made a conscious effort to engage the judges by speaking loudly, using gestures, and varying our tone for emphasis.

Additionally, on the day of the event, there was a discussion with students from other schools about “well-being.” By conversing with people who shared similar views, I was able to explore deeper topics and encounter many different ideas, which broadened my perspective.

Through this event, I gained a deeper understanding of our topic, and I was also able to learn about the strong attitudes and opinions that high school students across Japan have on social issues. It was a valuable experience.

本校は長年、複数の外国語（英語とフランス語）を教育課程に導入している複言語教育校です。WWLの構想名である「繋ぐ・行動する - Beyond School アプローチによる協働型の地球市民教育」の具体的なカリキュラム開発としても、一層、本校の特徴あるフランス語教育の研究を続けています。特に、本校は、文部科学省の事業である「グローバル化に対応した外国語教育推進研究事業（フランス語教育）」の拠点校としても長年取り組んでいます。令和6年度は、WWLの研究・開発の一環として取り組んだその成果を以下のように報告します。

文部科学省 令和6年度「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（グローバル化に対応した外国語教育推進事業）」 - 大東文化大学グループによる大妻中野中学校・高等学校での研究

研究主題：『フランス語の学習指針』に基づく探求的活動を取り入れた学習指導案の構築と教材開発

取組の内容：

「フランス語の学習指針」（ver.2.0）で提示されているテーマ群から「13 旅行・ヴァカンス」を選び、「日本のおすすめ観光スポットを紹介しよう！」と題した教材の開発を行なった。1学期は拠点校の先生らと意見交換しながら、研究授業で実施する活動を考えて教材を作成した。そして、2学期（10月から11月の4週）には、高校2年生の初学者クラス（A1-A2レベル）にて研究授業を行なった。1週目の授業では、訪日観光客が日本に求めているものを考察したり、世界にあるさまざまな観光スポットがどのようなものであるか、またそれらがフランス語ではどういう言い方になるのかを学びながら、歴史や文化、気候・風土などの（再）発見を促す活動からスタートした。2・3週目では主にそれを手がかりにして、生徒たちは訪日外国人観光客にお勧めの観光スポットを選びだし、そこに何があつて、何ができるのかを簡単に説明することを目標にフランス語を学習した。4週目にはお勧めの観光スポットの紹介ビデオをグループで作成し、発表した。生徒たちは積極的に授業活動に参加しており、楽しい雰囲気で動画撮影している様子が見られた。さらに授業後には、他のグループの紹介ビデオに触発されてか、ビデオの作り直しを希望する生徒や、日本以外の国の観光地も調べたいという意見が出るなど、主体的に学びに取り組む生徒の姿が見られた。

観光地を紹介するという実用的なフランス語の運用能力の獲得とあわせて、「日本に求められるものが何かを考え、紹介する日本の観光地を選ぶ」という探究的な学びが行われていたと言える。

生徒からみる成果：

授業後の振り返りアンケートによれば、5段階評価の平均を見ると「観光地紹介ができた」が4.6、「観光地の説明ができた」が4.55、「どのように勧めるかを理解した」が4.7、「どのように観光地を紹介するか理解した」が4.6であった。これより、生徒たちの高い理解度が確認された。

調べ学習や動画撮影等、授業活動の楽しさや新鮮さが評価されていたこれは主体的かつ創造的な活動の実施による効果と思われる。また、運用能力の獲得に加えて、他国の観光地への興味、日本の観光地の発見等の文化的関心の向上もあった。豊かな発話機会や実用的な表現の学びへの評価が複数見られたことは特筆すべきである。

この授業に取り組んだ生徒の振り返り：

H2 Wさん

フランス語を通して日本や海外の観光名所について学び、またそこで使える表現も楽しく学べました。発音に苦戦したところもありましたが、自分で感じたままの感想が言えて、さらに、フランス語に興味を持つ機会になりました。実際にフランス語で紹介する機会があればこの表現を使いたいです。

H2 Oさん

私は β クラスだったので α クラスと合同となると、レベルが違うのではないかと少し不安に思っていましたが、確かに初めての文法・単語はあったもののグループワークで友だちといっしょに取り組めたので、とても安心だつたし、楽しかったです!また、テーマが観光客に日本を紹介するというものだったので、日本をより深く知るきっかけにもなったし、学習段階のプリントでは、世界の観光名所がたくさんてきていたので、PCなどで写真を調べたりして、初めての観光スポットを知って興味深い時間でした。やはり、自分の国を知らないと、周りの人に説明することもできないし、海外のことも十分に理解できないので、日本を学ぶことが第一歩なんだと理解できました!

H2 Sさん

日本の魅力をどう外国の方に伝えるか、その表現方法を学ぶことができて、とても実用的であったと思います。留学から帰ってきて、長い間フランス語に触れていなかったので、最初のほうは、発音が難しかったりして、大変でしたが、新たな単語や表現を学べたり、1年前にやったことの復習もすることができ、とても良い経験となりました。この学習を通して、フランス語を学んだだけではなく、改めて日本の良さ、魅力を知ることができたのも、よかったです。

H2 Mさん

とても実用的なフレーズを学べて楽しかったし、ためになりました!フランス語に親しみをもって学ぶことができたのでよかったです。フランス語の単語を日常的に使う事ができるくらいになってきたを学んでいきたくなつてきたのでこれからも引き続き学んでいきたと思いました。合いの手のようなフレーズは忘れないように積極的に使っていきます。

H2 Sさん

普段、フランス語で自分がおすすめしたい場所を紹介することはないので、とても良い機会だと思いました。英語と似ていて覚えやすい単語も、見たこともない単語もあったけれど、自分たちで東北の魅力を伝えられて良かったです。いつかフランス人におすすめの場所を聞かれたら、今回習ったことを使って教えてあげたいです。

教員からみる成果:

生徒の学習歴の差に配慮してグループ分けを行ったため、どのグループも協力し合いながら作業に取り組んでいた。小テストを2回実施したり、動画を準備する作業によって、今回、学習した表現についての発音をしっかりと定着させることができた。さらに、その場での発表でなく、動画撮影・鑑賞としたことで、自分の発表している姿を客観的に見ることができ、生徒たちがその反省を生かし再撮影し、改善できたことも生徒の達成感につながった。

テーマも日常的で身近であり、外国人の方にすぐにでも使えるテーマであり、生徒からの振り返りでも実際にこの表現を使ってみたいという声も見られた。他のグループの動画内容も大方聞き取れたことで自信にもつながり、楽しく活動できたようだ。

今後の課題・方向性:

研究授業の見学(4回目の研究授業)と授業後の振り返りアンケート調査結果から、今回作成した授業活動とその授業用教材は実用性が十分にあるものと評価できる。特に実用的な内容と観光という身近なテーマでフランス語を使用する活動は、生徒たちの学びに対する積極的な態度と学習意欲を生み出していたと言える。

課題点は最終成果物の質の向上である。まず今回の最終課題は動画作成であったが、演出やテロップ、映像効果等、求める動画の質を向上させたい。次に、アンケートから、発音や文法の正確さに対する不安の声があった。教師と生徒間のやりとりによって生徒の負担や不安を解消し、成果物の質を向上させる仕組みを検討したい。これらを実現するには時間がかかってしまう懸念がある。しかし、時間管理と活動の効率を改善することで、質の高いパフォーマンスを作り上げる授業づくりに挑戦したい。

- 以上は、「文部科学省 令和6年度「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(グローバル化に対応した外国語教育推進事業)」 - 大東文化大学グループによる大妻中野中学校・高等学校での研究からの内容になります。

WWL拠点校としてのビジョンについて :

EUのヨーロッパ評議会では、お互いの言語を修得のための目安として、ヨーロッパ共通言語参照枠（CEFR）を定めている。外国語学習者にとっての世界標準の指標になっているこのCEFRは、日常的なトピックで外国語を使える段階から、アカデミックな言語使用レベルに至るプロセスを表示しており、本校のフランス語教育研究は、このCEFRの指標に沿った取り組み研究となっている。

各グループで、生徒たち自身でリサーチを進め、議論し、発表をする授業と学習の様子は、フランスで行われている学習者中心の学びの取り組みそのものといえる。外国語の習得はその言葉を機械的に覚えていくことではない。本校は文化と言語を相補的に学ぶことが重要なプロセスであり、それは生涯にわたって他者への理解を学び続ける気持ちを育てていくことに繋がる。EUの United in Diversity、「複言語教育を通した多様な文化を尊重するマインドの育成」が本校の教育ヴァリュー、WWLの構想名と重なっている。

* 以下、大妻中野中学校・高等学校のフランス語研究授業での授業資料からの抜粋

Leçon 1 世界にある観光地を発見しよう！

【1】世界から見た日本の観光地について考えよう。

(1) グループになって、つぎの日本の観光地のなかから外国人観光客に勧めたい観光地ベスト3を選びましょう。選んだ理由も考えて、別のグループと意見交換しましょう。



Leçon 2 観光することを言ってみよう！

【1】観光で何をしているか考えよう。

(1) つぎのイラストに最も合うフランス語の表現を下から選びましょう。



manger des plats locaux

faire du shopping

voir des tableaux

acheter des souvenirs

visiter un temple

faire une promenade en ville

faire une randonnée

goûter des gâteaux japonais

entrer dans un onsen

voir un beau paysage

goûter des gâteaux japonais

Leçon 3 日本の観光スポットを簡単に説明しよう！

【1】観光地の説明を理解しましょう。

(1) 音声を聞いて、下の表現が含まれているものを見つけましょう。また、その表現が説明しているものを探して、その表現が説明しているイラストを見つけましょう。

表現	音 響 き 番 号	イラ スト 番 号	英 語	音 響 き 番 号	イラ スト 番 号
C'est agréable !		C'est magnifique !			(1)
C'est amusant !		C'est mignon !			(2)
C'est délicieux !		Ce n'est pas cher !			(3)
C'est intéressant !		C'est très japonais !			(4)
C'est impressionnant !					(5)
					(6)
					(7)
					(8)
					(9)

Leçon 4 日本のオススメ観光スポットを紹介しよう！

来日している外国人に向けて、日本の観光スポットを紹介するビデオを作成します。

日本国内にあるおすすめの観光地を見つけて、観光するところを3つ（以上）勧めましょう。

(1) 外国人観光客に勧める観光スポットを決めて、紹介する内容を考えましょう。

観光する国・町（地域）：		
オススメ観光スポット	そこでできること	説明
(1)		
(2)		
(3)		
(4)		

WWL成果報告発表会でのフランス語チームの発表

① 中3α5組チーム: フランコフォニーについて知ろう!

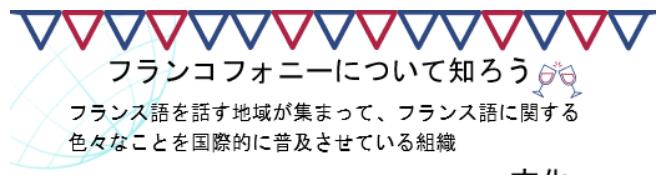
Découvrez la francophonie!

Let's learn about francophony!

私たちは、フランコフォニーとその加盟国の文化やお菓子などについて発表します。

Nous allons vous présenter la culture et les douceurs des pays de la francophonie.

We will present the culture and sweets of Francophony's member countries.



② 中3α6組チーム: こんにちは、フランコフォニー！

BONJOUR, FRANCOPHONIE !

Hello, Francophony !

私たちは今回フランコフォニーとフランコフォニーに属しているモロッコについて発表します。モロッコについて何か知っていることはありますか？皆さんに知ってもらうためにクイズを用意しました。みんなでモロッコについて楽しみながら学びましょう！！

Bonjour à tous ! Aujourd'hui nous allons vous présenter le Maroc qui fait partie de l'association de la francophonie et le pays appelé Maroc. Connaissez-vous quelque chose sur ce pays ? Nous avons préparé un quiz pour vous aider à en apprendre davantage à son sujet. Amusons-nous ensemble !

Hello everyone! Today we are going to present one of francophony's member, Morocco. Do you know anything about this country? We prepared some quizzes to help you guys learn more about it. Let's have fun together!

③ 留学チーム: 私たちのフランスでの体験

Notre expérience à Tours / Our experience in France

私たちは、昨夏1週間をフランスのトゥールという町で過ごしました。私たちはホームステイをしながら語学学校に通い、様々なことを体験しました！

Nous avons passé une semaine à Tours, une belle ville en France. Nous sommes restées chez une famille d'accueil et nous sommes allées dans une école de langue. Nous allons vous parler notre expérience!

We spent a week at Tours, a beautiful town in France. We attended language school, stayed in a homestay and experienced so many wonderful things!



IV. WWL 抱点校 研究開発・実践(海外プログラム) - タイ・チェンマイ探究スタディツアーレポート

地歴・公民科 牛込 裕樹

1. 概要

チェンマイスタディツアーレポートは、タイ王国チェンマイおよびその周辺地域を訪れる10日間のプログラムである。本プログラムは2016年度より実施しており、都市における多文化共生と持続的発展に関する課題探究を現地高校生と協働し相互理解を深めると共に、課題解決の方策を考えられるようになることを大きな目的としている。また、異文化の中で現地高校生との協働作業を通じて多言語でのコミュニケーション力を育成するとともに、さまざまなコミュニケーションツールを使ってお互いのコミュニケーションを試行錯誤しながら学ぶことにも重点を置いている。さまざまなチャレンジを重ね、それをバックアップすることで自己肯定感を高め、グローバルな視点でリーダーシップを発揮できる生徒の育成を本スタディツアーレポートの2点目の目的としている。

2. 実施時期と対象生徒

2024年8月19日(火)に出発、同28日(木)に帰着。中学校2年生から高校2年生までの7名を対象とした。

3. 活動内容

本スタディツアーレポートの活動は、タイの文化を学び、体験するプログラムと、現地高校生との交流プログラムからなる。2024年度のスタディツアーレポートでは、以下の活動を行なった。

文化体験

- ①タイ料理を作る:現地の人々が利用する市場を見学し、タイ独自の食材を確認し、タイ料理を調理 (Thai cooking)
- ②象の糞から紙を作製する施設を訪れ、リサイクル工程見学および製作体験(Poo Poo Paper Park)
- ③象の保護施設見学(Thai Elephant Conservation Center, Lampang)
- ④タイ仏教寺院見学(Doi Suthep Mountain)
- ⑤市場見学(Warorot market, Jing Jai market)

交流プログラム

- ①Bankad Wittayakom School:現地少数民族が主に通う学校

日本語を学ぶクラスの生徒と一緒に日本語によるカルタ遊びや映像の作成、タイの祭りの飾り付け作成などの協働作業を行なった。

- ②Sanpatong Wittayakom School:チェンマイ郊外の普通科高校(日本語コース有り)

Sanpatong Wittayakom School 生徒案内による学校紹介。および芸術コース生徒とともにタイの伝統楽器演奏およびタイ舞踊体験



タイ料理調理実習の様子



現地高校生と一緒に伝統舞踊を体験



協働で祭事の飾りを製作

交流プログラムでは、お互いの文化を学ぶことも重要だが、日本語、タイ語、英語などの言語におけるコミュニケーションも完全ではない状況で、いかに意思疎通し、お互いの考えを共有できるか思考して協働作業を行う点の効果が非常

に大きい。相手の立場に立ち、相手の思考を想像し、お互い意見を主張する一連の活動は、言語コミュニケーションが完全な場合より一層お互いの理解につながり、一体感が生まれる。また、全体のプログラムを通して、新たな体験や新たな価値観への Try & Error を受容し活発化させることで、自己肯定感を高め、自己表現力を向上させるように努めた。

4. 生徒の振り返り、プログラムを通じての変容

今年度の参加生徒は比較的おとなしい生徒が多く、自己変革したいという気持ちを持っているものの、なかなか表現するのが難しい性格であったが、だからこそそのような状況を打破したいと言う思いから本プログラムに参加していた生徒もいた。実際、スタディツアーオー開始直後は、異文化に対し興味を示しながらも消極的な行動が多く、引率教員および現地スタッフも心配していたが、プログラムを進めていくうちに、自己表現が活発にできるようになり、自らの行動を振り返り、課題に対して積極的に探究していく姿勢が増した。

以下は、スタディツアーオー実施前後に実施されたアンケート内容と結果である。内容は国際理解についてのアンケートで、「知識・理解」、「技能・スキル」、「態度・姿勢・価値観」の各項目からなり、前後に実施することで生徒の変容を測った。

〈「国際理解」についてのアンケート〉

中学・高校 年 組 名前:

現在、あなたに「身についている力」についての自己評価シートです。

とてもそう思う(当てはまる)「5」、そう思う「4」、中間レベル「3」、あまりそう思わない「2」、そう思わない(当てはまらない)「1」

カテゴリ	番号	目標(Desired outcomes of Global Education)・指標	評価記入欄
知識・理解	1	人種・環境・平和・持続可能な開発等について基本的用語を理解している	
	2	人種・環境・平和・持続可能な開発等について主要な問題を例示し、説明することができる	
	3	グローバルな課題の複雑性を認識し、具体例を説明できる	
	4	地球的課題解決のための様々な取り組みや活動について知っている	
	5	人々との共通点・相違点に関心を払い、それらを見出すことができる	
	6	地域、国、世界の多様性(文化・価値観・信条・アイデンティティ等)を認識している	
	7	多文化社会の現状を把握し、多文化共生社会づくりのための課題を理解している	
	8	世界の国々の目に見えないつながりを意識し、グローバル社会の現状を例示できる	
	9	多方面におけるグローバル化社会の功罪を述べることができる	
	10	世界の問題を身近な事柄と結びつけて具体的に考えることができる	
技能・スキル	11	他者の意見に耳を傾け、それに対する自らの意見を整理・表現できる	
	12	バイアスやステレオタイプを自覚し、冷静な判断ができる	
	13	一つの事柄に対し、肯定側・否定側等多面的思考ができる	
	14	自らの考えを(言語を含めた)様々な方法で表現することができる	
	15	自らの学びや意見を効果的に伝達(プレゼンテーション)できる	
	16	全体の中で自らの役割を認識し、他者と協力しながらタスクに取り組むことができる	
	17	異なる意見に遭遇しても自らの見解を再構築し、合意形成ができる	
	18	情報にアクセスし必要な情報を収集し、それを目的達成のために活用することができる	
	19	課題解決のための探究テーマやプロジェクトを設定し、自ら調査・分析できる	
	20	メディアや与えられた情報を冷静に分析する目を持っている	
態度・姿勢・価値観	21	自らの長所・短所を自己分析でき、よい点を伸ばそうとする	
	22	自分自身を大切に思い、自分自身の生き方を探求している	
	23	困っている人々の問題を自らの問題に置き換えて捉え、真剣に考えることができる	
	24	考え方や意見、タイプの異なる問題との人とも協力しようと努力できる	
	25	自らに心の壁をつくらず、社会的状況、家庭環境、民族、宗教等が異なる人々ともコミュニケーションできる	
	26	オープンマインドを持ち、様々な違いを認め、肯定的に受け止めることができる	
	27	グローバルイシューを自覚し、ライフスタイルを見直す	
	28	身近なプロジェクトや活動の計画、話し合いに積極的に参加する	
	29	プレゼンテーションや啓蒙活動などを行い、計画実行のために他者と協力して行動する	
	30	よりよい未来をイメージし、それに対してすべきことを考え、実行できる	

アンケート結果：スタディツアーアー実施前後で評価が1以上上昇した項目は以下の通りである。

- (6)地域、国、世界の多様性(文化・価値観・信条・アイデンティティ等)を認識している。
- (8)世界の国々の目に見えないつながりを意識し、グローバル社会の功罪を述べることができる。
- (24)考え方や意見、タイプの異なる周囲との人とも協力しようと努力できる。
- (25)自らに心の壁を作らず、社会的状況、家庭環境、民族、宗教等が異なる人ともコミュニケーションできる。
- (28)身近なプロジェクトや活動の計画、話し合いに積極的に参加する。
- (29)プレゼンテーションや啓蒙活動などを行い、計画実行のために他者と協力して行動する。
- (30)よりよい未来をイメージし、それに対してすべきことを考え、実行できる。

以上の結果より、本スタディツアーアーを通して異文化を理解、受容するだけでなく、それらを踏まえてコミュニケーションを重ね、お互いの意見を述べたり、協働で課題解決に向けて考えていく素地ができたことが、今回のスタディツアーアーの成果であり、当初の目的を達成できたと考えている。

5. 研修の主なスケジュール

- | | |
|------------------------------------|--------------------------|
| 令和6年3月21日(木) 生徒・保護者説明会① | 令和6年6月7日(金) 参加生徒ガイダンス |
| 令和6年6月22日(土) 生徒・保護者説明会② | 令和6年7月23日(火) 参加生徒対象タイ語講座 |
| 令和6年7月24日(水) 参加生徒対象、リスクコミュニケーション講習 | |
| 令和6年8月19日(火)～28日(木) スタディツアーアー実施 | |



WWL拠点校 研究開発・実践（海外プログラム）－UCL Japan Youth Challenge 2024

教頭・WWL担当 水澤 孝順

1. プログラム 概要

今年も本校生徒が、イギリス・ロンドン大学 UCL / ケンブリッジ大学による日本、イギリスの高校生のための世界トップ大学体験プログラム UCL Japan Youth Challenge 2024 にチャレンジしました。7月25日から8月5日までのサマースクールプログラム。日本とイギリスの高校から選抜された学校の生徒達が参加しました。ロンドン大学とケンブリッジ大学という世界のトップ大学の先生方からの授業を直接体験し、大きな刺激を受けました。

このプログラムは、UCL ロンドン大学からのオファーに応募し、選考された学校の生徒が参加できます。本校は、2021年から4年連続で参加校となりました。



2. プログラム 内容と生徒の成長、変容

本プログラムは、ケンブリッジ大学も主催の1つになっています。プログラムの最初の2日間は、ケンブリッジ大学で、大学の先生方による授業を受けます。ねらいは、世界のトップ大学の先生方の授業を体験し、大学の学びとはどのようなものか、特に海外大学の授業をイギリスの高校生と共に体験することです。

また、ケンブリッジ大学で研究を行っている日本人の研究者の方達との懇談会も開催され、高校時代の進路選択についての相談を熱心にする参加生徒からは、海外の大学で学ぶ強い意欲を感じることができました。

UCL・ロンドン大学でのプログラムでは、毎年、全体テーマを設定して行われています。今年のテーマは、Space and Us - 宇宙と私達 - 宇宙をめぐるトピックを各グループでディスカッション(Grand Challenge)を行い、その成果を最終的に発表するプログラムを行いました。生徒達はアイスブレイクから、お互いの理解を深め、そして、グループとして取り組む問い合わせ自分たちで設定していきます。

また、最終のシンポジウムでは、宇宙に関するいくつかのレクチャーが行われて、UCL ロンドン大学での研究者の先生方と共に、宇宙開発に具体的に取り組んでいる日本の JAXA、三菱電機のプロジェクトマネージャーの方のレクチャーもありました。宇宙開発は、地球市民全体で取り組む大きなテーマです。宇宙研究、開発の最前線の人たちのレクチャーを受け、そして、そこにある課題についての発表。日本、イギリスからの参加高校生は、これから自身の学びのテーマを見つけたようでした。本当の意味での進路指導が実践され、まさに、WWL が目的とする発展的な学びをグローバルな視野で実践することができたプログラムとなりました。



参加生徒の振り返り

H2 A. O. さん

このロンドン大学 UCL Japan Youth Program は今年で 10 周年を迎えました。今年は「宇宙と私たち」をテーマにして、それに関連した様々な講義やディスカッションに参加できました。私がこのプログラムに参加しようと思った理由は主に二つあります。一つ目の理由は、宇宙物理学が最近の私の興味の一つであり、テーマが「宇宙と私たち」であったため、このプログラムに参加することで宇宙物理学への興味を深め、知識を増やすことができると思ったからです。二つ目の理由は、英語でのコミュニケーション能力を伸ばしたかったからです。また、この貴重な機会を活用して、宇宙や宇宙が人間に与える影響について他の学生と一緒に考え、議論することで自分の視野を広げ、様々な視点から物事を考えられるようになりたいと思いました。



このプログラムを通して、私はたくさんのこと学びました。一つは、私がよく知らなかった学問についてです。このプログラムに参加する前は、教育心理学、脳科学、ロボット工学、エンジニアリング、デザインについてよく知りませんでした。自分がよく知らなかったことを学ぶのはとても興味深く、これらすべてを学ぶことで、宇宙についてさまざまな視点から考えるようになりました。また、コミュニケーションとチームワークの重要性も学びました。プログラム終盤にシンポジウムがあり、そこでミッションを設定して発表しなければなりませんでした。同じグループの人たちと少しずつコミュニケーションをとることで、自分たちのミッションの新しいアイデアや課題について深く考えることができました。さら



に、他の参加者と積極的にコミュニケーションをとることで、他の参加者のバックグラウンドや経験、情熱をより深く知り、とても仲良くなることができました。この素晴らしい経験から、私は宇宙で行われている高エネルギー電磁波や最近のがん研究への興味を持つようになりました。またこの経験から、これらの学問をもっと深く学びたいと思い、大学はこのようなことを学べるところに行きたいと改めて考えるようになりました。

H2 - A.N. さん

私が今回参加した UCL JAPAN YOUTH CHALLENGE は日本と英国から様々な背景を持った高校生達がともに学び、交流し、テーマにそって意見交換をし、深掘りしていくという大学体験プログラムです。そして、このプログラムは今回で 10 周年を迎えたということでそんな記念すべき年に参加する事が出来たことをとても嬉しく思います。

私がこのプログラムに参加した動機として、ケンブリッジ大学や UCL といった世界トップクラスの大学の講義を受けることが出来ることです。また、このプログラムは学校単位での参加の為、元々、大妻中野に通ってるからこそ参加することができるものに参加してみたいと思っていた私にピッタリのものでした。そして、このプログラムを通して交流することの大切さを学びました。上記のところで述べたように私が参加した理由は講義などプログラムの内容の部分が大きかったのですが、実際は講義よりも、参加者やスタッフの方々から学ぶことが多かったです。生活面で不安なことがあった際も同じ学校や違う学校の子達がサポートしてくれたり、支え合って、この 10 日間を乗り越えることが出来たと思うので、そういった面でも交流の大切さをひしと感じました。

海外留学経験のない私にとって大きな挑戦となったこのプログラムですが、英語を学ぶモチベーションにもなり、さらに言語面もふくめ様々な経験を大学でも積めたらいいなという思いがより強くなりました。本当にこのプログラムに参加することが出来て良かったです。



H2 - R.M.さん

2024 年度 UCL-Japan Youth Challenge に参加しました。私は幼少期に父の仕事で海外に住んでいたため、今まで留学の必要性を感じていませんでした。しかし、周りの人たちが留学で得た刺激を見て、自分も異国で学ぶことの大切さに気付き、このプログラムに参加しようと決意しました。

このプログラムでは、日本とイギリスの高校生が講義やディスカッションなどを通して交流します。多くのイギリスの高校生が日本に興味をもってくれていたり、日本語を学んでくれていてとても嬉しかったです。

今回のプログラムのテーマは "Space and Us" でした。このテーマに沿った講義やディスカッションで学んだことは最後にシンポジウムにてチームで発表します。私たちのチームでは「宇宙を利用して地球上の地球温暖化という課題を解決する」というテーマで発表しました。また、私はフロンティアプロジェクトチームの女性ジェンダーチームに所属しており、イスラム文化と女性にも関心があり、イギリスで一番有名なロンドン中央モスクにも行きました。実際にモスクにいる方々にインタビューもすることもできました。みなさんとても親切な方々で日本にあるモスクについても知ってくれていました。このプログラムで多くの外国人の方が日本に興味を持ってくれる姿を見て、将来は日本と海外を繋げるようなお仕事をしたいと思いました。短い期間の留学でしたが、とても多くのことを学ぶことができました。



WWL 拠点校 研究開発・実践（海外プログラム）国際理解カリキュラム St. Andrew's Seminar

グローバルセンター部長 福島洋治

1. 概要

St. Andrew's Seminar はオーストラリア、ケアンズで二週間を過ごす短期海外留学プログラムである。参加生徒はケアンズの一般家庭にホームステイしながら Saint Andrew's Catholic College(StACC)に通学し、本校生徒一人につき一人ずつ割り当てられた StACC の生徒(バディ)と共に授業を受ける。StACC は Redlynch Valley に位置する私立の学校であり、幼稚園から高校までを備えた教育機関である。本校は10年以上に渡って StACC への短期海外留学を実施しており、また姉妹校としての交流を行っている。今年度の実施内容においては StACC 小学生の日本語授業にて日本文化を紹介する点において探究的な取組を行った。

2. 実施時期と対象生徒

2024年7月13日に出発、同27日に帰着。高校1、2年生13名を対象とした。



3. StACC との協働、探究的取組

StACC で過ごす日中の時間は基本的にバディ生徒が出席する通常授業と一緒に参加してオーストラリアの学校生活を体験したが、2日に1度程度の頻度で実施される特別プログラムにも参加した。そこで参加生徒はヨガやボクシングなどの授業体験、オーストラリア先住民(indigenous people)の文化体験なども行ったが、本プログラムの探究学習的な側面としてここで特筆したいのは、小学生対象の日本語授業に参加して「教える側、伝える側」の役割を担ったことである。

現地の日本語担当教員からの依頼に基づき、生徒たちは「日本の文化を楽しみながら体験する」というテーマに沿って複数名ごとに一つの体験ブースを設定し、そこで折り紙や紙飛行機、日本語での自己紹介アクティビティ、けん玉、だるまさんがころんだなど、日本文化に紐づく様々な活動を自分たちで工夫しながら現地小学生とともに行った。

この授業は対象生徒を変えながら複数回行われたため、生徒たちは一つの授業が終わるごとにグループごとに話し合い、より効果的な教え方、楽しんでもらえる活動展開を試行錯誤しながらも構築していくことができた。

4. 生徒の振り返り、プログラムを通じての変容

プログラム序盤は慣れない環境での海外体験、異文化体験に対してやや後ろ向きな姿勢も生徒の中には見られたが、前述の日本語授業を通じて生徒は自国文化に対する自信を深め、それと同時に、試行錯誤を通じた工夫により日本文化を媒介としたコミュニケーションを現地生徒との間で成立させることができたということによる自信も身に着けることができた。ホストファミリーやスクールバディとの交流も含め、このプログラムは参加生徒の国際交流に関するマインドセットに大きな影響を与えたはずである。

WWL 拠点校 研究開発・実践(海外プログラム) 国際理解カリキュラム - ニュージーランドセミナー

引率 島田 幸子

1. 概要

この研修は、2015年度に始まった中学3年生対象のニュージーランド、ニュープリマスの留学提携校で 2 週間を過ごす海外現地校体験プログラムである。参加生徒は 1 週間をニュープリマスにある New Plymouth Girls High School を中心に様々なアクティビティに参加し、残りの 1 週間は、New Plymouth Girls High School・Inglewood High School の各校で、現地のバディとともに現地の授業に参加する。New Plymouth Girls High School は、生徒数が約 1300 名、本校とほぼ同規模の女子校である。また、Inglewood High School は、9 年生か

ら13年生までの約550名男女共学の公立校である。両校とも海外からの留学生を受け入れつつも、現地のニュージーランドらしい活動も取り入れている教育機関である。本プログラムでは、英語学習はもとより、多様性や現地のマオリの文化に触れ、お互いの文化をリスペクトできるマインドを育てるこことも目的となっている。

2. 実施時期と対象生徒

中学3年生11名が参加し、2024年7月27日(土)～8月11日(日)に実施。

3. 活動内容

1週目の午前中は、本校の元教諭であった Teffrey SUZUKI 先生のサポートを受けながら英語の集中授業、午後は、各種アクティビティに参加し、2週目は各校で通常授業と盛りだくさんの内容となった。

【アクティビティ】

- ・マオリ族伝統の亜麻の葉のバック製作
- ・トランポリンパーク(フライドポテトとアイオリソース付)
- ・クリスマスマーケットを見学
- ・ローラースケート・ローラーブレード体験
- ・カップケーキのデコレーション



【交流プログラム】

- ・レパトーン小学校訪問:

ニュージーランド式の歓迎セレモニービーク(握手とおでこと鼻をつけて挨拶を校長先生や生徒代表と体験)

両校のスクールソング披露、セレモニー(ハカ)体験、校内見学、妻中生でダンスを披露・小学生へレクチャー、

授業見学・後半には3つのグループに分かれて体験指導(お箸を使ったゲーム、名前をカタカナで書く、折り紙)

休み時間にはとても人懐っこく可愛らしい小学生に囲まれ質問攻撃を受け、授業では興味津々で日本文化の体験・作業に取り組む姿に圧倒され、お互いの文化をリスペクトすることの重要性を体感したようである。

4. 生徒の振り返り、プログラムを通じての変容

最初の1週間は、Teffrey 先生のサポートもあり、生徒も全員同じ場所で学習・体験ができたため安心して現地での生活をスタートさせることができ、アクティビティ・寮やホストファミリー内の異文化体験での気付きにフォーカスできた。日本とは異なる環境・習慣を目の当たりにし、少々苦手意識を持つ生徒も見られたが、生徒同士で悩みを共有し合いながら、少しずつ悩みを受け入れ消化し、違いを楽しめる態勢が徐々に作られてきたように感じた。ハカの儀式を実際に体験した際には、小学生であっても代表生徒が披露したハカの迫力は偉大で、ニュージーランド人としてマオリの文化を大切に後世へと引き継ぐ大切さを感じたようである。参加者はこの2週間のプログラムでの多くのことを学び、大きな自信がついたように感じている。今回の経験で、高1でのターム・1年留学等に挑戦しようと準備を始めた所である。

【生徒の振り返り】

Y.I. 2週間も外国に滞在するのは初めてで、どこまで日本の常識が通じてどこまで合わせにいけばいいのかが分からず探り探りだったが、実際に過ごしてみると様々な国の文化が共存して日本ではできない不思議な体験だった。最初の3日間は緊張したけれど、ホームステイの家族もとても優しく安心した。相手が何を話しているかが半分くらいしかわからなかつたし、自分の言いたいことも上手く言えず、大変だったが、少しは伝わっている気がした。1週目はみんなと一緒にだったので安心感があったからか日本食が恋しくなり、日本へ帰りたいと思う時もあったが、英語でコミュニケーションが取れていることがすごくうれしかった。色々なアクティビティに参加したが、現地の小学校に行ったことが一番印象に残っている。ハカを見せてくくれて、本当にかっこよかった。2週目のバディとの通学に大きな不安があつたけれど、少しずつ慣れてきて、わからなくて堂々としているとクラスのみんなが助けてくれて本当にうれしかった。仲の良い友達も出来て今でも連絡を取っている。

V. WWL 開発研究・実践（カリキュラム）内容言語統合型 Cross-Curriculum English 取り組みと成果

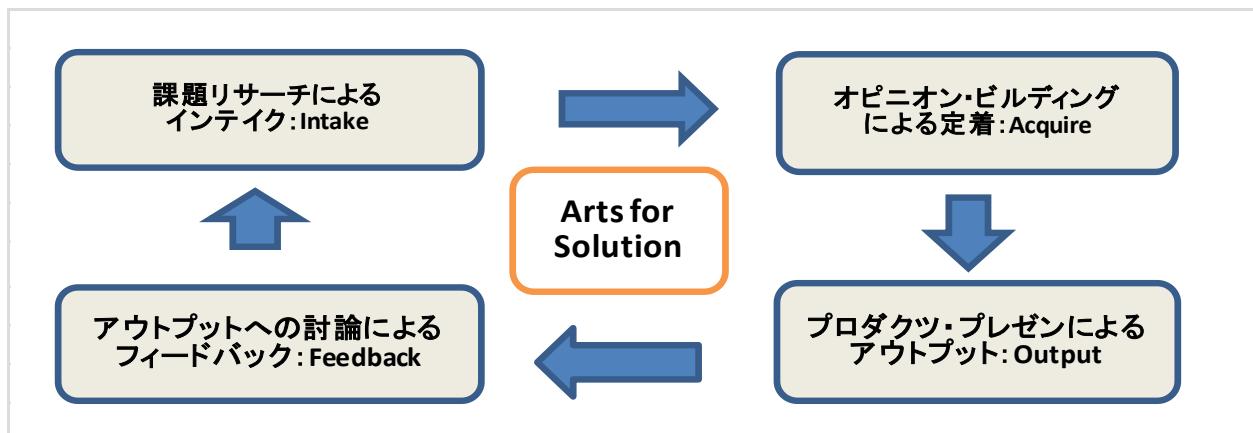
WWL カリキュラムコーディネーター 水澤 孝順

WWL 拠点校である大妻中野中学校・高等学校では、平成 28 年度(SGH 申請時から)、独自の外国語教育カリキュラムを実践する GLC(グローバル・リーダーズ・コース、以下 GLC と記す)を設置して、カリキュラム開発を続けている。前述した目指す人間像の育成に取り組んでいる。そのカリキュラム観は以下の通りである。

- ・ 英語 4 技能の統合型カリキュラムを、ネイティブ教員と協働してさらに研究・実践する。
- ・ クロス・カリキュラムの実践により、中学生の段階から、特に世界の諸問題についてのリサーチ、分析、オピニオン・ビルディング、発表、討論のプロセスにより、英語の習熟を目指す。

この本校の外国語カリキュラムにおいては、特に論理性を踏まえた言語コミュニケーション能力の育成を強く意識している。具体的には、言語コミュニケーション能力を、grammatical competence(文法的能力)、discourse competence(論理的能力)、socio-linguistic competence(社会的言語能力)、strategic competence(方略的能力)の4つの能力として捉え、特に discourse competence(論理的能力)、socio-linguistic competence(社会言語的能力)を重要な能力として、それぞれの具体的な指導に落とし込んでいる。

本校の外国語(英語)の探究学習サイクルのフローチャート(概念図)を以下に示す。



この本校の英語教育のフローチャートを踏まえ、WWLとしての探究カリキュラムとして、科目構成は以下のようになっている。中学 1 年生から高校 1 年生までは、ネイティブ教員が担当する科目が 4 単位(主として、クロス・カリキュラムの部分を担当)、日本人教員が担当する科目が 2 単位(grammatical accuracy と logical thinking の部分を主として担当)になっている。

高校 2 年、3 年では、このネイティブ教員が担当する英語 4 単位科目+日本人教員が担当する 2 単位科目に加えて、学校設定科目「English for Academic Purpose I」、「English for Academic Purpose II」。English for Academic Purpose I は、特に TOEFL iBT や IELTS への受験を意識し、そのコンテンツを授業の中で扱い、reading comprehension から summarizing, opinion building, essay writing, のプロセスを通して、その実際のスコアアップにも繋げている。English for Academic Purpose II は、海外大学や国際系大学での進学に対応できる common essay の作成スキルの修得を目指す授業を実施している。

この GLC のクロスカリキュラム英語では、WWL の構想名である「繋ぐ・行動する - “Beyond School” アプローチによる協働型の地球市民教育 -」を実践するために、Beyond School プログラムをカリキュラムと連動させたカリキュラム開発に取り組んでいる。その報告と生徒成果物を以下に、担当している WWL 拠点校のネイティブ教員のレポートで報告する。

WWL Beyond School Curriculum Development Report – GLC Cross Curriculum in Total

Craig Nixon

1. Global Leaders Course (GLC)

To teach students academic English by using other subjects or topics as tools to improve the students' English skills and French skills.

2. 1-6 years (中1 ~ 高3)/

The target students are students who either have limited or extensive experience overseas and students who have lived domestically in Japan only but have a English ability of Eiken pre-2 level or higher.

3. Process / Activities with inquiry mindset

To immerse the students in English during the class time hours and beyond by focusing on reading, writing, listening, and speaking by using different subjects or topics as a tool to motivate the students.

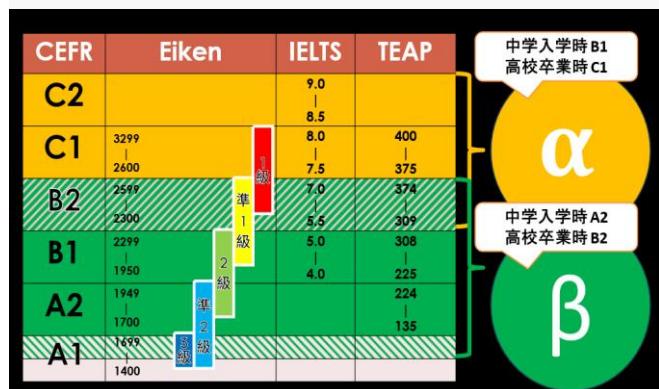
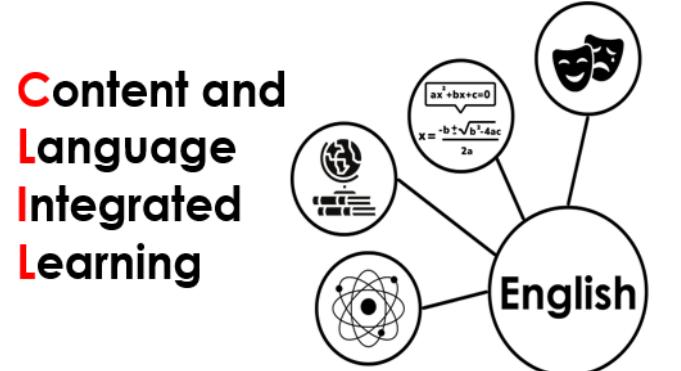
4. Reflection and Achievement / Transformation in Students' skillset and mindset

Overall, it is successful for the students as they clearly improve their skills and mindset over the course of the school year. Most noticeably from the 中3 to the high school levels as the students truly begin to show their inquiry based learning skills.

5. Students' Reports / Products

GLC students often are involved in extra school activities such as Model UN, Frontier Club (local and international community involvement), STEAM, HDPU, TEP Cup, GIS, Speech Contests, Presentation Contests, TED Talks, Book Magic (Book reading to local children)

6. GLC Cross Curriculum Visual Image



WWL Beyond School Project Report – GLC Cross Curriculum J2 Alpha Level

GLC J2 Alpha / Class Conveyor / Michelle Hamada

1. Program / Project Summary

Students studied the topic of “Social Entrepreneurs” in their course work. As part of review and gaining a deeper understanding of the topic, students were tasked with making a presentation based upon a critical social issue in Japan with their recommendation on how to affect positive change of the issue through a social entrepreneurial idea/method.

2. Program Period / Date and Target Students

This was an in-class assignment for the 12 alpha-level students in the J2 year at the end of term

3. Process / Activities with inquiry mindset

Students independently researched social issues endemic to Japan. They then chose an issue that they deemed worthy of further study based on their preferences. After in depth research, they then were tasked with considering viable solutions to the problem. The solutions needed to be set forth in a social entrepreneurial framework. Students then presented their findings during an in-class presentation in front of their peers with the aim of educating others on their chosen material.

4. Reflection and Achievement / Transformation in Students’ skillset and mindset

Many of the students were enthusiastic in educating their fellow classmates. Each learned something new that they had not known previous to the assignment. They also improved their research ability and summarizing skills. Students practiced their verbal skills as well as their computer presentation slide making skills. Students sharpened listening skills while evaluating presentations and writing comments to presenters. Each student chose a different social issue in a natural selection process without guidance.

5. Students’ Reports / Products

Students summarized their efforts and thoughts on the project:

Student 1 -

“Throughout this program, and listening to other presentations, I deeply understand that many things are still inadequate in Japan. I felt like most of the problems were about relationships and environment related, so that we should support more people to prevent from their mental issues. In addition, of course every topic were all different and had dissimilar content, something were similar, and they are actually all connected. For instance, when we imagine about school bullying, they are doing those things because they are unfulfilled and these are all circulation. When the victim get too much stress, they may start bullying other children, and the other victim will get mental illness again. Also, environmental problem is ultimately the result of human actions, so unless we change people’s mindsets, nothing can change unfortunately. But on the other hand, if we change people’s heart, everything will be way easier. Before doing this program, I searched about a lot of SDGs and environmental issues, but never thought that all of these are connected. Maybe if more and more people start noticing this, achieving SDGs will not be that hard.”

Student 2 –

"Through this presentation, I was able to learn and understand that among the big issues such as "biodiversity" and "low birthrate and aging population," there are smaller issues that are not given much attention, such as "increase in the number of stray cats" and "isolation of the elderly," and that there are people who are in troubled and worried from these issues. In addition to "donating" or "fundraising," there are things we children can do to solve these problems if we come up with ideas ourselves. I also thought that for our future, it is important to start looking at social issues and solve them little by little with our own hands."

WWL Beyond School Project Report – GLC Cross Curriculum

Grade 9, Native English Teacher, Donna Dai

1. Program / Project Summary

The Global Leaders Course (GLC) course aims to develop native-level English language proficiency by fully utilizing English texts, media, and resources. The program also encourages students to become fully immersed in the English language within and outside the classroom so that they have the ability to communicate their ideas clearly to an international audience in any circumstance. In addition to language development, the objectives of the GLC English communication course are for students to pursue a diverse mindset, which allows oneself to think deeply about both local and global issues, and to build the desire to contribute to a better society.

2. Program Period / Date and Target Students

2024-2025 Academic year for students in the Grade 9 GLC English Communication class

3. Process / Activities with inquiry mindset

Sample activity: Problem-Solution Exercise (Pair work)

- Topic: The increase of elderly prisoners in Japan's prisons
- Objective: Create obtainable solutions to a current social issue
- Process:
 1. Read about prison programs that help rehabilitate inmates of United States prisons
 2. Read a news article discussing the rise of elderly prisoners in Japan
 3. Watch a recent news report about the financial struggles of the retired elderly in Japan
 4. Students work in pairs to form a proposal to curb the increasing trend of incarceration and/or recidivism among the elderly
 5. Presentation and reflection

4. Reflection and Achievement / Transformation in Students' skillset and mindset

Students were able to tie the previous readings to gain ideas for their proposals. It was pleasant to see how students considered if programs in American prisons could be options in Japan or whether they could come up with similar ideas of their own. Students had also independently chosen to do further research to look for more information regarding the causes of the issue.

As students were assigned their pairs, it was interesting to see the various dynamics. When disagreements of ideas occurred, the students were required to analyze each other's proposals on their own and come to an agreement on whose idea(s) would be a more viable solution or determine whether

there was a possibility to combine elements of each proposal into a single, more structured solution. In the end, the students had created very plausible proposals and developed teamwork through conflict resolution.

5. Students' Reports / Products - Selected Sample of Student Reflections

Before researching this problem, I only knew that there were a few pension options for the elderly in Japan. However, after starting research, I discovered that the number of elderly people going to prison is increasing due to a lack of money. In our presentation, we proposed a solution to establish a free meal cafeteria that provides food close to its expiration date. This would help prevent elderly individuals from committing crimes while also reducing food waste. To prevent this problem, I believe it is essential for us, young people to raise awareness and spread this problem to society. I also want to broaden my perspective to recognize that many people need support.

Students' Sample Presentation

Poverty in Japan's prison

Introduction
Poverty is the most important issue!!

Lack of Public assistance to elderly people

Elderly's elderly care

Project Goal
Increase group homes for elderly

Contents

- Provide nursing service
- Give daycare service
- Financial support



2024 WWL Beyond School Project Report – GLC Cross Curriculum

高 1/ Teacher / Spencer Schwartz

1. Program / Project Summary

The H1 Alpha Class in the Global Leadership Course is designed to develop globally-competent students through a curriculum based on academic reading and critical thinking. Students use the Longman Academic Reading Series as well as supplementary English language materials including literature, articles, and videos. The students engage in discussion, debate, and research-driven presentations to deepen their understanding of the material and enhance their English proficiency.

2. Program Period / Date and Target Students

The class runs the full academic school year from April to March. Students in this course must have both a high level of English competency and a desire to improve themselves and their understanding of the world around them.

3. Process / Activities with inquiry mindset

Each unit begins with a pre-reading discussion where students share their preexisting knowledge and ideas about the topic. Before reading a passage, they investigate the author's background to identify influences and biases, fostering a more critical and active approach to learning.

After reading, students form a circle and participate in Socratic seminars with me acting as a moderator. The students are encouraged to debate each other while analyzing key themes and ideas. At the end of a unit, students are tasked with a research presentation connected to the unit's themes. The presentation is an opportunity to encourage students to dive deeper into the unit's readings while tying in current issues.

4. Reflection and Achievement / Transformation in Students' skillset and mindset

Students by the end of this year were more willing to express their own opinions in a way that is typically seen only from study abroad students. The increased time speaking in class and engaging with each other also helped students present more comfortably and confidently at the end of the unit. Additionally, the students developed a true sense of critical thinking, as they began to question the reasons certain statements are made, who an author is, and what their sources are.

"I thought that everyone used the same social networking tools before researching it, but I discovered that citizens and governments used different platforms to spread their claims. I also learned that dictators were not only in Europe (like Hitler) but also in North Africa and around the world. What I

learned in my history class didn't focus much on African governments, so it was interesting to learn more about it."-T.F.

5. Students' Reports / Products

Flexibility and Versatility

When did you decide whether to study humanities or science?

Year	Percentage
First year of high school	66 %
Second year of high school	20 %
Third year of high school	14 %
Not decided	0 %

Japan

- Humanities vs. Sciences
- High School Choice
- Rigid Boundaries
- No Faculty Switching

America

- Interdisciplinary Studies
- Double Majors
- Multiple Faculties
- Academic Exploration

Ability > Seniority

Knowledge and culture beyond the boundaries of humanities and science

Basic knowledge in the major field: 75.85%

Expertise in the major Field: 41.40%

Mathematics and Data Science: Expertise related to AI and IT: 16.93%

Professional qualification: 15.45%

other: 4.8%

1.8% 3.8% 23.20% 38.26% 40.00% 49.75% 59.85% 69.85% 79.85% 89.85% 99.85%

Liberal Arts

Diagram illustrating the Liberal Arts as a brain with various subjects represented as puzzle pieces:

- English
- Art
- Health
- Philosophy
- Anthropology
- Biological Sciences
- Physics
- Chemistry
- Mathematics
- Political Science
- Languages
- Psychology
- Theatre
- Sociology
- Criminal Justice

A large blue brain on the right contains numerous small icons representing various subjects and fields of study.

Sources

The infographic is divided into four sections, each with a number and a title. Section 1, 'GOVERNMENT', shows a portrait of Muammar Gaddafi and text about his policies. Section 2, 'ECONOMIC', shows a large money bag and text about citizens. Section 3, 'ARAB SPRING', shows flags of Egypt, Libya, and Tunisia, and the word 'revolution'. The first section, 'FACTORS', contains four numbered boxes: 1. Government (with a US Capitol building icon), 2. Economic (with a dollar sign icon), 3. Arab Spring (with a green tree icon), and 4. International Relations (with a globe icon). A note above the first section states: 'There were 4 important factors which led to the revolution'.



Program

This project aimed to engage students in an exploration of cultural adaptation, media studies, and sociology by analyzing the Norwegian TV series *SKAM* and creating their own localized version, *SKAM Japan*. Because of its popularity, several countries remade *SKAM* adapting it to suit each culture while maintaining the core plot structure. Through comparative cultural analysis, media critique, and creative adaptation, students developed a deeper understanding of how historical, social, and cultural factors influence storytelling and representation.

Students watched clips from the different international adaptations of *SKAM* (such as *SKAM France*, *SKAM Italia*, and *Druck* from Germany) and analyzed how each version was adapted to reflect the unique cultural and social realities of that country. The final stage of the project required students to create their own *SKAM Japan* clip, incorporating cultural elements relevant to Japan while reflecting on the ethical, social, and media-related implications of adaptation.

Cross Curriculum

Media Studies

- The analysis of different adaptations of *SKAM* introduced concepts from media studies, such as representation, framing, audience reception, and cultural context in storytelling.
- Students engaged in media production by scripting, directing, and filming their own versions of *SKAM Japan*, applying principles of cinematography, visual storytelling, and editing.

Sociology / Social Studies

- The project explored societal norms, cultural identity, and marginalization, which are core topics in sociology.
- Students examined how different cultures depict social issues such as LGBTQ+ rights, mental health, and youth struggles.
- They conducted research on marginalized communities in Japan, critically analyzing representation in media.

Japanese Language & Literature

- Since students adapted dialogue and themes to fit a Japanese setting, they were engaging in translation, localization, and creative writing.
- They examined linguistic nuances and how language reflects cultural values and norms.
- The storytelling aspect also tied into narrative structure and literary techniques.

ICT (Information and Communication Technology)

- Filming, editing, and presenting their final projects required students to use digital tools for video production.

- They engaged in multimedia communication, which is a key skill in modern media studies.

Program Period / Date and Target Students

This activity took place between September 2024 – November 2024. The students who participated were from the GLC Alpha class of senior 2nd year.

Process

1. Introduction to *SKAM* and the Concept of Cultural Adaptation

- *Inquiry Question*: How does culture shape the way stories are told?
- Students were introduced to the original Norwegian *SKAM* and its global success.
- They watched and analyzed clips from various international adaptations, comparing character dynamics, social issues, and storytelling techniques.
- Through class discussions, students identified how each adaptation reflected the culture and societal norms of its country.

2. Comparative Cultural Analysis of International *SKAM* Versions

- *Inquiry Question*: What are the key differences between the different adaptations, and why do they exist?
- Students conducted a comparative study of at least two versions of *SKAM* outside of the Norwegian original.
- They analyzed:
 - What social issues were emphasized? (e.g., LGBTQ+ representation, mental health, family expectations)
 - How were relationships portrayed differently?
 - What cultural norms influenced the dialogue and setting?
- Students debated whether certain themes could be easily transferred to a Japanese context or if modifications were necessary.

3. Identifying Marginalized Groups in Japan

- *Inquiry Question*: Who in Japanese society experiences marginalization, and how are they portrayed in media?
- Since *SKAM* is known for representing underrepresented voices, students researched marginalized communities in Japan, such as:
 - Zainichi Koreans (ethnic Koreans living in Japan)
 - LGBTQ+ individuals and representation in Japanese media
 - Hāfu (mixed-race Japanese people) and identity issues
 - Gender expectations and societal pressures on youth
- Students critiqued Japanese media's representation of these groups and discussed how *SKAM Japan* could offer a more inclusive narrative.

4. Creating Their Own *SKAM Japan* Clip

- *Inquiry Question*: How can we adapt a story to reflect Japanese cultural and social realities?
- Based on their research, students formed small groups and chose a specific scene from *SKAM* to adapt into a Japanese setting.

- They reworked the dialogue, setting, and themes to reflect Japanese cultural and social norms while maintaining the emotional essence of the original story.
- Groups filmed their own adaptation, paying attention to realistic portrayals and cultural sensitivity.

5. Ethical Considerations and Media Representation

- *Inquiry Question:* How do we ensure responsible storytelling when adapting media?
- After creating their videos, students engaged in a self-critique session, reflecting on:
 - Did our adaptation stay true to the social realities in Japan?
 - Did we avoid stereotypes or misrepresentations?
 - Would audiences in Japan find this relatable or authentic?
- Groups revised aspects of their work based on peer feedback before finalizing their adaptations.

6. Presentations and Final Analysis

- *Inquiry Question:* How does understanding cultural context improve storytelling?
- Each group presented their clip to the class, explaining the changes they made and why they made them.
- Students compared their different adaptations and discussed:
 - How different groups approached similar challenges in adaptation.
 - Whether there were common themes in their Japanese versions that differed from other *SKAM* adaptations.
 - How working through this process changed their perception of media, culture, and storytelling.

Transformation in Students' Skillset

Having students create their own adaptation of *SKAM* was an essential part of the inquiry-based learning process because it required them to actively engage with media studies, cultural adaptation, and storytelling, rather than just passively analyzing existing versions. This hands-on, experiential learning approach allowed students to question, investigate, and apply their understanding in a way that deepened their comprehension. Here's why this step was critical:

1. Encouraging Deep Inquiry Through Cultural Adaptation

Inquiry-based learning is driven by asking questions and seeking answers through exploration. By remaking *SKAM*, students had to ask:

- *What aspects of the original story need to change to fit a Japanese context?*
- *What social issues are relevant to Japanese youth today?*
- *How do relationships, friendships, and conflicts differ across cultures?*

By engaging in cultural analysis and adaptation, students had to investigate how different societies shape the way stories are told, compare media representation across cultures, and develop their own interpretations rather than just consuming pre-existing ones.

2. Applying Theories in a Real-World Context

Instead of only studying theoretical concepts like media representation, cultural identity, and marginalized voices, students applied these ideas in practice. By creating their own *SKAM Japan*, they had to:

- Think like media creators rather than just media consumers.
- Make intentional creative decisions about character portrayal, dialogue, and themes.
- Ensure cultural accuracy while staying true to the emotional essence of *SKAM*.

This allowed them to move beyond passive analysis and truly engage with the challenges of storytelling, localization, and representation.

3. Strengthening Critical Thinking by Comparing and Contrasting

Inquiry-based learning involves questioning existing narratives and developing independent interpretations. Creating a *SKAM* adaptation required students to critically examine differences between cultural versions and think deeply about what makes a story universally relatable versus what needs to be localized.

For example, students might ask:

- *Why do certain topics (e.g., LGBTQ+ representation) receive different levels of focus in different *SKAM* adaptations?*
- *How do different societies handle teenage struggles differently?*
- *How can we make our version of *SKAM* more authentic to a Japanese audience while keeping its core themes?*

Through this process, they engaged in comparative media analysis while making creative choices that reflected their understanding of Japanese youth culture.

4. Encouraging Ethical Considerations in Media Representation

Inquiry-based learning is about not just producing content, but critically reflecting on it. By creating their own adaptation, students were challenged to consider:

- *Are we reinforcing or breaking stereotypes?*
- *Are we representing marginalized groups in a fair and accurate way?*
- *What ethical responsibilities do media creators have?*

This step was crucial in helping students develop media literacy and an awareness of the impact of representation in storytelling, rather than just assuming that existing media is neutral or objective.

5. Fostering Creativity, Collaboration, and Communication

Instead of just writing an essay or answering questions, students were actively engaged in creating something new. This process involved:

- Collaborating in groups to develop scripts, act, film, and edit.
- Communicating ideas visually and through storytelling rather than just through written analysis.
- Problem-solving when adapting scenes to fit cultural and social realities.

This multimodal learning approach allowed students to engage with the material in a meaningful way while developing practical skills in media production, teamwork, and storytelling.

6. Reinforcing Learning Through Reflection

After creating their *SKAM Japan* adaptations, students presented their work and reflected on their creative choices. This final step was essential for inquiry-based learning because it allowed them to:

- Explain their rationale for changes made in their adaptation.
- Critique their own work and consider how they might improve representation.
- Discuss differences between their versions and those of their classmates, leading to a deeper understanding of cultural perspectives.

Through reflection and peer discussion, students internalized what they had learned rather than just memorizing information.

Selected Students' Reports and Works

H2-5 H.S.

It was a great experience to work on SKAM JAPAN. At first, it seemed like a difficult task to adapt the scenes to include elements of Japanese style. We had to carefully consider whether each scene had meaning that connected with the original movie. Though, we managed to finish filming and editing without any problems, as each member was able to complete their tasks very well.

H2-5 K.T.

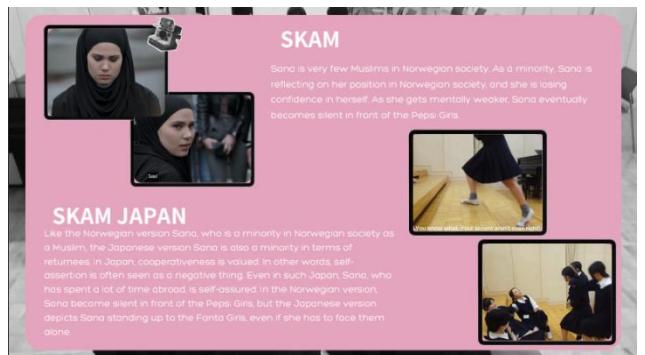
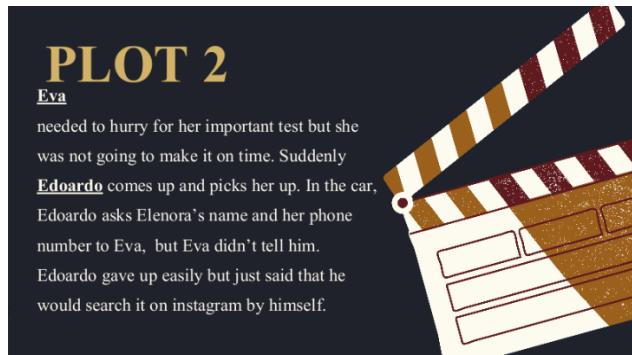
When we discussed about how the situation we film should be. We pointed out a common problem the chorus club has. It is because half of my team belong to the chorus club. They shared us about the bullying and bad mood the club usually have. Therefore, we decided to create this scene as a chorus club members having a trouble. I was surprised by the fact that bullying does exist in the club and the fact that the way they bully is underhanded. They do not try to be offensive in front of their target, but they steer and they talk badly about the person they don't like indirectly. And from my experience of studying abroad in the states, the kids I saw was straight forward to expressing how they actually feel about the person who is facing them. What I thought when I found this difference was that the video we made was more like the US style of bullying, and fully familiar to what Japanese bullying is. But, in the order to show that Sana was bullied, we created the scene a little bit more obvious than how the situation would be in real life because the bullying in Japan is mostly unnoticeable to others. I still think that we did great on making this video by showing Pepsi girls does not tell Sana in person that they do not want her in their group.

Through all this experience of making a SKAM JAPAN, I liked the part that we could act our character really well, and the characters' personalities suit each other of us since we got to pick who to play, and got to make the lines for our characters. Also, as we made this video, we discussed about everything as a team. So it was great opportunity since we got to know each others' possibilities more.

H2-6 N.S.

Throughout this assignment, it was very enjoyable to create a whole work of peace with friends. Every person had a role and they worked very hard for the role that they were assigned. After doing the presentation and showing the video that we have created, our group was glad that even though we filmed the video in Japanese, everyone had a laugh and that was great to hear the audience enjoyed it. Though our group took a long time to figure out who would play which character. We do not have a major reason why we have chosen Haruka Enomoto for Sana. Her character Sana was a very independent person who was not much interacting with the group. She had her own path and she made a decision herself without being on the flow with the others. The only time when we had a major interaction with her was questioning her about her Juzu, the religious bracelet, which is rare in Japan because it is mostly seen in funerals. The most challenging part was to consider what will stand out in Japanese society. We had a couple of ideas besides Juzu, such as distinguishing people who are poor and rich, or generally discriminating against people who have migrated, but we came to a conclusion

that that does not occur only in Japan and it is an issue around the globe. Overall, I am glad that everyone loved it and it is one of the biggest highlights of this year.



WWL Cross Curriculum Report – Art



H2 GLC Alpha Communication English II
Instructor: Jihan Victoria

Program

Students learned to critically evaluate and interpret art beyond visuals and initial impressions. They study historical, economic, and political contexts to understand how art reflects and responds to society. The project begins with a scaffolded analysis of contemporary artist Demna Gvasalia, guided by the

instructor. Students then engage with artist Sareena Sattapon in a guest lecture, gaining insight into artistic intent and process. Finally, they independently select an artwork, research its historical context, and develop a critical analysis supported by evidence rather than personal opinion.

Cross Curriculum

History & Social Studies

- Students analyze how historical events, political shifts, and economic conditions influenced artistic movements.
- They examine how Impressionism responded to industrialization and modernization in 19th-century France.
- Contemporary art discussions include themes of war, displacement, consumerism, and social structures.
-

Media & Cultural Studies

- Students explore how artists use different mediums (painting, fashion, performance) to critique society.
- The project introduces concepts of representation, audience reception, and cultural commentary in art.
- The debate on whether fashion is considered art ties into broader discussions on media and cultural production.
-

Literature & Critical Writing

- Students develop analytical writing skills by constructing a well-supported critical analysis of an artwork.
- They engage in research, citation, and academic writing practices to form arguments based on historical evidence.
- The project emphasizes structured argumentation, moving beyond personal opinion to evidence-based interpretation.

Economics & Political Science

- Students examine how economic conditions and political ideologies shape artistic expression.
- They analyze how patronage, censorship, and funding impact the creation and reception of art.
- Contemporary art discussions include consumerism, corporate influence, and the commodification of culture.

Visual Arts

- The study of Impressionism and contemporary artists enhances students' understanding of artistic techniques and visual storytelling.
- Students learn how art movements evolve in response to societal changes and technological advancements.
- They critically engage with performance and conceptual art, expanding their definition of what constitutes art.

Program Period / Date and Target Students

This activity took place between January 2025 – March 2025. The students who participated were from the GLC Alpha class of senior 2nd year.

Process

1. Introduction to Impressionism and Historical Influence on Art
 - *Inquiry Question:* How does history shape artistic movements?
 - Students studied Impressionist artists like Claude Monet and Edgar Degas, focusing on how technological advancements, political shifts, and social change in 19th-century France influenced their techniques and subject matter.
 - They compared Impressionist paintings to earlier academic art to understand how movements evolve in response to cultural shifts.
 - Students discussed why some movements are initially rejected by society and later accepted as significant artistic revolutions.
2. Examining Contemporary Art as Social Commentary
 - *Inquiry Question:* How do modern artists reflect and critique the world around them?
 - Students analyzed the work of Demna Gvasalia, exploring how his fashion collections incorporate themes of war, displacement, and consumerism.
 - The current Russo-Ukrainian conflict was analyzed in relation to the works studied as well as the dissolution of the Soviet Union and its after effects in the end of the 1980s.
3. Selecting an Artwork for Critical Analysis
 - *Inquiry Question:* How does historical context change our interpretation of art?
 - Students independently chose a work of art (painting, sculpture, fashion piece, or conceptual art) that interested them.
 - They conducted historical research on the time period, considering:
 - What major historical events were occurring when this artwork was created?
 - What personal experiences influenced the artist?
 - How did the public react to the artwork when it was first presented?
 - Students formed hypotheses about the deeper meaning of their selected artwork.
4. Writing the Critical Analysis Report
 - *Inquiry Question:* How do we construct a well-supported argument about art?
 - Students wrote an essay analyzing their chosen artwork, addressing:
 - Historical Context: What was happening in the world at the time?
 - Artist's Intent: What themes or messages can be identified?
 - Social and Cultural Influence: How did society shape the art, and vice versa?
 - Personal Interpretation: How does the historical knowledge change the way we see the piece today?
 - Students used evidence from historical sources and artist statements to strengthen their arguments.
5. Presentation and Peer Discussion
 - *Inquiry Question:* How do multiple perspectives deepen our understanding of art?

- Each student presented their analysis to the class, explaining their research process and final interpretation.
- Classmates were encouraged to ask questions and challenge interpretations, fostering critical discussions.
- This stage emphasized that art is open to multiple meanings, depending on who is viewing it and from what historical perspective.

Beyond School

Sareena Sattapon was invited as a guest lecturer. Sattapon is a MEXT scholar and PhD candidate in Global Art Practice at Tokyo University of the Arts. In 2022, Sattapon was the recipient of the Grand Prize at the Contemporary Art Foundation (CAF) Award for her work "Balen(ciaga) I Belong", for which she also received a special prize from the 2022 Shibuya Art Awards. Her most recent work, "In The Realm Beyond Spectrum", won the Second Grand Prize at the TOKYO MIDTOWN AWARD 2024 Art Competition.

Sareena Sattapon, as an active artist and PhD candidate in Global Art Practice, offered students a firsthand account of how contemporary artists conceptualize, develop, and execute their work. Students engaged in a Q&A session, where they asked about artistic intent, public reaction to social commentary, and the balance between personal expression and activism.

Transformation in Students' Skillset

1. Encouraging Independent Thinking and Inquiry

By conducting a self-directed critical analysis, students had to:

- Choose an artwork that resonated with them.
- Formulate their own questions about the piece's meaning, historical context, and artistic intent.
- Develop a hypothesis about what the artwork communicates and test it through research.

This process helped students move beyond simply accepting expert interpretations and instead develop their own intellectual agency as art analysts.

2. Connecting Art to Historical and Social Contexts

A central theme of the project was understanding how historical events and social issues shape art. By conducting their own analysis, students had to investigate:

- *What historical events were happening when this artwork was created?*
- *How did the artist's personal experiences shape the themes in their work?*
- *How did society respond to the artwork at the time, and how is it viewed today?*

By engaging in historical research, students were able to see art as a reflection of its time rather than just an isolated aesthetic object.

3. Applying Concepts from the Guest Lecture and Contemporary Art Discussions

After learning from Sareena Sattapon's guest lecture, students had a foundation for thinking about how artists engage with social issues. Conducting their own analysis allowed them to:

- Apply Sattapon's approach to conceptual art and social commentary to other works.
- Compare historical and contemporary examples of how artists challenge cultural norms.
- Investigate whether their chosen artwork had similar themes of activism, resistance, or identity.

4. Developing Critical Thinking and Evidence-Based Interpretation

Art is subjective, but strong analysis requires evidence-based reasoning. By conducting their own analysis, students had to:

- Support their interpretations with historical facts, artistic techniques, and cultural references.
- Consider multiple perspectives, including those of the artist, art critics, and audiences.
- Challenge their own assumptions about what an artwork means and be open to discovering new interpretations.

This process mirrored how real art historians and critics work, training students to think critically and analytically.

5. Strengthening Research and Academic Writing Skills

Writing their own critical analysis required students to:

- Conduct independent research using primary and secondary sources.
- Organize their ideas into a structured argument.
- Use formal writing skills to communicate their analysis effectively.

This helped bridge the gap between art appreciation and academic scholarship, preparing students for higher-level studies in humanities and the arts.

6. Encouraging Personal Engagement and Ownership of Learning

When students choose an artwork to analyze, they become personally invested in their learning. This sense of ownership:

- Increases motivation to conduct deeper research.
- Encourages creativity in forming interpretations.
- Leads to a stronger emotional connection with the subject matter.

7. Fostering Discussion and Multiple Perspectives

After completing their analysis, students shared their interpretations with classmates. This allowed for:

- Comparisons between different perspectives on the same artwork.
- Debates on how history influences artistic meaning.
- Opportunities to refine ideas based on peer feedback.

Through discussion, students saw that art is not about “right” or “wrong” answers, but about well-supported perspectives that evolve through inquiry.

Selected Students’ Reports and Presentation Slides

H2-5 R.U.

For me, art was just an object that expresses artists’ feelings and emotions. I wouldn’t think about how or why they made it before I learned the history of art. Now, we have the freedom to make and even anything can be art if the artist says so. This was because of how old people changed the tradition of art in those days. Sareena was one of the artists which I thought was not defined as art. In her art, she showed her home culture and trying to spread the culture.

After the lesson and Sareena’s visit, I was able to learn how art now is made and what the artists wanted to express by their art. I became interested in art and made me want to visit museums and galleries that exhibit various kinds of art. Arts can represent history; the time and the background just by looking at it. Eventually I thought, art connects us, world, and the past.



Figure 1- Slide from student's volunteer work teaching art to differently abled students. This experience shaped student's understanding of art.

CONSIDERATION!

Why did Oliver get engaged?



When Oliver was younger
1978: A discriminatory bill was proposed
1980: The AIDS panic erupted
Oliver lived during these difficult times.



Oliver

Figure 2 - Student's analysis of historical events in 1980s to explain their interpretation of the film.

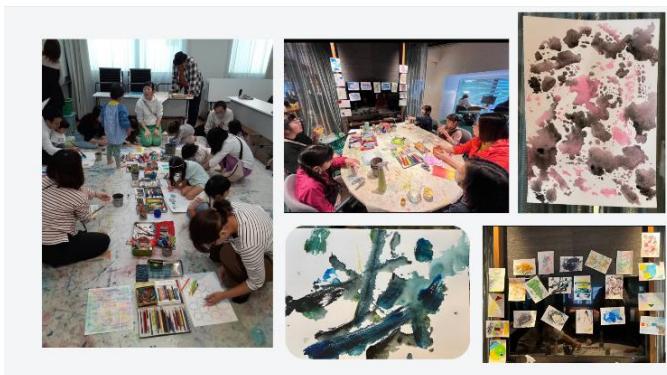


Figure 3 – Student's experience with creating art themselves

Intertextuality taking a theme, borrowing a quote from a poem

– 令月にして風和らぎまあまあ踊りましょ
The wind's calming down in this joyous month, now, let's dance.

– 時に初春の令月にして気淑く風和らぎ
In this auspicious month of early spring, the weather is fine and the wind gentle



Figure 4 – Student applies the literary concept of intertextuality in their analysis of the artwork.

The people who wrote the textbook? Why was their interpretation more correct than mine?

I have been learning English as long as I have been learning Japanese. But I never really understood the point of it until I took that English literature class. Up until then, learning English was for the sake of being good in it. However, taking that literature class showed me that different languages give you access to doing things a different way, in this case literature. Learning a different language lets me create meaning from someone else's words and ideas on my own. There are so many ideas and ways of doing things by people and cultures who speak something other than Japanese. I do not want to just rely on someone else's interpretation of those, whether that be a textbook, a teacher, or AI. Because, like literature, language is open to interpretation.

1. 取り組みの概要とねらい

本校では、“Beyond School” - 学校を超えて、様々な企業のもつアカデミックなリソースを活用し、inquiry based learning の新しい手法の開発に取り組んでいる。その1つとして、キヤノン株式会社サステナビリティ推進本部と連携し、写真ワークショッププログラムを行った。表現活動を通して、新しいものの見方、自身の内面をこれまでにない視点で振り返る力とマインドの修得を目指した取り組みである。



2. 実施時期と対象生徒

2024年12月25日、2025年1月25日 中1～高2 14名

3. 外部との連携、協働、関連

この取り組みでは、Beyond Schoolとして、キヤノン株式会社サステナビリティ推進本部と連携。キヤノンより一眼レフを借り、自分の感性に響く瞬間をとらえ、写真作品にし、プレゼンする活動を実施した。



4. 取り組み内容と生徒の変容、成果、振り返り、成果物など

① 「思想の可視化」「カメラの使い方」

日常生活で優先しがちなものは「個の自分」ではなく、「学校や社会の溶け込む自分」であるが、マズローの5大欲求のピラミッドの頂点にある「自己実現」とは自分の理想とする生き方をすること、自分とは何者かは自分の内側に目を向け、その自分の内側を目に見える形にすることで自己実現ができるのではないかと話した。

自己実現や自己表現を通して、人としての幅が広がり内面の魅力が増すこと、人と比べない自分の世界を持つことで気持ちが整い、生き方に自信が持てることと伝えた。スマホを用いて記録として写真を撮ることに慣れている生徒たちに、「現実の一部を切り取るだけでなく、物語や新たな解釈につながる写真撮っていく提案をし、観察力と思考力を鍛える Visual Thinking Strategy (NY の MoMA が開発した芸術鑑賞法) を用いて写真家の写真3点を鑑賞した。



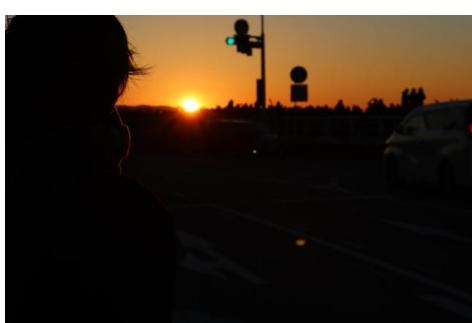
② 生徒プレゼンとディスカッション

それぞれが冬休み期間中に撮影した「お気に入りの一枚」を選び提出。作品にタイトルを付け、順番にスライド上映を行いながらプレゼンテーションを行なった。プレゼンでは、制作意図や撮影時の状況、タイトルをつけた理由などが発表された。また制作者から鑑賞者へ立場を変えて、他の人の作品を見た意見や感想を述べ合った。

<生徒による振り返り>

- 私は、写真ワークショップを通して、自分の興味関心の軸を感じました。実際に写真を撮るときには、焦点を置くポイントを意識していく中で自分がどのようなことに関心を持っているか気付くことができました。また、鑑賞会では、人によって写真のテイストが全く違うので興味深かったです。自分だけの表現をすることは初めてで、自分の感性のままに撮ることができるのはワクワクの連続でした。これからは、このワークショップで知った、自分の中の新しい表現の世界を大切にていきたいです。

- 自分が思っている以上に誰かに向けて、自分の何かを表現するは難しいと思った。誰かに共感してもらうということは誰かの琴線に触れたということなので、好みの中に入れてもらえたと思うと嬉しかった。何かストーリーがあるとその写真に深みができたり、作者の意図を知ることができ、その写真に深みができたり、深堀をして理解することができるのだと実感できた。
 - どうやつたら相手に伝わるかの手段を手に入れることを今後の課題にしたい。
 - 写真是意思疎通手段を使わずに目に見たものを他の人にも伝えられる点ですごくすばらしいと思った
 - 誰かに共感してもらうことは琴線に触れたということなので、好みの中に入れてもらえたと思うと嬉しかった。
 - 何かストーリーがあるとその写真に深みがでたり、作者の意図を知ることができるということを実感した
 - 生徒作品タイトル
- 「合格祈願」「黎明」「幾何学モダニズム」「朝の静岡」「太陽」「咲かせよう！自分の花！」「灯篭の流れ」「騒がしいあかりの外で」「花と時代」「日の出」「神様交代式」「季節はずれ」「紅」「あめんぼ」



WWL拠点校 成果発表プレゼンテーションコンテスト 成果物 – WWL Presentation Contest

1. Purpose of the WWL Presentation Contest:

To showcase the inquiry-based research, English-speaking skills and on-stage presentation skills of junior high school and high school students. As well as being able to answer a question from the judging panel.

2. Date and Target Students:

Every February of every school year. The target students are of all grades but in this particular case for this particular presentation contest it is specifically for the 中3 and 高1 levels.

3. Process / Activities with inquiry mindset

The process begins at the beginning of the school year in which students reflect on a topic that matters to them. Upon deciding on a topic, the students conduct inquiry-based learning by reviewing past and current statistics and offering ideas, solutions and conclusions.

4. Reflection and Achievement / Transformation in Students' skillset and mindset

H1 - S.H.'s Reflection: Winner of the WWL Presentation Contest

Through this presentation, I was able to think deeply about what I consider to be problems and what other people consider to be problems. I was able to have my own axis for how I will think about and tackle problems in today's society.

In addition to the content, I learned so much from the presenters and teachers about "how to present in a way that draws others in". When I gave presentations in English classes, I always looked between the desks instead of looking people in the eye, or my hands were frozen in the air, and I was not able to present in a way that would attract the interest of the audience. I would like to make use of what I learned from this global presentation in the future and give a presentation that will completely change the atmosphere of the class.

5. Students' Reports / Products

- **Presentation Script and Power Point by H1 S.H.**

Building a More Inclusive Society for People with Disabilities

Good afternoon, everyone. I want to talk about an important topic that affects all of us: the environment for people with disabilities in our society. My mother works with children who have disabilities, and through her, I've witnessed some heartbreakingly stories of discrimination and exclusion.

Every day, countless young individuals struggle to fit into their peer groups at school. While it is true that advances in technology provide important support—such as hearing aids, white canes, and universal design—what truly matters is not just the tools we develop, but our willingness to embrace, include, and support one another. As a television actor once stated, "The lives of people with disabilities depend on others wanting to live with them, work with them, and support each other."

So, what can we do? First, let's talk about the barriers that exist. These are the inconveniences faced by people with disabilities that make their daily lives difficult. It's not just about physical obstacles; it includes social interactions too. Imagine wanting to communicate with a hearing impaired person: using written communication or learning sign language can make a significant difference. If you walk alongside someone who is visually impaired, walking slowly and offering your arm can create a safe passage for them. By taking small yet meaningful steps, we can help children with developmental disabilities navigate potentially overwhelming situations, allowing them to interact more freely in school and social engagements.

Now, let's look into the concept of "reasonable accommodations." This refers to making necessary adjustments to make sure that people with disabilities can participate equally in society. While many people are beginning to carry out reasonable changes for those with physical disabilities, understanding for those with mental disabilities remains flat. Often, misconceptions come up that accommodating these individuals is simply an act of selfishness. We must strive to educate ourselves and others about the unique characteristics of each person.

Also, education in schools can play an important role. I suggest we have specified courses within the curriculum to teach the positive aspects that challenged people have. If we help individuals understand the importance of reasonable accommodations—as an opportunity to elevate everyone—we can foster a generation that values empathy and inclusion.

Ask yourself: What if you or your loved ones became disabled? What barriers stand in your way? How would you like society to respond? By instilling this sense of compassion and understanding in our schools and communities, we prepare ourselves for unforeseen circumstances. In conclusion, I believe that creating a world where people with disabilities can seamlessly integrate into society is not just an ideal; it is achievable. Through dialogue, education, and reasonable accommodations, we can foster a culture of support and understanding. Let us commit to changing our mindset, because when we choose to engage with and learn from people with disabilities, we enrich not only their lives but our own.

This concludes my presentation. I sincerely hope that you take these ideas and apply them to society. Thank you for your time.

Works Cited

Yukiko Haraguchi: psychologist, Drama's name: Lastman, Actor's name: Masaharu Fukuyama
<https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201812/1.html>
<https://sdgs-compass.jp/column/5133>
<https://sam-eatlab.blog.jp/archives/13878807.html>



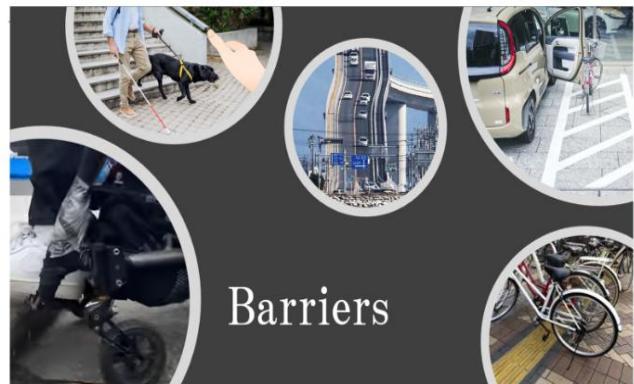
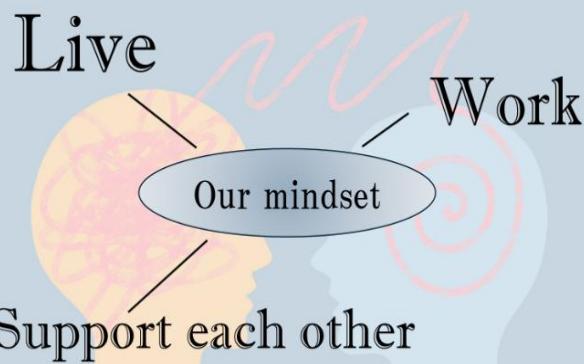
Building a More Inclusive Society for People with Disabilities

4-6



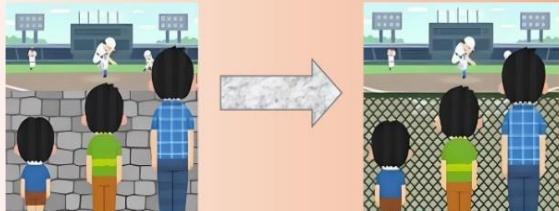
Hearing aids White canes Universal design

Technology



Barriers

Reasonable Accommodations



At schools

Reflection by Grade 9 student W.T. (Winner of the GLC Alpha category)

I was wondering how I can tell a broad audience about teen suicide in Japan because it is kind of a heavy topic and it is not often talked about. That's why I decided to tell about the current situation to show them that it's not somebody else's problem. I had 2 major challenges while practicing presentations. One was that I was nervous and afraid to present in front of many people and the other challenge was having eye contact and body language when giving presentations. To overcome being nervous and afraid while presenting, I found that I just needed to practice a lot. Practicing made me have more confidence in presenting in front of many people. For having eye contact and body language, I felt it was very good to present to friends or teachers and ask them for advice and feedback. This presentation contest has let me grow as a presenter because I have learned how to tell an audience what I want to tell, even if it is about a heavy topic or a difficult situation.

Presentation script and slides from Grade 9 – W.T. (Winner of the GLC)

Holding On, Together

Good afternoon. Before I begin, I warn that some may find my presentation to be a heavy and maybe shocking topic, but it is a very important one. My name is Wako Tamura, and today, I want to talk to you about teen suicide in Japan.

To start off, you may remember seeing these incidents reported on the news. In 2024 August 31st at Yokohama Station, a female high school student jumped from the 12th floor and fell on a female office worker. Both were taken to the hospital but soon both died. There was a similar story in 2022.

On October 23rd, near Hankyu Umeda Station, a male high school student jumped from the roof of a building and struck a female college student who was walking near the entrance of the building. They too were taken to the hospital but also died. These are only two cases, but there have been many more, where children or teens have decided to take their own lives.

To illustrate, this is the graph from the Japanese Ministry of Health Labour and Welfare. It shows us a breakdown of suicide numbers by age group. Please look at this red line. This red line shows us the suicide number for ages 10-19. As you can see, it has been steadily increasing in the last years. Also, comparing Japan to other countries, you can see that Japan has the highest suicide rate among G7 countries. After hearing the previous news reports, I was appalled. How could anyone so young make such a tragic decision? The findings of research indicate that these are common factors.

But, I also wanted to know from teens themselves. So, I asked a few classmates who were comfortable sharing with me. I found they all faced relationship problems among peers. For example, friends, senpai-kouhai, or others. Speaking from my own experience, there were a few times when I also felt depressed and isolated due to arguments with friends or classmates, so I can agree with this statement.

So are there any actions being taken? Well, yes! First, the government offers resources online and phone numbers where anyone can call or talk to either doctors or counselors for free.

Schools are taking action too. For example, Otsuma Nakano has Peer Support for junior high school grades. This is a series of special classes focused on how to take care of yourself and others, and how friends can help each other so that everyone feels safe.

But most importantly, I think the ones able to make the biggest change are us, students. Knowing that many of us face relationship problems at school, I think we need to be there for one another. I say this because during those times I felt troubled, being able to talk to a friend or peer is what helped me a lot.

It's important to look around carefully and ask how others are doing. Offer a listening ear to your classmates who are having problems or struggles. Form study groups to help each other improve. Be willing to talk through misunderstandings. When we hold on to each other, we make sure no one has to face their struggles alone. Thank you for your attention.

HOLDING ON TOGETHER

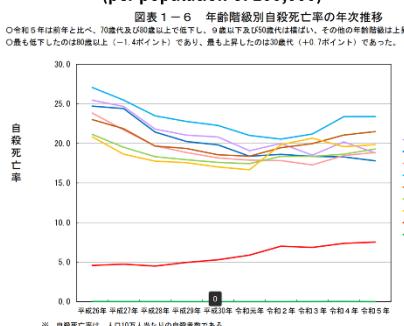
3-6

RECENT NEWS

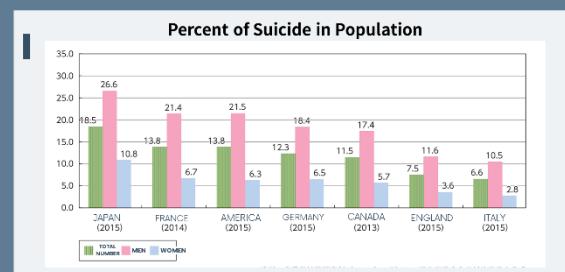
Jumping Suicide Cases

August 31, 2024 Yokohama Station	October 23, 2022 Hankyu Osaka Umeda Station Building
A female high school student (17) jumped from the 12th floor deck and struck a female office worker (32)	A high school boy (17) jumped from the roof and struck a female college student (19) who was walking near the entrance of the building.

Number of Suicides by Age Group (per population of 100,000)



G7 SUICIDE DATA



THE REASONS

- 01 Academic failure
- 02 Admissions worries
- 03 Path worries
- 04 Bullying
- 05 Discord with schoolmates (other than bullying)
- 06 Relationships with teachers
- 07 Gender discrimination
- 08 Other school problems
- + relationship problems

ACTIONS TAKEN

01		GOVERNMENT	CALL CENTER WEBSITE RESOURCES
02		SCHOOL	PEER SUPPORT
03		STUDENTS	BE THERE FOR EACH OTHER

Hold on to each other So that no one is alone

THANK YOU

<https://www.mhlw.go.jp/content/H30kakutei-01.pdf>
<https://jscp.or.jp/overview/truth.html>
<https://www.dailishincho.jp/article/2020/10300559/?all=1>
<https://www.mhlw.go.jp/content/1220100/001079456.pdf>
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240831/k10014567631000.html>

VI. WWL拠点校として - 今後に向けて

WWL拠点校 大妻中野中学校・高等学校 教頭 水澤 孝順

大妻中野中学校・高等学校は、「地球市民として、Society5.0 における持続的なより良い社会の創造と自らの幸せを紡ぐ」というスクールミッションを掲げている。そのミッションを果たすためのマインド、スキル、行動特性を育成するために体得する力として、

- (1) グローバル市民として、多様性を尊重し、さまざまな人と共感・共生できる力
 - (2) リスクを恐れず、新しい価値を創造するために様々な人と協議、交渉できる力
- の 2 つをあげている。

これは、2015 年度に大妻中野が、SGH として、特徴あるグローバル人材育成教育に取り組んできたテーマの発展形である。その土台となっているのは、(1) 自らの意識行動を俯瞰し、互いの個性を尊重することを目指す「自律」、(2) 多様性が本質であることを理解し、多様性を活力とすることを前提とした「協働」、そして (3) いま取り組んでいる学業はすべて地球の持続、人類の持続に繋がっているというこが意識できる「貢献」、とする 3 つの領域を柱とした生徒自身が探究的に取り組む教育の実践である。

このような長年の様々な取り組みで、大妻中野では Beyond School という行動指針が確立し、生徒が学校の外へ向かう取り組みに主体的にチャレンジすることを教育活動にビルトインされてきた。こうしたこれまでの取り組みの上に、2024 年度から新たに高大連携として、順天堂大学や津田塾大学との包括的な連携もスタートし、特に、地球市民として医療分野でも、誰一人取り残さない世界の構築(Global Well-Being)へ貢献できる人を育っていくという特徴あるグローバル教育の分野での取り組み目標が加わった。この目標を達成すべく、大妻中野中学校・高等学校は、管理機関である学校法人大妻学院のもとで、国内外の連携校と協働機関とともにネットワークの構築、発展を目指すWWLコンソーシアム構築支援事業へ申請したのである。

この Beyond School という教育手法を、WWL 連携校、協働機関との AL ネットワーク構築により、さらに一層、積極的に効果的に活用し、カリキュラム化し、その成果を共有することを目指し、今年度、取り組みを続けてきた。この成果レポートは、その取り組みの報告と生徒の成果物の一例をまとめたものであり、ぜひ、多くの皆さまからのご助言をいただければ幸いと考えている。

さらに、次年度以降に向けては、ALネットワークの一層の充実が課題である。協働機関、事業連携校と共に以下の①から⑦の取り組みにさらに進めていく。

- ① AL ネットワークコンソーシアムの構築と発展
- ② 「普遍的価値の探究」と「課題解決力の体得」のための文理横断型カリキュラム開発
- ③ カリキュラムと連動した海外連携校との協働による留学・交流プログラム整備・開発
- ④ カリキュラム開発・成果発表、グローバル教育成果発表会の連携校との協働による実施
- ⑤ 協働機関の大学と連携した Advanced Placement (単位認定を伴う) プログラムの実施
- ⑥ グローバル・セミナー、模擬国連など、Beyond School 連携・協働プログラムの実施
- ⑦ 高校生国際会議の計画、ミニセッションの実施と開催

特に、これからは、生徒自身がネットワークを活用し、各連携校が“Beyond School”による協働した学びの場を協働機関の専門的なリソースを活かして整備し、その成果を事業連携校、機関と共有させていきたい。そこからは、新しい生徒同士のケミストリーが生まれ、私たちが想像しえなかったプロジェクトが生まれるのではないかと期待している。

「個人がお互いに競争する - 個別の学校間で競争する」から「個人も学校も連携・協働」へ。「繋ぐ・行動する - “Beyond School” アプローチによる協働型の地球市民教育」の構築は、世界が同じ条件で競争するグローバル社会から、地球を包括的に捉え、協働できる人を育てることだと私たちは信じている。

令和 6 年度 WWL(コンソーシアム)構築支援事業拠点
大妻中野中学校・高等学校
成果報告レポート

Otsuma Nakano Junior & Senior High School
Student Works Anthology 2024

令和7年3月 31 日発行
Released in March, 2025
大妻中野中学校・高等学校 グローバル・センター

〒164-0002 東京都中野区上高田 2-3-7
Tel: 03-3389-7211
global@otsumanakano.ac.jp
<http://www.otsumanakano.ac.jp/>



Otsuma Nakano Junior and Senior High School